

# 榛名さんの苦労話

榛猫(筆休め中)

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは轟沈してしまった一人の艦娘のその後のお話…

ある海域にて敵艦の砲撃を受け轟沈した榛名  
しかし次に目を覚ますとそこは不思議な空間だった。

「貴女を転生させてあげましょう…人間として」

これは艦娘としての能力を持つた一人の少女の物語

※原作に突入しました

活動報告にてアンケート実施中です。そちらもご覧ください

# 目次

ルーキーの船出！その名はモンキー！	D・ルフィ	54
ルフィとハルナ！十年越しの再開！		
番外編【作者報告】		
長期休載のお知らせと各作品の主人公		
達		
作者報告コーナー	4	1
榛名転生記		
異世界からの転生？旅立て榛名！東の海へ！	14	
旅立ちの朝、榛名出立の時	20	
孤島の遭難者：サンジとゼフ	37	
東の海編（ルーキーの旅立ち）		
ココヤシ村の悲劇：アーロン一味襲来	43	
赤鼻バギー vs ザロ！逃げきれバラバラの身体	63	
ミズミズとゴムゴム！バラバラの脅威を打ち払え！	70	
シロップ村での出会い：その名はウソップ！	82	
屋敷での一騒動：ウソップ vs クラハドール？	91	
守れシロップ村！決意の嘘つきキャプ	102	

テン・ウソップ

116

ルフィ vs クロ！村を守る最後の戦い

の町を調査せよ！

245

138

明かされるハルナの過去…ベルメール

が語る悲痛な人生

254

宝島での再会！鎮守府より来たる新た  
な仲間！

150

海上のコツクを探せ！向かうはレスト  
ランバラティエ！

187

ランバラティエ！

201

さようなら、みんな…ナミとハルナま  
さかの離脱！

224

一味との思い出…語られるナミの想  
い

236

逃げきれウソップ！魚人と必死の鬼  
ごつこ！

ウソップを守れ！ナミの奔走！&ル

280

フイ、ココヤシ村到着！

夕立激怒！現れる謎の影

291

サンジ VS ギン！ハルナ、ココヤシ村  
到着！

323

軍

新たな仲間！サンジ加入！榛名、ゴサ

榛名轟沈！？ルフィの怒り大爆発！

336

深海の霸者、戦艦棲姫爆誕！ —

356

新たなる船出、さらばココヤシ村

臨！ —

ロストアイランド編

モクモクVSミズミズ！勝利の女神はどうぞどちらに微笑む！？

462

世に知れ渡る名前！賞金首になつた

三人！ —

383

次なる島へ！ローグタウン上陸

島！ —

468

艦隊から逃げ切れ！カームベルト突入

！？ —

489

サンジVSカルメン！東の海一の料  
新たな再開！華の二水戦登場！

395

理人対決！ —

410

接触！別世界からの訪問者！

446

軍艦島の伝説とアピスの秘密！

534

絶体絶命のルフィを救え！戦艦棲姫再

伝説の生物、千年龍とユウダチ

545

故郷を探せ、幻のノロストアイランド

！  
軍艦島からの脱出！海軍の追跡を振り

554

切れ！  
ロストアイランドを探せ！向かうは軍

568

艦島の東！  
辿り着いた孤島、龍の巣の手掛けりを

590

探し！  
龍じいを守れ！カゼカゼ v s カマカマ

600

龍じいを守れ！カゼカゼ v s カマカマ

608

！  
破れネルソンの陣！榛名の本領発揮！

竜の巣は何処だ！目覚めよ千年龍！

641

634



## 番外編【作者報告】

### 長期休載のお知らせと各作品の主人公達

一誠「そういうわけで、オラ達がここに集められたつちゅうわけか」

悟誠「お、俺にそつくりだ！でも口調が……」

幽々子「あらあら、ホントにそつくりね♪♪」

斎木『全く：僕は海域の問題を調べるので忙しいというのに何故こんなところに来なければならなんだ……』

17島「まあアイツが動かなきや俺達も動けないんだから仕方ねえだろ？」

上条「上条さんは今度は何をやらされるのか気が気ではありませんことよ？」

吹雪「あはは……苦労してるんですね」

榛名「仕方ありませんよ：作者は気まぐれですから」

斎木『ん？吹雪、お前のところの提督はどうした？』

吹雪「それが…：なんで俺がそないなめんどい所にいかなあかんねん…俺ア嫌じや、いかん！吹雪ちゃん代わりに行つてきてくれ』と言われてしまつて……』

幽々子「责任感のない人なのね…』

一誠 「どんでもねえ奴だな…オラがぶつ飛ばしてやる！」

悟誠 「止めとけって、お前にぶつ飛ばされたら命がいくつあつても足りねえよ……」

上条 「全くもつてその通りでせう……」

17島 「醜い肉のオブジエの出来上がりだな……」

斎木 『霧島と同意見だ……』

榛名 「榛名もそう思います……」

一誠 「ひつでえな：おめえ達……」

幽々子 「それだけあなたは強すぎるのよ…何よ敵を躊躇つて……」

一誠 「んなこと言つたら幽々子だつて無双してんじやねえか……」

幽々子 「あなた程酷くやつてはいませんわ！」

悟誠 「どうかな？にしても良いおっぱいだあ……♪」

17島 「お前、18号に殺されるぞ……」

吹雪 & 榛名 「…………」 [引き]

悟誠 「引かないでごめん！俺が悪かつた！」

上条 「うわあ……。俺のどこでそんなことしてたら即殺されちまうよ……」

斎木 『まずそんなことをする意味がわからない……』

一誠 「はははっ！おめえの場合裸見れねえもんな」

### 3 長期休載のお知らせと各作品の主人公達

幽々子「笑い事じやないと思うわ！」

17島「その通りだな……中の奴も引いてるじゃないか……」

上条「にしても、どうしてまた長期休載なんだろうな……」

一誠「おめえ持ち前の不幸が作者にも移つたんかもしんねえぞ？」

上条「それだけはマジで勘弁してくれ……」

榛名「榛名には分かりません……」

齊木『どうやら気力が続かないらしい……またその内気が向いたら書くそうだ……』

悟誠「気が向いたらつ……いつたい再開は何時になるんだよ……」

幽々子「それも作者の気まぐれなのよね……」

一誠「その通りなんだよな……つと、そろそろ終わりみてえだ！んじや、読者のみんな

！またな！」

全員「（ご）迷惑をお掛けしますが少々お待ちください……」

# 作者報告コーナー

アイルーくん「というわけで始まりました！作者報告のコニニャー！」

斎木『ニヤ…？

幽々子「多分、なとニヤ、をかけたんだと思うわ～」

17島「なるほどな…」

アイルーくん「…とりあえず自己紹介していくニヤ！」

(((((無理やり話逸らした…))))

---

上条 「じゃあまずは俺からだな。

『新約、とある提督の幻想殺し』で提督をやつてる上条当麻だ』

悟誠 「次は俺だな！

『龍に選ばれし赤龍帝』で孫悟空の義息をやつてる孫悟誠だ』

一誠 「次はオラだな

『DRAGONBALL D改』で赤龍帝やつてつぞ、兵藤一誠だ！』

榛名 「お次は私ですね

初めまして『榛名さんの苦労話』で一味の姉役をやらせていただいてます。榛名です』

齊木 「次は僕か…。

『鎮守府提督のΨ難』で提督をやらされている、齊木楠雄だ…。

アイルーくん 「お次はボクだニヤ！」

『女王領域の獣人種』でニヤンター、ニヤイダーをやつてるアイルーですニヤ！』

「お次は私ね♪♪

『駒王の街の亡靈姫』でオカ研の副顧問をさせていただいてます西行寺幽々子と申します」

17島 「次は俺か…。

『17号は戦艦霧島に憑依するようですよ?』で霧島をやっている。17号だ』

霧島 「私が中にいる元の霧島です』

燐空 「最後は俺か…。

『Re, 喪失から始める幻想生活』で放浪者をやつてる。靈焰路燐空だ。

呼びにくければリクつて呼んでくれ』

アイルーくん 「ありがとうございますニヤ!ここにいる人たちがギオス or 森猫の書いている作品の主人公たちだニヤ!これからこの人たちと今後の予定について話していくニヤ!』

上条「つーか、今度はなんで俺達集められたんだ？」

悟誠「また長期休載とかか？」

一誠「それはさすがにねえんじやねえかな？」

槇名「そうですね、私達は全く動いていませんが一部の人達は良く動いてましたから、  
私達は全く動いていませんが」

アイルーくん「ニヤア… そこでボクを見られても困るのニヤ…。

今回は今執筆している全作品に関するこことニヤ！」

幽々子「全作品に関すること？」

17島「あまり動くことのない俺達にもか？」

リク「いつたいどういうことなんだ？」

アイルーくん「作者が言うにはようやく時間が取れ始めてきたから執筆作品すべての更新を再開するという事だつたのニヤ！」

『『ツツツ  
』』

上条「あ、あの作者がか？」

悟誠「一本にハマりだしたらそれしか書かないアイツが!?」

一誠「いつてえどういう心境の変化だ!?」

榛名「榛名は…驚きで言葉が出ません…」

齐木『マインドコントロールを使つたわけでもないのにどういう訳だ…？

幽々子「あの子は気まぐれなところがあるものね♪」

17島「気まぐれすぎて俺達は気が氣じやないんだがな…」

燐空「17島さんに激しく同意だよ…」

アイルーくん「更新頻度はボクは知らないけど以前やつてたらしい週替わり更新にしていくらしいニヤ」

上条「ああ、この方法ね…」

悟誠「大丈夫なのか？」

一誠「まあアイツの事だから何か考えがあつてのことなんじやねえか?」

榛名「そ、うだと良いのですけど…」

斎木『案外何も考えていないかもしけんぞ?』

幽々子「考へていることを祈るばかりね♪』

17島「問題ない、更新が滯ることがなればそれでな」

燐空「作者信用ねえんだなあ…」

上条「そういうや思ったんだけどさ、週替わりにするつてことは前みたいに作品ごとに組み分けがあるんだろ?」

悟誠「そういういえば前はあつたよな、何がありましたつけ?」

一誠「えーっとな…あん時は確か、前の『ドラD』が週六更新で…」

悟誠「『龍選』が週五だつたつすね」

棟名「『棟クロ』は週四でした」

斎木『おまけで『新約とある』と『鎮Ψ』が週三だつたな…。

幽々子「『亡靈姫』は週二の更新だつたわね、確か」

17島「『17戦霧』は週一更新だつたな、途中で止まつたが…」

燐空 「その頃からやつてたのかよ… で、今回はどういう分け方なんだ?」

アイルーくん 「それについては後から書く活動報告を見て欲しいそうニヤ」

斎木 『露骨な誘導だな…。』

アイルーくん 「さつきも言つた通り、詳しいことは作者の活動報告を見て欲しいニヤ  
!」

上条 「どうやら今後の更新の予定や優先度なんかも書いていくつもりらしい」

悟誠 「つもりねえ、いつたいそれがいつまで続くのやら…」

一誠「まあ試してみたらいいじゃねえか、色々やつてみりや方法を思いつくかもよ?」

棟名「今は作者を信じるしかないですね…」

斎木『僕の所は直に終わるだろうから早めにしてほしいものだが…』

幽々子「それも作者のやる気次第かしらね~」

17島「久しぶりに動けるんならそれでいいさ」

燐空「17島さんの言う通りですね」

『『『そういうことですので、こんな作者ですがよろしくお願ひします』』』

# 榛名転生記

異世界からの転生？旅立て榛名！東の海へ！

s i d e 榛名

沈んでいく…

暗い…暗い海の底へ…

(呆気ない最後でしたね…)

私はそんなことを考えながら暗い海底へと沈んでいく

「これが運命ならば受け入れます。ごめんなさい…」

それを最後に私は意識を手放した。



「——い——きなさい——」

## 15 異世界からの転生?旅立て榛名!東の海へ!

誰かの声が聞こえる? 誰? :

「・・・起きなさい、起きるので戦艦娘 榛名」

その言葉に私は目を覚ました。

「ここは…? もしかして深海の世界ですか? それに貴方はいつたい…?」

「もつともな疑問ですね…ここは靈界…深海ではありません、それと私は人が言うところの神のようなものです」

カミ? 聞いたこと無いですね、カミっていつたい何でしよう?

「どうやら神を存じない様子…それならばいいのです。

これからもつと重要なことを話さなければなりませんから」

「重要な話? どういうことですか?」

「どんな話なんでしょう…」

「貴女は自身の置かれている状況を理解して いますか？」  
私の状況？ そういえば！

「確かに… 敵の攻撃を受けて… 轟沈して…」

「はい、それで合つてます、貴女は確かに轟沈しました。  
敵機の爆撃を受けて…」

「やつぱり… そう… でしたか」

共、どうして私はこんな所にいるでしよう？ 金剛お姉様達は無事でしようか？

「大丈夫です。あなたの姉妹達は全員無事ですよ」

「ホントですか！ 良かつたです…！」

「話を戻しましょう…。最後まで戦い抜いたせめてもの労りとして、貴女には異世界に  
転生してもらいます…。人間として」

そう言われて私は少し頭を捻る

「…え? もしかして」

「簡単に説明すると、貴女は蘇ることが出来るのですよ」

!? 生き返られる? また、提督のお役に立てるのですか?

「最初に言つておきますが、貴女が転生するのはあなたが元いた世界ではありません」

「え? 違うのですか」

ならどこに…

「貴女に転生してもらう世界は海賊たちが海を闊歩する世界です」

海賊? 海賊とはいつたい…

「そこには深海棲艦はいないのですか?」

「はい、その世界に深海棲艦はいません、なので貴女はあなたが思う通りに生きるのです」

私の思う通りに…もう深海棲艦とは戦わなくていい…

本当にそれでいいのでしようか…榛名だけこんなこと

「分かりました。カミ様ご配慮くださいありがとうございます。」

「いえ、では転生する前に貴女にはこれを渡しておきましょう  
そう言つて一つの果実を渡してくるカミ様

私はそれを受け取ると

「あの… これは？」

「それは悪魔の実、貴女が向こうで目覚めたらそれを食べるのです  
きっと貴女之力となってくれるでしょう…

では始めます、戦艦榛名、貴女が次に目を覚ました時、あなたは人間になつていてるで

しょう…でも、忘れないでください貴方には艦娘の力が眠っているということを…

その言葉と共に私の視界が白く輝きだし、私は再度意識を失うのだった。

side out

side 神

榛名が転生した後、残された私は考えていた。

これで本当に良かつたのかと…

榛名のいた元の世界では妹を失った金剛型の姉妹たちが泣き崩れている  
轟沈した艦娘は助からない、これは運命なのだ

「こんなことしかしてあげられない自分が嘆かわしいですね…」

そう言つて私は転生していった榛名の世界の様子を見守るのだつた。

# 旅立ちの朝、榛名出立の時

s i d e 榛名

こんにちは榛名です。いえ、今はハルナでしたね：

カミ様にこの世界へと転生させてもらってから、十年の月日が流れました。  
最初に目が覚めた時は自分が赤子の姿になってしまっていて、とても戸惑いました。

でも両親はそんな私を暖かく見守つて育ててくれました。

そんな風に平和な時が流れて今に至るのですが、私は今日船出します。  
両親や村の方にはもう話をしてあるんです。

「それじゃあ、村長さん母様、父様、それに村の皆さん、行つて参ります。」

「道中、気を付けてね」

「何かあればすぐに戻つてくるんだぞ」

「皆お主の無事を祈つておるからの」

「母様、父様、村長さん、ありがとうございます。」

「では、ハルナ！いざ出撃します！」

村の皆さんに見送られて私は海へと旅立ちました。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「… そろそろいいかしら？」

村を出てからかなり沖に出ました。ここなら村の方達にも見えませんよね？

私は荷物の中から一つの毒々しい色の果実を取り出します。

「カミ様は私が目覚めた時にこれを食べろと言つていたけれど… これ、食べられるのかしら？」

見るからに食べてはいけない色をしているのよね…

でも、わざわざ神様がくれたものだもの、食べなきや失礼よね！  
私は意を決して果実に口を着けました。すると…

「！…うつ…」、「これは…」

凄い腐臭…それにとても不快になる舌触り…

それでいて味も人の嘔吐物を食べさせられたかのような…気分の悪くなる味…  
これを全部食べなくちやならないの…？」

「でも、私を思つての行動でしようし…ハルナ！全力でいただきます！」

私は無心でその果実を平らげるのでした…。うう…吐きそう…

なんとか、果実の不快感から抜け出した私は次の行動に移りました。  
それは生前使用していた艦装を装着することです。

「とても久しぶりに着けてみたけれど…問題ないようでよかつたわ」

軽く動きを確認してから私は船から海に降ります。

少々の浮遊感と共に艦装が着水したことを確認して、

私は船と艦装を括りつけて走行し始めました。

「やつぱりこれよね、海と言つたら」

深海棲艦とは戦わなくてもいいですけど海賊がうようよいるって話を聞いたから  
またこれが役に立ちそうだわ。

「どのくらい使うか分からぬけれどまたお願ひね…」

私は主砲をそつと撫でると海を進んでいくのでした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

あれからしばらく航行して小さな村を見つけました。

とりあえず情報を集めようと私は酒場に行つたんです。そしたら

「なつ！お前これ！ミズミズの実じやねえか！」

酒場で知り合つた赤髪のお兄さんに先日の不快な木の実の話をしたら  
見せてくれと言わされて絵に描いてを見せたら凄い剣幕で話し始めたんです。

「ミズミズ？それはいつたいどういう物なのですか？」

「悪魔の実の一つさ、ロギア自然系の実で食べた者はあらゆる水を操り、変化させることが出来るシロモンだ」

私はその言葉に驚いてしまいます。

「私にそんな力が…」

「能力者ならだれもが羨む能力だぞ？それ、なんせ海に落ちたとしても水を操つりや自力で脱出することも可能なんだからな」  
その言葉に私は疑問を覚えます。

「ほかの能力者さんが羨むというのは何故なのでですか？」  
すると赤髪のお兄さんは嘘だろ？と言う顔して

「お前さん知らないのか？能力者の全般はな海水と海牢石が大の弱点なんだ。  
その一つの弱点をお前さんは無効化できるんだ、そりや羨むだろうよ」  
そこまで聞いて私は納得しました。

ほかの能力者さん達は海に落ちたら戦えないんですね  
でも私にはそれができる…なんだか凄い力を貰つてしまつたのではないでしょう  
か

私が考え始めたのを見て、赤髪のお兄さんは隣にいた子供をからかい始めました。  
どうやらその子はお兄さんの船に乗せてもらいたいみたいです。

でもお兄さんはそれを笑つてからかうだけ、なんだか微笑ましいです。  
子供が背伸びする姿は本当に見ていて和みます……  
すると突然酒場のドアがけ破られました。

「邪魔するぜ……」

その低い声と共に中に入ってきたのは  
茶色のコートのようなものを着た中年の男の人でした。

「ほう……これが海賊っ言う輩か、間抜けたツラしてやがる」

そう言うと男の人はカウンターの前まで来て足を止めました。  
お店の女将さんが対応するために声をかけます。

「……いらっしゃいませ。」

「俺達は山賊だ……が、別に店を荒らしに来たわけじやねえ……酒を売つてくれ、

樽に十樽程な

その言葉に女将さんはお酒の在庫が切れてることを伝えると

「ん？おかしな話だな、海賊共が飲んでんのはありやなんだ？水か？」

その反論に女将さんが今出でているので全てだということを伝えると

「悪いな、俺達が全部飲み尽くしちまつたみたいで」

赤髪のお兄さんが口を出したなんです。

「すまん、これでよかつたらやるよまだ栓も空けてない」

そう言つて一つの瓶を差し出すお兄さん。

男の人はそれをたたき割つてしまつたのです。

『つ！』

女将さんと子供が息をのんでいるのが聞こえます。

「俺はな、800万ベリーの賞金首だぜ？こんな瓶一本じゃ寝酒にもならねえ」

「……ああーあ…床がびしょびしょだ…悪かつたなマキノさん、雑巾あるか?」

「あ、私やりますから!」

そう言つて女将さんが表に出ようとした時でした。

男の人が腰につけていた剣に手をかけて降りぬいたのです。

私はそれを素早く動いて受け止めます。

「ああ?なんだこのガキ…」

「これ以上の暴挙は許せません、まだやるのでしたら私がお相手します」

「はあ?ガツハツハツハツハ!お前みたいなガキに何ができる  
そんなに死にたいのなら殺してやる!」

男の人が剣を戻し再度切りかかってきます。

私はそれを平然と受け止めます。

「なつ！ なんだこのガキは…」

「あなた達の身勝手さ、許せません！ 嘰らいなさい！」  
『アクア・ボール』

すると扉の外から大量の人間大ほどもありそうな大きな水の球が飛んできて山賊たちを閉じ込めたのです。

『なつなんだこりやあ！ あいつ！ 悪魔の実の能力者か！』

『と、とりあえずここはすらかるぞ！ このままじや殺される！』

大慌てで逃げていく山賊たち、私はホツと息をつきました。

「ありがとな、助けてくれて、ちょっと危なかつたからな」  
赤髪のお兄さんがお礼を言つてきます。でも

「当然のことでしたまでです。お礼を言わることなんて…ハルナにはもつたいないで  
す」

「それでモサ、助かつたことには変わりはないんだ、だからありがとう」

その後、子供：ルフィくんがお兄さんに怒つていました。

何で戦わないんだ：とあんなのカツコ悪い、海賊じゃない……と

私はきっと何か理由があるんだろうと考えてその話を静かに聞いていました。

その後、ルフィくんがやけになつて何かを食べていたところを

お兄さんが慌てて止めていたというちよつとしたひと騒動があつたのはまた別の機会に

・ ·

その数日後のことです。

村の中を酒場の女将さんが大慌てで走っていました。

どうかしたのかと声をかけると、ルフィくんが以前の山賊に喧嘩を売ったのだそうです。

私はその話を聞き、すぐにその場所に向かいました。

現場に着くとルフィくんが山賊の頭に踏みつけられていきました。

あの話は本当だつたようです。

私が止めに入ろうとするとそれを制止する人がいました。

あの時の赤髪のお兄さんだつたのです。

お兄さんは私を下げるとき、山賊の方に歩いていきました。

そして、その数分後には山賊の部下たちはお兄さんの手下の手によつて、全員伸びていました。

それを見た山賊の頭は慌てて煙幕を張りルフィくんを連れ去つて逃走しました。

私は人目につかない場所までいくと電探レーダーをつけました。

すると、海の方に二つの反応を見つけました。

私はすぐにその反応のある方に向かいました。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

しばらく海を進んでいると、そこには目の前で船ごと海王類に噛み殺される山賊の姿

と

離れたところでおぼれているルフィくんの姿を見つけました。

山賊を噛み殺した海王類はルフィくんに襲い掛かります。

私は急いで向かいいますが間に合いません…

もう海王類はルフィくんの目の前に迫っています。

駄目！間に合わない！主砲でもこの距離では届きません！どうしたら！  
諦めかけたその時でした。

海王類に呑み込まれる寸前にルフィくんを助け出したのはあのお兄さんでした。  
ルフィくんを食べ損ねた海王類はサ再度攻撃を仕掛けようとします。

私は勢いよく海を走り、海王類に砲撃を浴びせました。

砲撃を浴びた海王類は身体に大きな風穴を開けて沈んでいきました。

「あ！お前は！あん時の水の姉ちゃん！」

「助かった…。お前さんには二度も助けられちまつたな、

それにもお前のその姿は…」

お兄さんがこちらに気づき不思議そうにこちらを見ます。

私は仕方なく艦娘の事を少しだけ話しました。

「なるほど、それで船の魂を受け継いで生まれたのがあんただつたつて訳か」

「はい、その通りです。出来ればこのことは内密にお願いできますか？」

「ああ…構わない、これは誰かに話していい内容でもなさそうだ」

「ありがとうございます。それでは戻りましょう」

私は安堵してお礼を言いました。

そして、お兄さんとルフィくんを担ぐと村に引き返しました。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

あの事件から数日後、お兄さん…赤髪のシャンクスさんは村を出ていくことにしたそうです。

村の方々に惜しまれながらもシャンクスさんはまた海へと旅立つていきました。  
大事な麦わら帽子をルフィくんに預けて…

私もそろそろ準備をしなければいけませんね。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

シャンクスさんが旅立つてから数日後、私は村を出る為に

村の方々に挨拶して回っていました。

そしたらルフィくんに呼ばれたんです。

呼ばれるままに向かうと、ルフィくんが突然足を止めて言いました。

「姉ちゃんもいっつらうのか？」

「ええ、さすがにこれ以上いたら村の方々に迷惑がかかるし、それに、

私はまだ世界を見て回れていないもの」

「世界を見て回る？」

ルフィくんが不思議そうな顔をしています。何かおかしなことでも言つたでしょ  
うか…

「ええ、世界は広い、まだまだ私が知らないこともたくさんあるわ、  
だから私はそれを知りたいの」

「そつか、じやあオレがもつと大きくなつて海に出たら一緒に海賊やろう！  
そうしたらいろんなところ見に行けるしな！」

私はその言葉にクスリとしてしまいます。

「なんで笑うんだよ！」

「いいえ、面白そうだなと思つて…

ええ、いいわ、あなたが大きくなつて私を見つけられたらね」  
その言葉にルフィくんは顔を輝かせ

「絶対みつけてやる！そんで姉ちゃんと一緒に海賊をやるんだ！

絶対強くなつて姉ちゃんのどこまでいつてやるからな！」

「ええ、楽しみにまつているわ、じゃあ私はあなたが海に出るまで東の海にいるわね」  
（イースト・ブルー）

「ああ！絶対すぐ追いついてやるからな！」

はいはいと、私は笑つてその場を離れました。

後ろからは『うおおおおお!!やつてやるぞおおー!』

と、声が響いていました。

その後、残りの人達に別れを告げて、私はまた海に出るのでした。  
次の出会いがどんなものになるのかと期待を胸に秘めて

# 孤島の遭難者…サンジとゼフ

s i d e 棚名

こんにちは、ハルナです。

最初の村を出てから数日が経ちました。

まだ次の島は見えてきません…。

「何もないわね、もう少し進んでみるしかなさそうね」

艦装をつけていてもここまで何もないなんて珍しいですね。

そうしてしばらく進んでいると、遠方に小さな小島が見えたんです。

その後に…

『おーい！おーい！たすけてくれえ！ジジイを！ジジイを助けてやつてくれえ！』

そんな声が耳に入り私がよく目を凝らすと…

その小島に手を振っている人影を見つけたんです。

(遭難者でしようか…?)

私は急いで小島に向かいました。

小島はかなり高くなつていて、自力では降りてこられそうもありません。

私は主砲を構えて上にいる方達に声をかけます。

「上方々、今からそちらに向かいますから少しだけ離れていてください」

『あ、ああ‥』

その後にズルズルと何かを引きずるような音と共に足音が遠ざかっていく  
それを聞いた私は海水を操り、

引いている船ごと浮かび上がらせて島の上に降り立ちました。

「ふう、お待たせしました。ケガはありませんか？」

「お、お前、俺達を助けに来てくれたのか！」

早く助けてくれ！この爺さん死んじまい そうなんだ！

助けてやつてくれ！」

みると、そこにいたのはガリガリに痩せ細つた老人と

同じように痩せ細つたぐるぐる眉毛の少年がいました。

「これは酷いですね：私の船に食料がありますから一度船へ」

「本当か！ ジジイは助かるんだな！ 良かつたなジジイちゃんとした食料が食えるんだ！」

「ああ、これで助かるな…」

「とにかく船にどうぞ、お爺さんの方は私が運びますから

君は先に船に乗つていてくれる？」

そう言つて私は倒れているお爺さんを抱えて船に載せます。

「それじゃあ今から海におりますから船にしつかりと掴まつていてください」

そう言つた直後島の反対側から大量の水が流れきました。

その光景に驚いた少年が怒鳴ります。

私は少し笑んで答えます。

「大丈夫ですよ、見ていてください」

すると水は船を浮かび上がらせるピタリと止まりました。

「え？ 浮かんだ？」

少年が驚きの声を上げます。

私はそのまま水を操ると海へと船を戻しました。

「ふう、これでよしです……。もう離しても大丈夫ですよ」

それを聞いて少年が安心した顔をします。

「は……はは……助かったんだ……俺達……」

「あとは少し休んでいてください、食料はまだ蓄えがありますから」

「そうか……礼を言うぞ……娘……」

「いいえ、当然のこととしたままでですから、落ち着いたら休んでいてください  
私は島を探しつつ船を引きますから」

それだけ伝えると私は船を引いて走り出しました。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

二人を助け出してから数日後、なんとか村を見つけました。

私はそこに二人を預けてその村を離れました。

「ま、待つてくれよ！」

その声に振り返ると、そこのはあの少年がいたんです。

「もう行つちまうのかよ？俺、姉ちゃんに何も恩返しできてねえ…」

俯きながらそう泣き叫ぶ少年に私はそつと近づいて抱きしめると

「恩返しなんて考えなくていいの…あなたはの方とレストランを作り上げて…そうしたら私もうれしいわ…」

「つ！あ、あつ…！あ、あつ…！分がつだよ！俺、あのジジイと絶対レストランを作り上げる！だからその時は姉ちゃんも食べに来てくれよ！最高の料理を食わせてやるからな！」

その言葉に私は微笑んで

「ええ、楽しみにしているわね…必ずお邪魔させてもらうわ…それじゃあね、サンジくん」

そう言つて私は村を後にしました。また次なる出会いを求めて…

## 東の海編（ルーキーの旅立ち）

### ココヤシ村の悲劇：アーロン一味襲来

s i d e 棟名

こんにちはハルナです。

今、私はココヤシ村と言うところに来て います。

あの二人と別れてから数日：しばらく海を進んでいたらこの村に辿り着いたんです。  
今はある方のお家にお邪魔しているんです。

「仕事、手伝ってくれてありがとうねハルナ」

「いえ、これくらい当然の事です。家に泊めてもらってるんですから」

そう、私は今ベルメールさんと言う方の家にお邪魔しているんです。

「そうかい？それじゃあ早く帰つて帰つてご飯でも作ろうか

ハルナがしてくれるお金もあるしねいつもより奮発しちゃうよ！」

ベルメールさんが言つていたように私はお金を出しているんです。

お金はどうしているかつて？道中に見つけた海賊たちから奪つてました。悪魔の実の能力は凄いですね、水で乗組員の自由を奪つてから

ゆつくり探せるんですもの、おかげで結構な額のお金が集まりました。家に着くと、ナミちゃんとノジコちゃんが喧嘩していました。

『——っ!!』

相変わらず仲がいいのか悪いのか…

私は止めなくていいのかという意味もかねてベルメールさんを見ます。

ベルメールさんはいつもの事だと首を振つて中に入つていきました。  
すると…：

「でも本当の妹じやないじやない！わたしたち、血はつながつてないもん！」

「つ！ナミ！」

パンツ！

その言葉を聞いてベルメールさんの様子が変わり、

いきなりナミちゃんを張り倒したのです。

「ちょ、ちょっとベルメールさん！何してるんですか、落ち着いてください！」  
私は慌てて止めに入ります。

「退いてハルナ、この子にはちゃんと言い聞かせないといけないの  
血が繋がつてないからなにつ！… そんなこと、もう二度と口にしないで！」  
ナミちゃんは涙目になりながらも負けじと叫びます。

「なによ…ベルメールさんだつてホントのお母さんじやないじやない！  
わたし達なんかいない方がいいんでしょ！」

「そう、あんたがそう思うんだつたら好きなさい…どこへでも出ていくといいわ」

「ちよつと！ベルメールさん!? 急に何を！」

「っ！出ていくわよ！」

「ナミ！ナミ！」

勢いよく家を飛び出していつたナミちゃんに声をかけるノジコちゃん  
それから少し時間が経つて…

「…ノジコちゃん、ナミちゃんをお願いできる？」

「え？ うん」

私の言葉を聞いてノジコちゃんはすぐに家を飛び出していきました。  
わついはベルメールさんに声をかけます。

「大事な子に言われたくない気持ちと言うのも分かります…  
でも、あれはさすがにやりすぎだと思います。

あのくらいの子供はなんでも反抗したくなる年頃なんですから…  
大人の私達がそれを覚えさせてあげないと…」

「… そうだね、さすがにさつきのは大人げなかつたかも…ごめんよハルナ、

情けないね…自分より年下の子供に説教されるなんて…」  
どうやらわかつてくれたみたいですね、良かつたです。  
するとその時、電探に複数の反応がありました。

その直後の事です。

「邪魔するぜ? シャーハツハツハツハツハツハ!」

いきなりトゲトゲ鼻の男が入ってきたのです。

「アンタ、アーロン一味だね? この家にいつたい何の用だい!」

アーロン一味? それってあの魚人の…:

「シャーハツハツハツハツハツハ! 今日からこの村は我々の支配下となつた。

大人一匹10万、子供一匹5万、家族分払えば命だけは助けてやる、  
ありがたいお告げだ」

それを聞いたベルメールさんがいきり立つたように怒鳴るのに重ねるように私は声  
を書上げます。

「10万だつて!? そんなもん 「ベルメールさん!」 なんだいハルナ」

「早く、払つてください：そうじやないと危険です…」

「ほう？ そこのガキはよくわかってるじやねえか…」

お前のガキか？」

「その子は少しの間だけ泊めてあげてる子さ、この子は関係ないだろ！」

手を出すんじゃないよ！」

それを聞いたアーロンはニヤリと口をゆがめたその時でした。

『ベルメールさん!!』

タイミング悪く二人が帰つてきてしまいました…。

「ん？ なんだまだガキがいたか、そこのガキは面白そعدだから連れて来い…ん？」

そう言つて家を出ようとしたアーロンが机の上に置いてある一枚の紙を見つけました。

「なんだこりや？海図か？」

「ダメ！それはあたしが書いた大切なものよ！かえして！」

「ほう、これはお前が描いたのか：貴重な人材だ、そのガキも一緒に連れていけ」  
そう言つてナミちゃんを連れ出そうとするアーロンにベルメールさんが飛びかかりました。

「誰がアンタ達なんかに連れて行かせるものか！」

でもアーロンはにやりと笑うだけです。

するとベルメールさんの背後に剣が迫つていたのです。  
私は瞬間的に走つてベルメールさんを突き飛ばします。

「ベルメールさん!! 危ない！… うつ… !!」

その直後私の背後から重い衝撃が私を襲いました。

「つ!! ハルナ!!」

ベルメールさんの叫び声を最後に私の意識は深い闇の中へと落ちていくのでした。

気が付くとそこは知らない部屋の中でした。

「……」は……？」

「あ、ハルナお姉ちゃん……起きたんだ……よかつたあ」

声のした方を見るとナミちゃんが私のベッドのすぐそばにいたんです。

「ええ、なんとかね……とりあえず今までの事を教えてもらつてもいい?」

「うん……」

ナミちゃんから語られた内容は酷い物でした……。

私が気絶させられた後、私と共に連れてこられたナミちゃんは

一味の測量士に入れと言われたそうです。

そして、村の自由を買い戻したければ

一億ベリーで買い戻すしかないと言われたそうです。

そう言つたナミちゃんの腕にはアーロン一味のタトゥーが入つていました。  
私の腕にも…

私は許せませんでした。こんな小さな子に海賊をやらせるアーロンを…  
私は急いでアーロンのもとに向かいました。

「アーロン！」

「起きたようだな、何か用か？」

「貴方を殺しに來ました！」

その瞬間、アーロンを大量の水が首から下を呑み込みました。

「ほう…貴様、能力者かだが残念だつたな…魚人は水の中では最も強いということを

…」

そう言つて水の塊から抜け出そうとするアーロン……ですが

「そろはいきません！アクア・キュリング！」

すると、アーロンを包んでいた水の塊が固まりました。

「なつ！なにい！」

「今の硬度はダイヤモンド並みでしようか、このままあなたを絞め潰すことも可能なんですよ？」

そう言いながら徐々に範囲を狭めていきます。

「分かつた、なら、取引をしようじやないか」

「取引？」

「そうだ、残念だがお前たちはもうここから抜けることはできない  
なのでそちらの条件を呑む、これでどうだ？」

「… 分かりました、ではこちらの条件は一つです。

ひとつはナミに害をなさないこと、

それともう一つは私とナミを常に一緒に行動させること、これが条件です。  
それを守れないようであれば…」

私は艦装を装着し、主砲をアーロンの顔面に突きつけます。

「貴方の身体に大きな風穴があきますから、肝に銘じておいてくださいね？」

「… ああ、わかつた、約束しよう」

その言葉を聞いた私は拘束を解き部屋へと戻るのでした。

そして、これから起ころる地獄の生活は約十年にも及ぶのでした。

# ルーキーの船出！その名はモンキー・D・ルフィ

s i d e ルフィ

よつ！俺はモンキー・D・ルフィ！海賊王になる男だ。  
シャンクスやハルナと別れてから十年が経つた。

俺はようやく海に出ることが出来たんだ！

まずは仲間を探して海賊団を作らねえとな！

でも！一番にすることは

「待つてろよ！姉ちゃん！すぐに追いついてやるからな！」

そこで仲間になつてもらつて一緒に世界をめぐるんだ！

ワクワクすんなあ！ いつたいどんな冒険が待つてんだろうなあ？  
姉ちゃんは俺が海に出るまでは東の海イースト・オブ・にいると言つてた。  
何が何でも探し出して仲間になつてもらうんだ！

俺がそう意気込んでいると、突如船の勢いが増した。

「おわっ!?なんだ?」

見ると前方に大渦が発生していた。

「おお！大渦だ！スッゲエ！…つとと、やべえ！」

俺は慌てて荷物の樽の中に潜り込み強く蓋を閉めたのだった。

s i d e o u t

s i d e ハルナ

今私達はある客船の中に乗り込んでいるんです。  
今私達はある客船の中に乗り込んでいるんです。

それは海賊船がこの船を狙うと読んでいるからです。  
あれから十年：私とナミは海賊から宝を奪つては少し、づつ貯めてきました。

始めの頃はナミが幼く経験もないことからよくボロボロになつていきましたが  
今では手慣れた様子ですんなりとやつてます。

すると、甲板の扉が慌ただしく開き、乗組員が大慌てで入つてきました。

「船長！海賊です！」

「なにっ!?」

その一言で会場は大混乱です

中にいる人たちが叫びあげながら走り回りはじめました。

「皆さん落ち着いて！落ち着いてくださいーー！落ち着いて、  
指示に従ってくださいーー！」

船長さんが大声で乗客に声をかけています。

私はナミに目配せすると、そつその場を離れました。

私達は甲板近くまで来ると軽い揺れが響きました。

「どうやら、海賊船が船をつけたみたいね」

「ええ、上手く隙を見て船に乗り込みましょ」  
そうして私達は領き合ふと身を隠すのでした。

s i d e o u t

s i d e ルフィ

「ふあ～！よーくー寝たな～～と」

「あの後、何かの船に拾われたらしいおっさん達がなんか言つてたけど  
どつか行つちまつたしな…」

「早く逃げて！仲間を連れて戻つてきたら殺されちゃいますよ！」

「ん？なんだこいつ？まあいいや

「それにして腹減つたなあ～…ん？」

「何をのんきなこと言つてるんです！」

「甲板の上にはまだたくさんの中間がいるんですよ！」

「俺はこいつの言うことを無視して飯がある部屋を探し出した。  
すると…」

「シャララン…」

「どこかで見覚えのある人影がオレの横を通つて行つたんだ！  
おい、待てよ？さつきのつてもしかして！」

「あ、おい：待てよ！」

俺は急いでその人影を追つたんだ。けど…すぐ見失つちまつた。  
おつかしいな…確かに見たことあんだけど…  
ん、誰だつたかな？ま、いいや！今は飯だなうと  
俺はいい匂いのする方へ向かうのだった。

side out

side 棚名

船がつけられてから少し経ちました。

私は今、海賊船に乗り込んでいます。

電探には反応が一つ、どうやらナミが先に忍び込んでいるみたいですね。

私は反応のある所に向かうとその部屋の前で、  
コンツコンツコココンツコンツ

と、軽くノックをします。

これは、私達共通の合図なんです。  
すると扉が開いてナミが出てきました。

「お姉ちゃん、来てたのね」

「ええ、ナミの方はお宝はどう?」

私の言葉にナミは不敵に笑つてサムズアップします。

「バツチリよ! 後は船を貰つておさらばするだけ

そしたらお姉ちゃんのアレで一気の走ればもうおしまいよ♪」

そん言葉に私はため息を吐くと、

「そんな私を都合のいい足代わりに利用しないでナミ…もう協力してあげないわよ?」

「そ、それだけはやめて! いつも感謝してるから♪ね? お姉ちゃん♪」

「はあ…都合いいんだから…今回だけよ?」

「さつすがお姉ちゃん! 話が分かる!」

「ゴムゴムの――!!ピストル!」

その声の直後何かが勢いよく飛ばされていく音がしたんです。

私はその声にとても聞き覚えがありました。

(この声は…ひよつとしてルフイくん? )

私は客船の甲板の方を見て顔をゆがめると…

(ごめんなさい…まだあなたとは一緒にいけないんです…許してください)

「よし!逃げる準備完了!…あれ?お姉ちゃん?どうかしたの?」

ナミが私の様子にづいて声をかけてきます。

私はすぐに誤魔化して答えます。

「大丈夫よ、それじやあはやく行きましょうか」

また、ため息を吐き、私達は船を探し始めました。すると向こうの船から

「？⋮ええ！」

(さようなら、ルフィくん)

私は心の中でルフィくんに謝りその場去つていくのでした。  
村を買うまで残り⋮ 1400万ベリー।

# ルフイとハルナ！十年越しの再開！

s i d e 棚名

こんにちは、ハルナです。

今私達はオレンジの街に来ているのですけど…

「まつたく…ナミつたらどこに行つたのかしら？」

そうなんです、ナミとはぐれてしまつて探している最中なんです。

ここは人が多いみたいだから電探を使つてもよく判断できないし…

困りました…。すると

ドガアーネン！

え？ なに？ なんですか!? 今の音！

「まさか！」

私は急いで音のした方へ向かいました。

音のしたところについてみるとそこにはナミはいませんでした。

その代わりに麦わら帽子をかぶつた少年が三人の男たちに襲われていたのです。

「危ない！」

私が急いで駆けつけようとしたその時でした。

「ゴムゴムの～～～！ピストル！！」

突然少年の両腕が伸びて三人を伸してしまったんです。

私は唖然としながらもその少年に近寄りました。

「大丈夫ですか！」

「ん？誰だお前？」

「私はただの通りすがりです。あなたが襲われていたので来たんです

あなた、名前は？」

「俺か？俺はモンキー・D・ルフィ海賊王になる男だ、お前は？」

「つ！ルフィ『さん』ですね‥ 私はハルナと言います。」

「ハルナ？ん‥ どつかで聞いたような‥」

私の名前を聞いて何やら考え出すルフィイさん

出来れば思い出さないでください！」

「ハルナ‥ハルナ‥ハルナ‥ああっ！お前！ひよつとして！姉ちゃんか⁈」

ああ、思い出してしまいました‥ 仕方ありませんね、もう堪忍しよう

「ええ、そうよ‥ルフィイくん」

ルフィイくんは顔を輝かせて言いました。

「姉ちゃんやつと見つけたぞ！俺、海に出たんだ！さあ！」

俺の仲間になつてくれ！そんで一緒に冒険しよう！」

ああ、約束を覚えていてくれたのね‥ 嬉しいけれど、でも‥

「ああ！やつと見つけたわ！お姉ちゃん」

その声に上を見るとナミが近くに家の屋根からひょっこりと顔を出したんです。

「ナミー！どこにいたの？心配したのよ？」

その言葉にナミはペロッと舌を出して

「ごめんごめん、バギー一味の所に忍び込んで海団盗んだら見つかっちゃって…」

それでまくために町中走り回ってたのよ」

もう…相変わらずお転婆なんだから…」

「それにしてもアンタ強いのね～サーベル相手に素手で勝っちゃうなんて」

それを見てルフィくんが思い出したように声を上げます。

「ああ！お前さつきの…誰だ？」

ズコッ!!ルフィくんもそう言うところは変わつてないのね…」

「私は海賊専門の泥棒、ナミっていうの、ねえ、私たちと組まない？」

「ちょ、ちょつとナミ！なにを言うのよ急に！」  
ルフイくんを仲間にしようとするなんて

「嫌だ、俺は別にお前と組みたくない…それよりさ、

姉ちゃん仲間になつてくれよ！十年前に約束しただろ？

俺が海に出て姉ちゃんを見つけられたら仲間になつてくれるって！」

確かに言つたけれど…：

どうしましよう、今はルフイくんと行くわけにはいかないのに…：

「ちょつと！なにかつてんはなしを進めてるわけ？

お姉ちゃんは私の物よ、アンタの仲間になんかならないわ」

突然ナミが腕に抱き着いてきてルフイくんに何か言いだしました。

「ちょ、ちょつとナミ!?」

「なんだどつ！姉ちゃんは俺んだ！十年前に俺の仲間になつてくれるって言つたんだ！

お前のもんなわけねーだろ！」

え？え？ルフィくんまで何か言いだし始めちゃいました……。

しかも私を挟んで口喧嘩していますし……もうどうなつてるの？

「もう……いい加減にしてください！私は誰の物でもありません！」

もう我慢の限界です！こんな子供の喧嘩のようなことしていたら私が疲れてしまいす。

「わっ！お姉ちゃん？」

「なんだあ!?なんで姉ちゃんが怒つてんだ?」

すると……

ぐうううう……

「あ、思い出した！……腹減ったあ……」

「え……？」

「お腹空いてたの?」

「くりりと頷くルフィくん

私達はクスリとしてから

「仕方ないわね、私が何か御馳走してあげます。」

「本当か?!やつたー!姉ちゃんの飯だあ!」

凄い食い付きかたでしたね。」

「それじゃあ、行きましょうかナミ」

「そうね、そうしましょ」

私達はご飯を作るためにある一軒家に向かつたのでした。

# 赤鼻バギー V S ゾロ！逃げきれバラバラの身体

s i d e ハルナ

「うんめえな！姉ちゃんの飯」

す、凄い食べっぷりね……ルフイくん

こんにちは、ハルナです。今はある家でルフイくんに料理を振る舞つてるんですけど……

凄い勢いで料理を平らげていく姿にちょっと驚いてます……。

それにも……

『おい！いたか？』

『いや、見つからねえ……クソ！どこ行きやがった！』

『今はとにかく探すんだ！早くしねえとバギー船長に殺される！』

まだナミの事を探し回つてゐみたいね。これは気を付けないとけないかも…。

「ナミ、それにルフィくん、少し出でますから喧嘩しないように！」

「え？お姉ちゃんどこ行く気よ？」

「ん？んおお！任せとけ！」

「ちよつとした用事よ、それじやお願ひね」

そうして私は家を出てある場所に向かいました。

「…ここね、バギー一味のアジトは」

私は今、バギー一味のアジトとなつて いる建物の中にはいます。

理由？そんなの決まっています。バギーのお宝を頂戴するためですよ  
まあ、今回は下見なんんですけど…

「さて、宝物庫は何処かしら？」

電探にはこの近くにそれらしき反応があるんですけど……

しばらく探すと地下の一室にたどり着きました。

「ここね、宝物庫は」

私は見張りの目を盗み中へと忍び込みます。  
中には凄い財宝の山がありました。

「これは凄いですね：総計で一千万ベリーはあるかしら……」

質もよさそうですし、結構なお金になりそうなものばかり……  
流石は派手さにこだわるバギーと言つたところでしようか  
と、そんなことを考えていると、広間の方から賑やかな声が聞こえてきたのです。

「……？なにかしら？」

私は宝物庫を後にし、広間の方へ向かいました。

广間に来てみるとバギー達が何やら騒いでいました。  
どうやら宴会をしているみたいです。

(どうして急に宴会なんか…あ！ルフイくんにナミ！)

見ると、その宴席にルフイくんとナミの姿があつたんです。  
ルフイくんは何故か檻の中に入つていて、ナミはバギー達と一緒になつて  
宴会に参加しているではありませんか！

(はあ…ナミつたらルフイくんを売つたわね？後でお説教してあげないと…

それよりも今はルフイくんを助けなくちゃいけませんね)

私はルフイくんを助ける為に機を窺います。

そのルフイくんは料理を盗み食いしようとしていますけど…  
すると突然バギーが

「野郎共！特製バギー玉の準備!!」

と指示をだし、手下の一人が大砲に真っ赤な玉を入れました。

「セツト完了しました！」

「よし、点火」

その合図とともに大砲の導火線に火がつけられました。

しばらくして火が砲台にたどり着くと…

【ドッゴオオオオオオン!!】

砲弾が放たれ、建物をいくつも破壊して飛んで行きました。

「凄い威力…あんなの喰らつたらひとたまりもないですね…」

そう言いつつバギー達を見てみると

今度はルフィくんに大砲を向けているではありませんか

「バギー玉を一個プレゼントしてやるからこの親分をぶつ飛ばしちまいな」

「・・・え？」

バギーの奴、ナミにルフイくんを消させようとさせるなんて……！

ナミは固まつたまま動きません。

ナミの後ろではバギーの手下たちが『早く撃て』と煽っています。私が様子を見ていると、固まっているナミの手から痺れを切らした手下がマッチを奪い取りました。

そして、導火線に火をつけようとしたその時でした！

【バコオオン!!】

手下の頭を思いつきり棍で殴るナミの姿が……

ですが、導火線に火がついてしまい慌てるルフイくん

ナミは他の手下どもに襲われて動けない状態……

あ、なんとか振り切つて砲台に向かってますね、でももう間に合わないでしょう……

(仕方ありません：榛名！全力で阻止します！)

「させません！アクア・ボール！」

瞬間、近くにあつた液体を球形に変え、導火線へと飛ばして火を鎮火しました。

安心したのもつかの間、再び手下たちがナミに襲い掛かっていました。  
ナミはまだ気づいていません！どうしたら！

「ナミ！後ろ！」

「ナミ！逃げて！」

ルフィくんに負けじと私も叫びますが時すでに遅し…。

ナミの背後に迫るバギーの手下たち…。

それにようやく気付き目を閉じるナミ

その時でした。

ナミと手下たちの間に颶爽と現れた彼は襲い来る手下たちを  
あっさりと伸してしまつたのです。

「おいおい、お前ら女一人に何人がかりだ？」

「ゾロ！」

ルフィくんが嬉しそうな声を上げます

ゾロ? ゾロってあの海賊狩りのゾロのことよね…  
私は考えつつもナミの元の駆け寄ります。

「ナミ! 大丈夫?」

「ええ、なんとか…それにしても、さつきの玉はやつぱりお姉ちゃんだったのね」  
私はその言葉に頷くとゾロと呼ばれた人の方を向き、お辞儀をします。

「ナミが危ないところを助けていただいてありがとうございます…海賊狩りのゾロさ  
ん」

「へえ、俺の事を知つてんのか。そんなことより今は…」  
呆れたようにルフィくんを見るゾロさん

そのままルフィくんの入っている檻まで向かいます。  
するとバギーが口を開きました。

「貴様がゾロか…それにそこの女…貴様らこの俺の首でも取りに来たのか?」

「いや、興味ねえな…俺は止めたんだ…海賊狩りは」

「私はそもそも賞金稼ぎじゃありませんし…あなたの首なんかいりません」

「そうかい、でもゾロ…オレは興味あるねえ。テメエを殺せば名が上がる」

ニヤリと口角をあげながらゾロさんを見るバギー。

「やめとけ…死ぬぜ？」

ゾロさんが制止をかけましたがバギーは聞く耳を持つていな様子…  
仕方ないとばかりに構えたゾロさんは、突つ込んできたバギーをあっさりと切り刻んでしまいました。

突つ込んでいくバギーをあっさりと切り刻むゾロさん  
そのまま倒れるバギーに私は違和感を覚え、

私は周りに悟られないように能力を発動します。  
すると、倒れていたはずのバギーがゆらりと立ち上がり、  
ナイフを掴んだ手をゾロさんに向け発射したのです！

ゾロさんはナイフに気づいていません  
ナイフはゾロさんに音もなく近づいていき、背後から腹部を…

「… !!」

「ゾロッ!!」

「ああ？ なんだこりや？ ってナイフ！？」

貫きませんでした。

バギーが唖然しています。

「残念でしたねバギーさん、これであなたの奇襲は失敗です」

「な、何モンだ！お前！」

「私はハルナ。ミズミズの実を食べた水人間です」

「ミズミズだとおつ!? お前、そりや伝説の…」

その時でした。

「姉ちゃん! 避けろ!!」

見ると大砲がこちらに向いているではありませんか。

「どうやらお喋りはここまでみたいですね。アクア・ミスト!」

唱えると、バギー達を霧で包み込みました。

『なんだ? 何するつもりだ?』

私はにこりと笑つて宣言しました。

「ミストキューリング!」

刹那、バギー達を包んでいた霧を一瞬にして固め、バギー達を拘束しました。

「それじゃあ、ごきげんよう。デカ鼻さん」

私は急いで離れると、その直後、後ろで爆風が巻き起こりました。

その間に、私はナミたちと合流してすぐにその場を離れるのでした。

# ミズミズとゴムゴム！バラバラの脅威を打ち払え！

s i d e 棚名

こんにちは、ハルナです。

今私達はバギーと対峙しています。

どうしてこんな状況になつたかと言うと、それは少し時間を遡ります。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

私達はバギー達から逃げ誰もいらない無人街を歩いていたんです。

ルフィくんが入つている檻を引きずつて歩いているのはゾロさん。  
ゾロさんはあるペツトフード店の前でルフィくんを下ろすと、

「腹減った…」

そう言つて柱に背を預けてしまいました。

私はそれに苦笑しつつ辺りを素敵します。

すると、お店の入り口の前に一匹のワンちゃんと

それを遠くから優しい目つきで見守る不思議なお爺さんがいたんです。ルフィくんがそのワンちゃんと同じやれていた時でした。

ナミが戻ってきたんです。

ナミは私の知り合いという事と助けてもらつたお礼にとルフィくんの檻の鍵を盗つて来てくれたのです。

でもその鍵はワンちゃんに食べられてしましました…。

ルフィくんは大慌てで鍵を吐かせようとしましたが

ワンちゃんは完全に鍵を呑み込んでしまったようで、吐いてくれませんでした。

私はそれを見かねて、能力で作つた鍵でルフィくんを解放しました。

そのすぐ後に、プードルさんというこの町の町長さんが来て

ゾロさんを自身の家へと寝かせて、ワンちゃんの事を教えてくれました。

このワンちゃんはシユシユと言う子、でペツトフード店の店番をしているそなんです。

でも、そのお店の店主さんは三ヶ月ほど前に亡くなつたそうです。

シユシユちゃんはそれでもお店を守るためにずっとお店の前で立つていたんだそうです。

そんな話を聞いていた時に、バギー一味の手下の一人、猛獸使いのモージが攻めてき

たのです。

私はナミとプードルさんに連れられその場を離れました。

ルフィくんはその場からなぜか動きませんでした。

そして私が離れてすぐに、ルフィくんの声と共に建物が数軒崩れ落ちました。

私はルフィくん…ではなくシユシユちゃんがいた所の戻りました。

そこではシユシユちゃんが巨大なライオン相手に立ち向かつてていたのです。

その体は傷だらけでとても見ていられるようなものではありませんでした…。

私は能力で艦装そつくりな主砲を作り出し、ライオンに向けて放ちました。

ライオンは大きく吹っ飛んでいき、見えなくなりました。

後になつてから気づいたのですが、ライオンの上に人が乗っていたみたいです。

その後、ルフィくんが戻つてきました。そして私達はバギー一味に先制攻撃を仕掛けたのです。

初戦はゾロさんｖｓカバジと言う方でしたがゾロさんの『鬼斬り』という技で

一撃で沈んでしまつたんです。

そして今に至るという訳なのです。

・・・・・・・・・・・・・・

「…てめえのその麦わらを見るとあの男を思い出してむしゃくしゃしてくるぜ…」

クソ生意気なあの赤髪のシャンクスをよ!」

そう言つてバギーはひとりでに過去のことを話し始めました。

どうやらバギーは海賊見習いの時代にあのお兄さんと  
同じ船に乗つていたとのことでした。

その船が敵船と戦闘した時の事だつたそうです。

その船から奪つたものの中に、悪魔の実と宝の地図があり、バギーはそれをかすめ  
取つて一人大もうけをしようと考えていたそうです。

バギーはそれをかすめ取つて一人大もうけをしようと考えていたようです。

ですが、お兄さんに後ろから話しかけられたことに驚いて、その悪魔の実を食べてし  
まつたそうです。

おまけに折角手に入れた宝の地図も海に落としてしまつたらしく

急いで拾いに海に飛びましたが、悪魔の実を食べた代償によつてそれは叶わな  
かつたそうです。

その話を聞いた後に言うのもなんですけど…

「それって、あなたの自業自得じやないんですか？」

自分から悪魔の実を食べて溺れかけて、それをお兄さんに助けてもらっている時点で  
お兄さんには感謝こそすれ恨むなんてもつてのほかだと思うのですが：

「やつかましい！お前に俺の気持ちなど分かるか！派手に死ねい！」

バラバラ砲！」

ナイフを複数握った腕を飛ばしてくるバギー。ですが…

「ルフィくん、少しだけ私にバギーの相手をさせてくれる？」

ルフィくんはにつかりと笑つて

「ああ、いいぞ、存分にやつてやれ！姉ちゃん」

私は小さく頷くと能力を発動させます。

「榛名！全力で参ります！」

アクア・ボール・ヴァリエーション！」

私が操つたのは近くの樽に入つたお酒でした。

球体になつたお酒を私は海水へと変異させバギーの方へと放ちます。  
そして、バギーの身体と飛んできた腕を海水の球体で包み込みました。

「ゴボボボボッ!」

バギーは球体の中でもがきます。私はそれに追い打ちをかけるよう…

「アクラ・トルネード!」

球体を高速回転させて小さな竜巻を作り出します。

もちろん遠心力で飛んで行かないように外側を硬化するのも忘れずに。

「ゴババボボボボッ!!」

相変わらず球体の中でもがき苦しんでいるバギー…。  
そろそろいいでしようか?

私は球体の回転を止め、水を消し去ります。

やつとのことで解放されたバギーはと言うと…：

「はあ…はあ…ガハッ!」

完全にグロッキーになつていきました。

あら、少しありすぎちゃつたみたいですね。・

「ルフィくん、後はどうぞ」

「ああ、んじや！ぶつとベバギー！ゴムゴムの……」

そういう言いながら思い切り両腕を後ろに伸ばすルフィくん  
何をするつもりかしら？

「バズーカアアアア!!!」

なるほど、伸ばした両腕が戻ってきた勢いを利用して勢いよく衝撃を叩き込むのね。

変な叫び声と共に空の彼方に吹つ飛んでいくバギー  
これでこの街の人達も安全ですね

「勝つたー！うははははは！」

「お疲れ様、ルフィくん」

「おお、と言つても姉ちゃんがほんとやつちまつたけどな」

あはは…今度からは少し自制しないといけませんね…

「今度からは気を付けます…」

「ん？別にいいよ、気にしなくて。それよりさー仲間になつてくれるんだろう？」

「え？」

「ナミがさ言つてたんだよ！グランドラインの海図を手に入れられたら  
仲間になつてくれるつて！」

ナミつたら…またそんなことを言つて…

後でさつきの事も含めてキツくお灸をすえてあげなくちゃいけませんね！

「はあ：仕方ないですね、ナミがそう言つていたのならいいわ。  
少しの間だけ仲間になつてあげる」

「ホントか！やつたー！」

こうして私達はオレンジの街を後にしたのでした。

後日談ですが、ナミが奪つたバギー一味のお宝の半分はルフイくんがプードルさんに渡してきたそうです。

それを聞いたナミが凄い顔でルフイくんを溺れさせかけていたのはまた別のお話…

# シロツップ村での出会い…その名はウソツプ！

s i d e 棚名

こんにちは、ハルナです。

オレンジの街離れてから数週間が経ちました。

今はナミにキツイお灸をすえている最中なんです！

「前々から散々言つてきたはずよ？裏切る相手は慎重に選びなさいって」

「うう…だつて相手は汚い海賊じやない…エサに使つて何が悪いのよ…」  
「この子は…まだ分からぬようですね…」

「そう、まだそんなこと言うのなら…これから盗んだお宝はすべて私が管理します。  
ナミには一切触らせません…それと、艦装の手入れを毎日ナミにやつてもらいましょ  
う」

その言葉を聞いたナミは途端に顔を青くします。

「それだけはやめて！お願ひ！もう絶対やらないから！  
毎日お姉ちゃんの装備の点検はイヤ——ツツツ!!!」

「はあ…仕方ないですね、今回だけですよ？」

でも、この事はベルメールさんに報告しますからね』  
するとナミの顔が更に真つ青になりました。

「お、お姉ちゃん…？それは冗談よね？」

うすら笑いを浮かべるナミに私はニッコリと微笑んで

「いいえ♪冗談なんかじゃありませんよ！」

「イヤ————ツツツ!!!

ナミの絶叫が海に木霊しました。

「ハハハハハハツ!!おつもしれえな！ナミ」

93 シロップ村での出会い…その名はウソップ!

「笑い」とじやないわ!! ああ…どうしよう…ベルメールさんになんて言い訳したら…」

笑い転げルフィくんをぶん殴つて頭を抱え込むナミ…：

あなたが招いたことなんですから自業自得ですよ?

「おい、おまえら…新しい島が見えてきたぞ」

ゾロさんの声にそちらを見ると確かに陸地が見えていました。

「よおーし! そんじや上陸だ!!!」

こうして私達は数週間ぶりに陸地に降り立つたのです。

「あ、あああ… 久しぶりに地面に降りたあ…」

「ほあああ…この奥に村があんのか?」

「うん、小さな村みたいだけど…」

「おお!! そんじや肉肉肉ニクニク! 飯屋はあんのか!」

「ちよつと落ち着きましよう? ルフィくん」

「お姉ちゃんの言う通りよ、それとアンタは肉から離れなさい」

思いつきり伸びをするゾロさんに、お肉の事しか言つていなилルフィくん

地図を見ているナミ、隠れている人達‥

‥‥え?

電探に反応? 四つですね‥

「みんな、気を付けてください待ち伏せされています。」

【ガサガサガサッ!】

「あぶねえ!」

ゾロさんの声の直後、一斉に私達に向かつて何かが飛んできました。

「させません！ アクア・ウォール・キューリング！」

瞬間！ 私達四人の前に水の壁が立ちふさがり何かを防ぎます。見ると、周りの高台の上には至る所に小さな海賊旗のようなものが…

「うほお〜!! すっげえなあ!!」

「ルフィイくん、感心している場合じゃないですかからね?」

「ん？ そつか？」

すると、高台の方から声が聞こえてきました。

「ははははっ！ オレはこの村に君臨する大海賊団を率いるウソップ！」

人々はオレを称えさらに称え我が船長！ キャプテン・ウソップと呼ぶ！」

「は、はあ…」

あれにはなんと相槌を打つてあげたらいいのでしょうか…

その間にもウソップさんは続けます。

「この村を攻めようとしているならやめておけ！」

このオレの八千万の部下共が黙つちゃいないからな!!」  
八千万? どう見てもあと三人しかいないんですけど…

「スッゲエエエ!!!」

ルフィくん、信じちやいけませんよ…

「盛り上がりがつてているところごめんなさい…あなたのそれ、嘘ですよね？」

それに隠れてる子たちも三人ですし…」

「ひえっ!? バレてる…！」

「ほら、バレたって言いましたわ」

「うははあ〜い！ バレたつて言つちまつたああ…！」

身体をクネクネくねらせるウソップさん…

なんというか、頭痛がしてきました…。

「ナニツ!? 嘘なのか!?」

どう聞いたら信じられるのかの方が疑問ですよ? ルフィイくん

「おのれ! 策士め! 八千万は大げさだが…オレには立派な部下たちがいる!」

「いえ…だから三人なんですよね?」

「…え? 知ってるの?」

さつきから言つてるじゃないですか…!

「知つてゐるも何も最初から気づいてましたよ? そこにいるんでしょう?」

私は茂みの方を見ます。

「ワアアアアツ!! みぬかれてたあ——ツツ!!

に、逃げろおおお!!!

あら、逃げられちゃいました。

「あ、おい！おまえらー！逃げるなあああ！！」

「パチンコを使う海賊なんて、聞いたことなもんね…ね？お姉ちゃん」

「そうね、確かにとても珍しいと 思います。」

「ハハハハハハツ!! お前、面白いな！ハハハハハハツ!!」

私は頭痛が酷くなつてきました。：

「う、うるせえ！オレをコケにするな！オレは誇り高き男なんだ！」

その誇りの高さ故！人はオレを…！誇りのウソップと呼ぶ！

さつきの見ただろ！オレのパチンコの腕はそこらのピストルより遙かに凄いんだぜ

！」

そう言つてパチンコを構えるウソップさん

そんなことしちゃつていいのでしょうか…

「ピストル抜いたからにゃあ…命賭けろよ?」

「…へ?」

「ソイツは脅しの道具じゃないって言つたんだ…」

ルフィくんの言葉の意味を察してゾロさんも刀を軽く抜きます。

「お前の目の前にいるのは本物の海賊なんだぜ?」  
ウソップさんはどうするんでしょう…

『…』

しばらくの無言が包みます。

その沈黙を破ったのはウソップさんの方でした。

「や、やつぱホンモンの海賊はいう事も迫力も段違いだ・スゲエ」  
その言葉に、顔を見合わせて笑う二人

「受け売りさ！」

「・・・へ？」

「俺の尊敬する海賊、シャンクスの」

「しゃ、シャンクスだと!?お前！赤髪のシャンクスを知つてんのか!?」

「ああ、ヤソップだろ？お前の父ちゃん」

ヤソップさんって確か…赤髪のお兄さんの船に乗つっていたあの狙撃手の…  
「へ…?ええええ…!?

驚きすぎて高台から転がり落ちるウソップさん

「危ない！ アクア・クツショーン！」

間一髪のところで水のクツショーンがウソップさんを包み込みます。  
？

「え…あ、サンキュー、確かにオレの親父の名はヤソップだけど…なんでそれ知つてんだ

「そうだな、 そうするか」

「はい、 棚名は大丈夫です！」

「そうね、 いきましょうか」

「お、 おい！ ちょっと待つてくれよ！」

こうして私達は村の方へと向かつたのでした。

# 屋敷での一騒動…ウソツプ VS クラハドール？

s i d e 棚名

こんにちはハルナです。

今は村の食事処で悟飯うをいただいています。

「うんめえな～！」

お肉にがつつくルフイくん、他の皆さんもそれぞれ食事をしています。

「そういえばお前達はなんでこの村に来たんだ？」

「私達、船を探してるのよ、ねえ、この村で船を操れそうな仲間と、デカい船を調達できないかしら？」

ナミのその言葉にウソツプさんは首を横に振ります。

「見ての通り小さな村だ：残念だがご期待にやそえねえな…」

「丘の上に…デカい屋敷が合つたな…そこなら何とかなんじやねえのか?」

「あ、あそこはだめだ!」

不意にウソップさんが大声を出したんです。

『え?』

「…あ! そういえばオレ、用事を思い出した!

ここは、オレの顔が利く…存分に飲み食いしてつてくれ!」

そいじゃーねえ!と残して走り去るウソップさん。  
どうしたのかしら? あんな慌てちやつて…

「…ナミ、私も少し席を外すわね、店員さん、ごちそうさまです。」

「え? ちょっとお姉ちゃん?」

「ああ、また来ておくれ：」

店員さん返事に少し微笑むと私はお店を後にしました。

お店を出た後、ウソップさんの反応を追っていくと丘の上の屋敷にたどり着きました。

「……は…つと、それよりもウソップさんは…」

辺りを見回すと、物陰でコソコソしているウソップさんを見つけました。  
私はウソップさんに近づいていき声をかけます。

「あの…何してるんです?」

「!?:シイヽ?:」

驚きつつも私に黙るような仕草をするウソップさん

私は不思議に思いながらもそれに従います。

ウソップさんはキヨロキヨロ辺りを見回すと入り口から離れた草壁の前に向かい

私を手招きして呼びます。

私がそこまで歩み寄ると、ウソップさんはその草壁を引き抜き中に入るとまた手招きをします。

これって…入つても大丈夫なの?

不安になりつつも私はウソップさんの後に続きます。  
中に入ると、

ウソップさんは引き抜いた穴を元に戻して、一息を着きました。

「ふう、そんで？なんでいるわけ？」

「あなたの様子があまりにもおかしかったので後をつけてきたんです。」

「そ、そつか…まあ来ちまつたもんはしようがねえし、ちょっと待つてくれ」  
そう言うとウソップさんは小石を拾い上げると軽く構えて二階のある窓の投げつけます。

コンツ！という軽い衝撃音の後に窓が開かれて、一人の女性が顔を出しました。

「ウソップさん！」

「よおー・カヤ、相変わらず元気ねえな」

「ごめんなさい…本当はお役様として招待したいのだけど、クラハドールが許してくれなくて…」

「へへっ！ 気にすんな！俺は勇敢なる海の勇者だ、狭い家の中じや息が詰まつちまうつてもんだ」

その言葉に私は首をかしげます。

海の勇者つて……海にも出たこと無かつたはずじゃ……？

すると、カヤと呼ばれた少女は私に気づいてウソップさんに問いかけます。

「ウソップさん、この方は？」

「ああ、こいつは遠路はるばるオレの英雄譚を聞きに来た奴さ、  
そうだ！今日はこいつに話を聞いたらどうだ？」

きつとオレとは違う冒険の話が聞けると思うぜ？」  
え？私が話すの？いいのかしら？」

「それは楽しそう！お話し、聞かせてもらつてもいいですか？」  
カヤさんのその言葉に私は潔く頷きます。

「分かりました。ハルナ！全力でお話しします。」

「ありがとよ！そんでどんな話をしてくれんだ？」

「ん〜…そうですね、それじゃあここよりはるか遠くの海の事をお話しします。」

私が語つたのは、私が元いた世界での話でした。

提督に建造され、初めて着任したこと…

演習での姉妹での特訓の話や、出撃で危機に陥つた話など…

もちろん、経験してきたことをそのまま話すのではなく、三人称視点からの話に改編してですけどね…。

「それで、そのカンムスはどうなつたの？」

私が話す話をカヤさんとウソップさんは聞き入っています。

「ええ、ちゃんと無事に帰投しましたよ。」

「そうなの? よかつたあ…」

「ホツ…そのままゴウチンなんかしてたらどうしようかと思つたぜ…  
私は一通り話し終わり、口を閉じます。

「私の話はこんなところでしようか…」

「とても面白かつたわ、ねえ、他にはないの?」  
カヤさんの質問に私が考え始めた時でした。

『ウワアアアツ!!』

【ドゴオオオオン!】

いきなりルフィくん達が飛んできたのです。

「うまくいったあ…」

「いつてない！」

「え？ ルフィくん！？ それにナミまで…」

私はルフィくん達の元に駆け寄ります。

「ん？ なんだ姉ちゃんこんなとこにいたのか！ もしかして先に船をくれるよう頼んど  
いてくれたのか？」

「え？ いいえ、私は今までの冒険のお話を聞いていただけよ？」

「え？ お姉ちゃん…まさか…」

「？…どうかしたの？」

私はナミが何を言っているのかよくわからず疑問符を浮かべます。  
するとそこに…

「君達！ そこで何をしている！」

髪をオールバツクに整えた執事服の男性がやつて来ていました。

「クラハドール…」

「困るね…勝手に屋敷に入つてもらつては…それにウソップくん！」

君もだ…薄汚い海賊の息子がカヤお嬢様に近づくことは止めてくれないか！」  
その言葉にウソップさんがピクリと反応します。

「う、薄汚いだと…？」

「君とお嬢様とでは、住む世界が違うんだ！目的はなんだ？金か？いくら欲しい？」

あのクラハドールという人、海賊を毛嫌いしているみたいですね。

「クラハドール！なんてこと言うの！ウソップさんに謝つて！」

「こんな野蛮な男に何故謝らなければならないのですか？お嬢様…」  
しかし、とクラハドールさんは続けます。

「君には同情するよ、恨んでいることだろう……家族を捨て村を飛び出した、家族より財宝が大事な大馬鹿親父を！」

「テメエ！それ以上親父を馬鹿にするな！」

いきなり叫ぶとウソップさんはクラハドールさんを睨みつけます。

「何をそんなに怒っているんだ？こういう時こそ得意のウソをつけばいいのに」

まるで挑発でもするかのように眼鏡を吊り上げるクラハドールさん

「本当は親父は旅の商人だとか、実は血がつながっていないだとか……」

すると、ウソップさんはいきなりクラハドールさんに向けて駆け出したのです。

「うるせえ！」

そう叫ぶとウソップさんは思い切り腕を振り上げ、クラハドールさんを殴りつけました。

殴られたクラハドールさんは軽く吹つ飛び地面に倒れて悪態をついています。

「ほら見ろ、すぐ暴力だ：親父が親父なら息子も息子という訳だ」

「だまれ！」

クラハドールさんの悪態にウソップさんはさらに叫びます。

「オレは親父が海賊であることを誇りに思つてる!! 勇敢な海の戦士であることを誇りに思つてる！お前の言う通り、オレはホラ吹きだから、オレが海賊の血を引いてる！その誇りだけは偽るわけにはいかねえんだ!!

オレは：海賊の息子なんだ！」

「フツ：海賊が勇敢な海の戦士か：随分ねじ曲がった言い方があるもんだね」

「なにつ！」

なんとか立ち上がるクラハドールさん

「だが、否めない野蛮な血の証拠が君だ好き放題にホラを吹いて回り、頭に来ればすぐ暴

力：挙句の果てには財産目当てに：お嬢様に近づく

「なんだとお！」

「何かたぐらみがあるという理由など！君の父親が海賊であるという事だけで充分だ！」

その言葉を聞いたウソツプさんは、思いつきりクラハドールさんの胸倉を掴みます。

「テメエ！まだ言うのか！」

そろそろ止めた方がいいですね…

私は付近の水を操り球体になるとウソツプさんの頭の上に落とします。

「バシャッ!!」

「ナアツ!?」

いきなり水が掛かり、驚くウソツプさん

「もうそのあたりにしておきましょ…これ以上言つても埒があきませんよ？」

「……」

力なく胸倉をつかみ続いているウソップさん  
クラハドールさんはその手を振り払うといいます。

「出て行きたまえ、二度とこの屋敷には近づくな！」

「……ああ、分かったよ……言われなくたって出て書いてやる！二度とこの屋敷には近づ  
かねえ」

そう言うとウソップさんは屋敷を出ていってしまいました。  
私達もそれに続いてすぐに屋敷を出るのでした。

守れシロツップ村！決意の嘘つきキヤプテン・ウソツプ

s i d e ハルナ

こんにちは、ハルナです。

カヤさんのお屋敷を後にして、村までの道の途中の峠道にいます。

「それで、アイツはどこ行っちゃつたのよ」

「さあな、あのキヤプテンの所にでも行つてるんじやねえのか？」

二人の会話にピーマンくん、にんじんくんが顔を見合わせて言います。

「じゃあ、あそこだな！」

「ああ、絶対あそこだ！」

私は一人がどこの事を言つているのか分からず問い合わせます。

「あそこつてどこの事なの?」

その問いに二人は声をそろえて答えます。

『海岸にある浜辺さ、キャプテンは嫌な事があるといつもあの場所から海を眺めて心の傷を癒してるんだ』

「そう…」

「そう言えばアンタ達もう一人の子はどこに行つたのよ?一緒じゃないの?」

『ん?ああ、たまねぎ』

「アイツすぐどつか行つちやうんだよな…」

「そんで、すぐ大騒ぎしてあらわれるんだ」

その時でした。

「うわああああ……！大変だ——!!後ろ向き男だあ——!!」  
たまねぎくんが叫びながらこちらに走ってきました。

「ほらね……」

にんじんくんがやつぱりと言った風に呟きます。

「変な人が後ろ向きで歩いてくるんだよおお！」

『嘘つけ』

「ホントだよ!!あれ見て！」

そう叫ぶと、たまねぎくんは後ろを指さします。

するとそこには確かに後ろ向きながらこちらに歩いてくる人の姿が……  
なるほど、確かに変な人ですね。

その変な人は私達の所で立ち止まり声をかけてきます。

「おい、誰だ?俺を変な人呼ぶのは…俺は変じやねえ」

…構えを取りながら言うその方はどう見ても変人です。

「変よ?…どう見ても…ね、お姉ちゃん」

「え、ええ…すごくおかしいと思います…」

「バカを言え、俺はただの通りすがりの催眠術師だ…」

催眠術師… どうみても頭のおかしな人にしか見えないのでですが…

『催眠術!…すつげえ!…やつてみせてくれよ!…』

「なに…?冗談いうな、なんで俺が初対面の奴に術を披露しなきゃならねえんだ!…」

そう言いながらも輪つかのような物を取り出します。

何をするんでしようか…?

「いいか？この輪つかをよ—く見るんだ…」

「結局やるのかよ…」

「まあまあ…見てみましょう？」

私達はその様子を見守ります。

「ワンツージャンゴでお前たちは眠くなる、いいか？いくぞ？」

「ワン、ツー、ジャンゴ！」

その直後、輪つかを見ていた三人と変人さんはいびきをかいて寝てしまいました。

「おい！コイツいつたい何なんだ！」

それはわたしが聞きたいですよ… ゴロさん、ああ、もうまた頭痛が…  
この村に来てからこんなことばかりです…。

「大丈夫？お姉ちゃん、顔色悪いけど…」

「ええ、大丈夫です…」の状況に頭がついてきてなくてちょっと頭痛がしてただけだから…」

「それ、もう大丈夫じゃないわよね!?」

大丈夫よ、きっと大丈夫…

ああ、金剛お姉様… お姉様だつたらどう過ごのでしようか…  
しばらくすると、変人さんは起きてどこかに行つてしましました。

私達はそれを見送るとため息を吐きました。

それからまた更にしばらくして、遠くからウソップさんがものすごい勢いで走つてくるのが見えました。

『あー！キャプテン！』

「ちょうどよかつたわ、ねえ、ルフィは？」

しかし三人や、ナミの問い合わせにも答えず、ウソップさんは走り去つてしまつたのです。

「どうしたのかしら？あんなに慌てちやつて…」

「なんだかすぐ真剣な焦った顔をしてたわね…」

そう言いながらも私は艦装を装着し、一気の偵察機をセットします。

『おお！すっげえ！姉ちゃん！それいつたいなんだ？』

「うおつ!?おまつ！なんなんだそのバカでかい大砲もみたいな奴は！」

「お姉ちゃん：いいの？こんな所で艦装なんか出して…」

各々がそれぞれの反応をしてくれます。私はニッコリと笑むと

「これは偵察機といつて飛ばすと辺りの様子を調べてきてくれるの。

それじゃあ、妖精さん、赤い服の麦わら帽子の男の子を探してきてください」  
私が偵察機の中に乗っている小さな妖精さんに話しかけると、

妖精さんは親指をグツ！とサムズアップして答えてくれます。

それを見た私は、空に向けて偵察機を放ちました。

「… お願いしますね」

私は偵察機の飛んで行つた方向を見守ります。

しばらくすると飛ばしていた偵察機から入電が入つてきました。

――トウツツ、トートツツ、トトートトツ――――――

「偵察機からの打電だわ、『ワレ、カイガニテ、ムギワラノショウネンハツケンセリ、ソノカラダ、ウゴカズ、セイシフメイ…』

なんですって!?」

私は急いで海岸の方に駆けだします。

「あん? なにがあつたんだ?」

「ルフィくんが海岸で倒れているみたいなんです! 急いで向かわないと!」

『えええ!!』

「なにい!」

「え? いつたい何があつたっていうのよ?」

「とにかく行きましょう! 二人とも! 案内をお願いできる?」

『うん!…こつちだよ!』

私達は三人の案内の下、急いで海岸に向かつたのでした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

私達は三人の案内でウソップさんがよく来るという海岸に来ていました。

「ここだよ、ここでキャプテンは心の傷を癒してるんだ、ここ風が気持ちいいしさ…」

確かに心地いい風…

つと、その前にルフィくんを探さないとですね!

私は電探で周囲を素敵します。

すると崖の下の方に反応がありました。

私が急いで駆け寄るとそこにはおかしな格好のまま動かないルフィくんの姿が…

「ルフィくん!…起きて、起きてください!」

私はルフィくんを搖さります。すると…

「ん？ふわあ～あ… よく寝た… ん？なんで姉ちゃんがここにいるんだ？」

「それはね…」

私は簡単に訳を話しました。

「と、 いう訳なの」

「そうだったのか、 ん？ああっ!!」

いきなり大声を上げるルフィくん

「崖の下で寝ていた次はなんだ？」

「ああ、 それがよ…」

ルフィくんは自分が寝るまでのことを話してくれました。

シロツプ村に海賊の軍勢が攻めてくること、 カヤさんが事故に見せかけて殺されるこ  
と…

執事、クラハドールさんのこと…

『ええ!! 村が攻められる! それにカヤさんが殺されるだつて!!』

「ああ、そう言つてた、間違いない」

その言葉を聞いて三人は慌てて走つて行つてしましました。騒がしい子たちですね。  
それを見送りつつ私は思考します。

明日の早朝に海賊たちが攻めてくる…

それならその前にその根源をつぶしてしまえばいいという事ですものね!

そうと決まれば早速!… という訳にもいかないですね、これはナミ達にも知られない  
ようにしないと…

私は、心中でこつそりと計画を立てるのでした。

その私をナミが見抜いているかのような視線で見ていたことに気がつかずに…

・ ·

『キャプテン!!』

三人がウソップさんを見つけて声をかけます。  
ウソップさんは三人の姿を見ると目元をぬぐつたようなしぐさをしてから、  
いつも通りにやつてきました。

私達は先ほどの峠道まで戻つてきました。  
するとそこにフラフラと歩いてくるウソップさんの姿がありました。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

今、ウソップさん泣いてましたね…何かあつたんでしょう…  
 ウソップさんはルフィくんを見ると幽霊でも見たような顔をします。  
 三人が状況を説明するとなんとか納得したようでした。

『それよりキャプテン！早く海賊が攻めてくることを皆に話に行かないと…』

その言葉を聞いたウソップさんは一瞬だけ固まりました。

でも、すぐに笑って

「フハハハハ！アハハハハ！いつものウソに決まつてんだろ！あの執事がムカつくんで  
 海賊にしてやろうとおもつたんだよ！」

『なんだ、 そだつたのか、 ははははは！』

すぐに笑いだす三人でしたがすぐに笑うのをやめて言います。

「オレ、 ちょっとキャプテン軽蔑するよ…」

「キャプテンは人を傷つける嘘は言わないものだと思つてた…」

「オレも、キャプテン、見損なつちやつた…」

『帰ろう』

そう言うと三人は帰ってしまいました。

「…良かつたんですか？あんな言い方して」

「海賊、ホントに来ちゃうんでしょう？」

「ああ、間違いなくやつてくる…でもウソだと思つてる…明日もまたいつも通り平和な一日が来ると思つてるんだ…！」

そう言つて俯くウソップさん。

でも！と、不意に立ち上がり、ウソップさんは続けます。

「だからオレは海岸で海賊共を迎え撃ちこの件をウソにする！それが嘘つきとしてオレが通すべき筋つてもんだ！」

立派ですね、この度胸、勇気・提督を思い出しますね……。

「よく言いましたね、ウソップさん、いいえ、提督・榛名も助太刀します！」

「…え？」

「そおだな！ アイツに好き勝手されるわけにはいかねえ！ オレも協力する！」

「とんだお人好しだぜ、子分まで突き放して一人出陣とはな…」

「言つとくけど、お姉ちゃんと海賊のお宝は私の物なんだからね  
ナミ、一言余計なものが入つてますからね？」

「お、お前ら：一緒に戦ってくれんのか？」

コクリと頷く私達

「ああ、だつて敵は大勢いるんだろ？」

「怖いって顔に書いてあるぜ」

「はい、よく分かるほどに…」

「うるせえ！怖いもんは怖いんだ！相手はクラハドールの海賊団なんだぞ！」

「これは見セモンじやねえぞてめえら、帰れ！帰れ!!」

「そんなに足を震わせて言われても説得力のかけらもありませんよ？」

「そんなことありません、私達は提督が立派だ思つたから加勢するんです。」

「そうだ、同情なんかで命賭けるか！」

「つづ… !!お前ら…ありがとう!!」

「こうして私達のクラハドール海賊団を迎え撃つメンバーは揃つたのでした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

その夜、私は一人海に出ていました。

目の前には巨大な海賊船が停泊しています。

「これね、元キャプテンクロの海賊船は…」

私は船を見上げます。

「明日の朝には襲撃が始まってしまう、なら、先のその根源をつぶしてしまえば大本は解決できますよね」

私は艦装の高角砲を構えて船に狙いを定めます。

「あなた達のような野蛮な海賊の勝手は…榛名が、許しません!!」  
〔ズドオオオオン!!〕

私は思いっきり高角砲を放ちます。

砲撃は船にいくつもの損傷を与えていきます。

数発撃つたところで私は撃つのを止め、船内に潜り込みます。

「何も奪わずに行つたらナミに怒られそうですものね」

向かつてくる船員達をアクア・ボールで溺死させながら、私は音を立てずに船内を歩き回ります。

しばらく歩き回り宝物庫を見つけると私は水を風呂敷へと変異させ、さらに作り出した水の腕を使って宝を持つと船から抜け出しました。

「これで終わりにしてあげます！アクア・トルネード！」

すると、海水が盛り上がり乱回転を起こしながら船を呑み込みました。

船は海水の轟流にその姿を海の藻屑へと変えていきました。

トルネードが収まつたころにはそこには赤黒く染まつた水が漂うばかりでした。私はそれを見届けると海岸へと戻りました。

海岸に戻ると、私が戻ってきたのとは反対側の海岸でウソップさん達が何やら油のようなものを巻いていました。

「あの…何をしてらっしゃるのですか?」

「ん? おお、長髪の姉ちゃんお帰り! これで海賊たちが登れなくなるんだ!! 激しいだろ?」  
「この人は… 前言撤回です。提督はこんな考えなしではありませんでした。」

「あのですね… それでしたら、今私が全て片付けてきました。なので、これは無意味です」

それを聞いてナミを除く他三名がびしりと固まつた。

「お、おいおいおい、片づけてきたつて…まさか海賊共をか?」

「はい、そうですよ?」

「んな、バカな話があるかよ…」

「いや、姉ちゃんならありうるぞ…」

『え…？』

「お前らも見たことあるだろ？姉ちゃんの武器…あれは一発で海王類ですら仕留めちまうスゲエモンなんだ！そんなのを船なんかにぶつ放したら…もう分かるだろ？」  
ルフイくん、なんだかキヤラが崩壊してませんか？

「あ、ああ…よく分かつた…想像したくねえが…」

「オレも…わかつたよ…容易に想像出来ちまつた…怖ええ…」

二人とも酷いと思いませんか？本人がいる前でその態度は…

「そんなことよりお姉ちゃん、船、沈めてきたんでしょ？お宝は？」

私はにこりとして水の手から宝の入った風呂敷をナミに手渡します。

「これがあの船に会つた全部だつたわ、ちゃんと取つておくのよ？」

「さつすがお姉ちゃん！話が分かるわ！」

その様子にウソップさんはドン引きしていました。

「ま、まあともかく長髪の姉ちゃんが部下共をやつてくれたんなら後はクラハドールだけだ！気を抜かずに行こうぜ！」

『おお！』

そうして夜は更けていき、朝になりました。

完全に火が登ったというのに海賊たちは姿を現しません。

それもそのはずです。だって私が皆殺しちやつたんですからすると、私達の背後から声が聞こえきました。

「これは…いつたいどういうことだ！ジャンゴ!!」

# ルフィ VS クロ！村を守る最後の戦い

s i d e 棚名

こんばんは、ハルナです。

現在私達は執事、いえ、元海賊のクラハドールさんと対峙しています。

「どういうことだ？ 何故アイツらの姿がねえ…」

辺りを見回して状況を把握しているクラハドール。

「まさか、お前らがやったのか？」

こちらに聞いてくるクラハドールにルフィくんが答えます。

「いや、やつたのは姉ちゃんだ」

「お前が？」

その言葉でギロリと私を睨むクラハドールさん

「ええ、そうだとしたらどうしますか？今頃は船の皆さんには魚か、海王類のエサにでもなっているんじやないでしょうか…」

「そうか…よく分かつたよ…お前たちはここで殺す…」

その直後です。突如、音もなくクラハドールの姿が消えました。  
どれだけ早く動いても無意味ですけどね

電探にはクラハドールの反応が正確に映し出されています。

反応が近くなつたところで私は前世から持ち前の高速力を生かして真下に身体を倒します。

刹那、先程まで私の上半身があつた場所に爪のように剣が空を切りました。

「ほう、俺の抜き足を見切るか：面白いじやねえか、小娘」

「関心している所悪いですけど貴方の相手は私じやありません  
私は体を元に戻して言います。」

すると、私のすぐ横から腕が伸びてきてクラハドールを殴ります。

「お前の相手は姉ちゃんじやねえ、オレだよバカ執事」

「そうか…それならまずはお前から切り刻んでやるとしよう…」

不意に上半身を垂らし、身体左右に揺らし始めるクラハドール  
の人、何か始める気ね…：

嫌な予感がした私は能力でナミ達を水の壁でドーム状に囲います。

「!?なんだ?」

「うお!?なんだこれ?」

「これなら安心ね、ありがとお姉ちゃん」

皆さん驚いていますね。ナミは分かつていたみたいですが。

「サンキュー、姉ちゃんこれで思いつきリアイツをぶん殴れる！」

ルフィくんの戦い方は凄く場所を取りますからね。こうしないと全力で戦えないでしよう

「あんな壁で囲つたところでどうせ後で俺に殺されるんだ…無駄なことは止めたらどうだ?」

「死なねえよ、お前じや姉ちゃんは殺せねえしオレだつて殺せねえ」

「ほう、お前みたいな小僧に俺が勝てないというのか?いいだろう…なら試してやる…  
杓死!<sup>しゃくし</sup>」

瞬間、再度クラハドールの姿が消えました。

その後、私達を追つている水の壁や近くの岩肌に抉れた跡ができました。

ルフィくんはクラハドールの位置を捉えようとキヨロキヨロと辺りを見回します。

「い、いつたい何が起きているの?」

「は、速すぎて見えねえ:」

その間にも戦いは激化していきます。

ルフィくんもかなり目で追えるようになつてきているようです。  
すると、電探に新たな反応が…

外はクラハドールの杓死で危険地帯です。いつたい誰が…

「どうしてこのタイミングで！」

私は急いで水壁から出て艦装を装着します。

「ちょ、ちょっとお姉ちゃん！どこ行くのよ！」

即座に付与される艦娘としての能力で杓死を防ぎながら私は進みます。  
電探の反応はもうすぐそこまで来ています。  
見えてきた人影に私は急いで能力を発動させます。

「それ以上来たらいけません！アクア・アーマー・キューリング！」

「え？…これって…」

そうしてすぐにその人のもとに駆け寄ると、そのまますぐにその人の手を引き近くの

茂みへと隠れます。

危なかつたですね……もう少しで巻き添いが起きるところでした。

そうして私は助けた人の顔を見て驚きました。

その助けた人がクラハドールの狙つているカヤさんだつたからです。

「はあ：はあ：危なかつたです。どうしてこんな所に来たのですか？カヤさん」

「私、クラハドールに話をつけに来たんです。」

「話をつけに来た？カヤさんはクラハドールの目的を知つているということでしょうか？」

「そうだつたのですね、でも今は出ていってはいけません。見てみると良いでしょ  
う少しだけ茂みから顔を出して状況を確認するカヤさん。

「ツツ!？」

す。  
今のこの地帯が危険であることがよく分かつたのでしよう、カヤさんの顔が真つ青で

「見てもらえればわかる通り、今の彼に貴女を認識できることはできない状況です。もし貴女があのままあの場に来ていたら即座に切り捨てられていましたでしょう…」

「そうみたいですね：助けてくださいありがとうございます。」

私はそれにニコリとします。すると外から声が聞こえてきました。

「ゴムゴムのお…… ッ!! 鐘え!!」

【ドゴンツ！・・・ ドサツ！】

どうやら決着がついたみたいですね。

「もう大丈夫みたいです。カヤさん、行きましょう」

「え、ええ…」

こうして、シロツップ村での激闘は幕を降ろしたのでした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

あの後、クラハドールは海軍に引き渡し今回の一件はようやく終わりを迎える。そんなある日、私達が以前の食事処で食事をしているとカヤさんが訪ねて来たんです。

「ヽヽヽにいらしたんですね、皆さん」

「あら、カヤさん病気はもう大丈夫なんですか?」

私の問い合わせにカヤさんは頷いて答えます。

「私のここ一年の病気は両親が亡くなつたことによる精神的な気落ちが原因でしたから、ウソップさんにもずいぶん励ましたし…甘えてばかりはいられません。

皆さんにもずいぶんとお世話になりました。」

なので!とカヤさんは続けます。

「皆さんに私からの心ばかりのプレゼントを用意させていただきました。ぜひ、受け

取つてください」

「プレゼント…ですか？」

私達は当然のことをしただけなのに…いいのでしょうか…

「はい、南の海岸に用意してありますので、ついて来てください」

そうして私達はカヤさんに連れられ海岸まで移動しました。

海岸に着くとそこには立派な船が着水していました。

「す、凄い…」

「これホントに貰つていいのか？」

「ええ、ぜひ使つてください」

その後、この船をデザインしたメリーサンから船の詳しい説明を聞いて私達が船に乗り込もうとした時でした。

「ハルナさん」

呼ばれて振り向くとカヤさんがこちらに手招きをしていました。  
私は呼ばれるがままにカヤさんの所まで行きます。

「どうかしましたか?」

「いえ、ハルナさんが以前話してくれたお話しつて全部実体験のものだつたんですね」

「どうして分かつたんですか?」

「前にハルナさんが私を助けてくれたときに見せたあの姿…お話の艦娘そつくりだつた  
んですもの」

あ、あはは… カヤさんは勘が鋭い方みたいですね…。

「もし、またこの村によることがありましたら、また艦娘のお話し聞かせてください」

私はその言葉にこやかに頷いて答えます。

「ええ、ハルナでよければいくらでもお相手しましょう！」

私達が話している間になぜか大荷物と一緒に転がってきたウソップさんがルフにくんとゾロさんの足蹴で止められていました。

そんなこと也有つてようやく出向です。

出向の直前に…

「お前らも元氣でな！またどつかで会おう！」

「なんで？」

「なんでつてお前愛想のねえ野郎だな…これから同じ海賊やるつてんだから！そのうち海で会つた r…」

「何言つてんだ、早く乗れよ」

「…へ？」

「俺達、もう仲間だろ?」

「・・・・・き、キャプテンはオレだろうな!」

「バカ言え!オレがキャプテンだ!」

などというやり取りがあり、無事にウソップさん改め  
ウソップくんが仲間に加わって旅は始まつたのでした。

# 宝島での再会！鎮守府より来たる新たな仲間！

s i d e 棚名

こんにちは、ハルナです。

今私達はカヤさんから頂いた船で航海中です。

「それにもしてもお姉ちゃんのソレ、相変わらず凄い速度よね」

「それにこの船すら引っ張つて走れる馬力だ、まつたくタダモンじやねえなお前の姉ちゃん」

「おまけに水を操る万能能力者と来た！こりや！俺達の航海に怖いものなしだな。」  
上から順にナミ、ゾロさん、ウソップくんが喋っています。

そう、三人の話から察することができると思いますが…

今、私は艦装をつけ、メリーア号を引いて走っているんです。

なんだか私ばかり頼りにされているような気がしますけど気の所為でしようか…。

「できたーー！」

今度はルフィくんの声が聞こえました。何かを作っていたようです。  
すると、船の上から何か言い合うような声が聞こえました。  
私は不思議に思いつつも船を引いて走ります。すると…

「お姉ちゃん！ちょっとこっち来て！」

ナミに呼ばれた私は船を引くために繋いでいた鎖を解き、船の上へと上がりります。

「どうかしたの？急に呼ぶなんて」

「これ見てよ…」

そう言つてナミはルフィくんを指さします。

それにつられてルフィくんの方を見ると、手には大きな海賊旗！  
・・・・に描かれた威厳もへつたくれもない落書き。

「どうだ姉ちゃん！いいだろ？」

「な、なんですか？この落書き…」

「酷いでしょ？これが私達のマークなんですって…」

「さすがにこれは俺も無理だな…。これが死の象徴だなんて言つたら笑われちまう」

「えー！姉ちゃんも駄目なのか!?ちえつ！」

不貞腐れるルフィくん。あれはどれだけ控えめに見ても駄目ですね…。

「仕方ねえな！オレに任せときな！」

そう言つて立ち上がつたのはウソップくんでした。

しばらくして…

「よーし! 完成だ! どうだ?」

描き終えたウソツプくんの手には、バンダナをつけた鼻の長い髑髏マークが描かれた海賊旗がありました。

それを見たルフィ＆ゾロさんは。

『誰がお前の海賊旗を作れって言つた・・・』

パコンッ! と軽くウソツプくんを殴ります。

「いってて・・・冗談だつて、ほらコイツだ!」

そう言つて取り出したもう一つには、麦わら帽子をかぶつた髑髏マークが描かれていました。

「おお! スゲエな! 気に入つた!」

「へえ? 結構うまいじゃない?」

「これが俺達のマークか？」

「私は良いと思います。」

上からルフィ、ナミ、ゾロさん、そして私の順に思い思いの感想を言います。  
そして私の順に思い思いの事を言います。

「よーし！ウソップ、帆にも描いてくれ！」

「おーう」

しばらくして、帆にも海賊旗と同様のマークを描き終えるとルフィくんは言います。

「よーし！完成！これで海賊船、ゴーイング・メリーアー号の完成だ！」

「それじゃ、私はまた船を引きに戻るわね」

私が艦装をつけ、海に降りようとした時でした。

「待つて！お姉ちゃん、出来たらあの暗雲の方に行つてほしいの」

そう言つてナミは雲が立ち込める方を指します。

「あの雲の中に? いいけれど、の中に何かあるの?」

「あるわ! 伝説の宝島が!」

それに食いついたのはウソップくんでした。

「伝説の宝島? 聞いたことあるぞ」

「そう、海賊たちの間では有名なのよ: 妙な噂と共にね」

「妙な噂?」

ナミのその言葉にルフィくんは首をかしげます。

「あの島に近づくものは: 神の怒りに触れるつて...」

神の怒り...あの神様とは別の方なんでしょうか。

ともかく宝があるんだつたら行ってみるしかないわね!

「分かつたわ、それじゃあの暗雲の海域に向かうわね」

そう言つて私は艦装をつけて着水しました。

更に水流を操り船を持ち上げると、全速力で暗雲の中を突つ切りました。

そうしてたどり着いた宝島。

「いくぞ!! 宝島!!」

「おいおい、本気で行くのかよ…オレ、持病の島に入つてはいけない病が…」

「大丈夫ですか？それなら船の中で待つていても…」

と言いかけた私を遮るようにウソップくんは言います。

「だ、大丈夫だ！オレは勇敢なる海の戦士キャプテンウソップさまだからな！  
さ、行こう」

そそくさとルフィくん達をおつて、島へ入つて行つてしましました。  
・・・なんだつたんでしょうか？

私も急いで後を追いかけます。

しばらく歩くと、かすかに声が聞こえてきました。

「みんな、静かに！今何か声が聞こえたわ」

私の言葉に皆は一斉に静かになり耳を澄まします。

「別に何も聞こえないわよ？聞き間違いじゃないの？」

私は首を横に振り、

「いいえ、確かに聞こえてくるわ……こっちの方から」

一人歩き出しました。

「あ、ちょっとお姉ちゃん！」

ナミが呼び止めるのを聞かずに私は声の方向に向かいました。

声のする方にしばらく進むと、長い金髪の少女が、箱に入つたたわしのような頭をした男の人を引っ張つてゐる場面に遭遇しました。たわしのような頭をした男の人を引っ張つていました。

「うーん！・うーん！！はあ、取れないっぽい…」

「イデデデデッ！だから言つてんだろ！この箱に俺の身体がミラクルファイットしちまつて取ろうにも取れねえんだって…」

この島の先住民の方でしようか。

私はどうしたのか話を聞こうと近づきます。すると…

「ん？ぬおっ！また海賊か！ほれチビ！早く規定の位置につけ！」

「ぽいっ！」

私が姿を現すと、二人は即座に散り散りに別れてしましました。  
私がどうしようか悩んでいると。

「さあ! 素敵なパーティーしましょ!」

その姿に私は驚愕しました。

その少女は、背と手に艦装を着けていたのですから。  
あの艦装。それに、先ほどのあの口調。まさか…

「貴女、もしかして夕立ちゃん?」

「ぽい? 確かに私は夕立だけど…。その、なんでその名前を知ってるの?」  
明らかに警戒されていますね…。仕方ありません。

私は瞬間的に艦装を装着します。

「こうすればわかりますか?」

私の艦装を見て驚愕し目を丸くする夕立ちゃん。

「も、もしかして…榛名さん…なの？」

その問いに私はニッコリ笑つて答えます。

「ええ、高速戦艦、金剛型の三番艦！榛名です。」

「ホントに…？ ホントのホントに榛名さん？」

疑り深い子ね…。こんなに慎重な子だつたかしら？

「はい！本物の榛名ですよ？ 夕立ちゃん」

それを聞くと夕立ちゃんの顔がくしやつとゆがみ、そのすぐ後に、私に抱き着いてきました。

そのすぐ後に、私に抱き着いて來たんです。

「… つ!! 榛名さん！ 会いだがつだ…！ 会いだがつたぽいよお…！」

私の服に涙と鼻水でくしやくしやの顔を擦り付ける夕立ちゃん。

「…」

私はその様子を優しく微笑みながら彼女が落ち着くまで、そつと頭を撫でていました。

その隣では、いつの間にか来たルフィくんに、たわしの方が頭を引っ張られていまし

た。  
ルフィくんつてば、もう…

しばらくして。

「落ち着いた?」

「うん…ごめんなさいっぽい…」

ようやく落ち着いた夕立ちゃんが謝つてきました。

「良いのよ、久しぶりに会えたんですから。でも夕立ちゃんはどうしてここに?」

「ソイツはオレがこの島で拾つて育ててやつたんだ。それより、コイツ……どうにかしてくれ！ イデデデデデッ！」

見ると、ルフィくんはいまだにたわしさんを引っ張り続けていました。

「はあ……ルフィくん？ いい加減に止めなさい」

少し声を低めに私は言います。

「は、はい！ すいません！」

それを聞いて即座に離れるルフィくん。その様子を他の方々が啞然としてみてます。

「あ、あのルフィが言う事を聞いた？ 信じられねえ……」

「お姉ちゃん、ルフィの扱い上手過ぎじゃないかしら？」

「怖えええ！！」

「流石は鎮守府の裏提督:威圧感が凄いっぽい…」

皆が思い思いの事を口走っていますが気にしません。

ルフィくんが離れたことを確認した私は妖精さんを複数呼び出します。

『(、・ω・)ノグツ!』

妖精さんがこちらを見てサムズアップします。

その様子を見て私は夕立ちゃんにも声をかけます。

「夕立ちゃん、あなたの妖精さんも出してもらえる?」

「?分かつたわ」

そう言つて妖精さんを複数呼び出す夕立ちゃん。

『(、・ω・)ノグツ!』

その妖精さん達の様子を見て私は妖精さんたち全員に声をかけます。

「今からあなた達にはあの人の箱を解体してほしいんです。出来ますか?」

『(、・ω・)ノグツ!!』

任せろ!と言わんばかりの力強い仕草に私は微笑み、言います。

「では、お願ひしますね」

すると妖精さん達は何処から取り出したのか、ハンマーや鋸と言つた数々の工具を手に、

たわしさんの箱を解体していきます。

その素早い作業によつてものの十分で妖精さん達は箱の解体を終わらせてしました。

流石に早いですね。解体はお手の物と言ふことなんでしょうか。

たわしさんは自身の身体を見て驚愕しています。

「お、おおおおお…！箱が…箱が壊れたぞおおお!!って痛てててつ！！  
ずっと動かしていなかつたから上手く動かねえ…おい、娘、頼む！ちよいとほぐして  
くれ」

「はあ? なんで私が「ナミ?」はい、やらせていただきます……。」

私は一つ頷き、タ立ちゃんを見る。

「そう言えばタ立ちゃん。ちょっと聞きたいことがあるんですけど、少しいですか?」

「え? わたしに? いいよ」

「それじゃあ、少し向こうに…ナミ、ちゃんとやつておくのよ?」

それだけ言うと私はタ立ちゃんを連れ、その場を後にしました。

・ ·

「ヽヽヽでいいでしよう」

私は適当な場所に腰を下ろします。

「それで、私に話つて、なあに?」

「それはですね、あなたがどうやってこの世界に来たのかを聞きたいんです。」

「私がこつちに来た時？」

私はこくりと頷きます。

「はい、私は以前ここに来る前に神様という方にお会いしているんです。」

「そ、それって轟沈した後につてことつぽい？」

「え？ ああ、確かにそうでしたね、轟沈した直後でした。」

「なんだ：私も同じだよ、敵戦艦の弾を受けちゃつて…」

「その時に何か貰いませんでしたか？」

「え？ あ、貰つたつぽい、なんだか変わった色の果実」

そう言つて懐からその果実を取り出す夕立ちゃん

「それはもう食べましたか?」

夕立ちゃんは首を横に振ります。

「ううん、まだっぽい:ガイモンのおじさんにきいたら『そんな気味の悪い色の果実なんか食うんじゃねえ』って言われたっぽい」

「そうでしたか、それなら食べた方がいいです。それは悪魔の実と言つて、  
食べるとその人物にとても強力な力を分け与えてくれる物なんです。」

「悪魔の実!?これってそんなすごいものだつたの!?今すぐ食べるっぽい!」  
いきなり果実に齧り付く夕立ちゃん。でもすぐに…

「?!う、つ!なにこれえ:ものすゞくマズイっぽい!」

「それをなんとか全部食べ切らないと力は手に入りませんよ?頑張つてください!」

「うう…頑張る…」

その後夕立ちゃんは、もう自棄になつたみたいに悪魔の実を平らげました。

「うええ…吐きそう…」

「吐いたらだめですよ？はい、お水です。」

私は近くの海水を変異させた飲み水を夕立ちゃんに渡します。

「ありがとー…ンクツンクツ！ ハア～なんとかなつたっぽい…」

「それはよかつたです。」

「そう言えば榛名さんもあのマズイ果実を食べたの？」

「ええ、私も食べましたよ」

「ど、どんな能力だつた?」

「私のは水を操る能力でしたね。さつきのお水も能力によるものですよ  
私のその言葉に夕立ちゃんは目を丸くします。

「え!? あれって能力だつたの!? 私のはどんな能力っぽい?」

「よくわかりませんね、きっとその内に分かってくると思いますよ」

「そつか、そだよね!」

「はい、それじゃあそろそろ皆さん所に戻りましょう」

「分かつたっぽい!」

「あ、戻る前に一つ、言い忘れていました。悪魔の実の能力者になると泳げなくなります  
から、海に入るときは必ず艦装を着けていてくださいね?」

「はーい」

それだけ伝えると、私達はルフィくん達の所に戻りました。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ただいま戻りました。」

「ただいまっぽい！」

戻つてみるとガイモン？さんがみんなに何か話をしていた所だつたみたいです。

「おお！ 姉ちゃん達お帰り！ 今からそつちの金髪について話すところだつてよ」

「夕立ちゃんの？」

私達はルフィ君の近くに腰を下ろします。

「みんな揃つたな？ そんじやいくぞ？」

話をしよう…あれは今から十八年前…

『オレがこの島に来て二年目くらいの話だ。

海岸にボートが見えたもんで俺は急いで海岸へ向かつた。

それでボートの中をのぞいてみたら、すやすやと眠る赤ん坊が一人いたんだ。』

「近くに両親らしき人影はなかつた。赤ん坊一人を放つておくわけにもいかず、オレは赤ん坊の面倒を見ることにしたんだ。」

「その赤ん坊は不思議な奴でよ、夜泣きどころか泣くことさえあまりなかつた。  
しかも俺の言うことに対する確に相槌のような仕草をとるもんだから、  
オレは驚きっぱなしだつたぜ」

「それからは森の動物たちと協力しながらその赤ん坊の世話をしたよ。

あやしたり、飯をやつたり、勉強させたり…」

「最初はこんなチイコイガキンチョだつたのに、いつの間にかこんな成長しやがつてよ

⋮。

身体だけはいつちよまえにデカくなりやがつた…」

「というのがお前だ、チビ」「

「むーつ！わたしもうチビじやないっぽい！」

チビと言われてむくれる夕立ちゃん。

「オレからいわせりやまだまだチビだよ。」

ツーンと顔を背ける夕立ちゃん。それを遮るようにルフィくんが話し出します。

「とにかくだ、たわしのおっさんはその宝を守つてたんだろう？ならそのお宝、オレが持つてきてやるよ」

「ほ、本当か!?」

「い、いいの!?」

ルフイくんの言葉に驚いている二人。

「ああ、おっさんがずっと守ってきたモンなんだ。俺達がどうこうすることじやねえ」

「！！ありがとう…！」

そうして私達はその宝が眠っている場所へと向かいました。

「ここのつぼい。お宝がある崖は」

「ぽいなのか？」

「あ、それはこの子の口癖みたいなものですから気にしないであげて」

私は慌ててフォローを入れます。

「そつか、んじやあいつてくらあ！ゴムゴムのお…！」  
両腕を伸ばし、崖の上に手をかけるルフィくん。

「口ケツトオ!!」

そのまま一気に崖を飛びあがりました。

ルフィくんは崖の上に着地するとその奥に消えていきます。

「どうだ？あつたか！」

しかし返事は帰ってきません。

「何やつてんだ？アイツ」

「ルフィイ！」

「おーい！ルフィ！」

「どうしたの？いつたい！」

「早く教えてっぽい!」

みんなが大声で叫びます。

すると崖の上に宝箱を抱えたルフィくんの姿が。

「あつたぞ! 宝箱五個!」

「で、でかした! アハハハハハハ!」

ついに手に入れた! 宝だ宝だ!

ここへ落としてくれ! 僕の、いや、俺達の宝を! 早く早く!」

しかしルフィくんはニヤリと口許をゆがめてそれを拒否しました。

「いやだ」

「なにつ!?」

「いやだね、渡したくねえ」

その言葉に皆は叫びます。

「なにバカなこと言つてんのよ！冗談はやめて！」

「そうだ！その宝はガイモンさんの物だぞ！落とせ全部！」

しかしルフィくんは宝箱を落としません。返事もしないで黙つたままです。

「なんで黙つてるの！早く落としなさいよ！撃ち落されたいのっぽい！」

「……」

「アンタ！いい加減にしなさいよ！お姉ちゃんも何か言つてあげて！」

私はその言葉に首を横に振ります。

「なんで！「いいんだ……」え？」

「もういい…」

「なんで? おじさん」

「いい訳ないじやない!」

「そうだぜ! ガイモンさんが二十年も守り続けた宝だぜ?」

ガイモンさんは目に涙をためて言います。

「麦わら、お前は…いい奴だなあ…」

「どういうこと?」

訳が分からぬといつた顔でナミは聞きます。

「薄々勘付いてたんだ。なるべく考えないようにしてたんだが…。  
無いんだろう? 中身が…」

「え?」

「なにつ？」

「え？ ウソ？ それホントっぽい？ 麦わらのお兄ちゃん！」

「…ああ、全部空っぽだ」

やつぱり。そんな事じやないかと思つていたんです。電探には箱の反応はあつても中身の反応はありませんでしたから…。

「そんな…二十年も守り続けていた宝が全部空箱だなんて…」

「宝地図が存在する宝にはよくあることなんだ…

行つてみると宝はもう盗まれた後。

それだけ宝探しは海賊にとつて試練だつてことさ。

一生待とうが、命を落とそうが、宝に手が届かねえ

そんな海賊は腐るほどいる…」

「おじさん…」

「ハツハハハハハハ！まあクヨクヨすんなよおっさん！」

二十年で俺達が来てよかつたよ、後三十年遅かつたら死んでたかもな！」

「その時は私がその崖を登つてたっぽい！」

「麦わら…チビ…」

「これだけバカ見ちまつたらもう後はワンピースしかねえだろ！俺達と一緒にもう一回海賊やろうぜ！」

「あの…それって私も一緒に行つていいくっぽい？」  
「おずおずと手をあげる夕立ちゃん。

「ああ、もちろんだ！お前、姉ちゃんと似たような力持つてんだろう？面白いじゃん」

「おおお…おまえ、俺達を誘つてくれるのか？ううう…この面を見て俺と話そなんていう奴いなかつたのに…。人を信じたのは何年ぶりだろ？…ありがとうございます。」  
そして、時間が流れました。

「ホントにこの島に残んのか？おっさんにチビスケ」

「うん、だつておじさん一人だと心配っぽいし」

「余計なお世話だ。

「ああ、麦わら…。宝は無くなつても、オレにはまだ守りたいものがあるんだ」  
そう言うとガイモンさんの後ろにぞろぞろと奇妙な動物たちが現れたのです。

「こいつらと二十年、つらいこともうれしいことも分け合つた。離れるわけにはいかねえさ」

ベロベロと動物たちに舐められるガイモンさん。少し、微笑ましいですね。

「宝が無いとわかつてオレは初めて自由になれた気がするよ。

これからは本当に自分らしい人生を送れそうだ」

「そつか、残念だ。おっさん達面白いのに」

「珍獣が真の仲間か」

「まあおっさんが一番珍獣だつたけどな」

「なんだと!!」

『アハハハハハハ!!』

「榛名さん、生きてまた会えたこと、すごくうれしかつたっぽい。これから大変だろうけど頑張つてね」

「ええ、夕立ちゃんも箱なんかに詰まらないでくださいね?」

「分かってるわ！」

「じゃーなー!!」

こうして私達はまた海へと出たのでした。

s i d e o u t

s i d e 夕立

榛名さんたちを見送つて少し経つた。

「なんでおめえはいかなかつたんだ? チビ」

「なんでつて、おじさんが一人だと心配だからっぽい」  
フンッと鼻を鳴らすおじさん。

「オレは子供が一番嫌いなんだよ! 正直言つてなあ! お前は俺のお荷物なんだよ!」

オレにも動物たちにとつても!」

その言葉に同調するかのようになに唸り始める動物さん達。

「な、なによ! 今まであんなに可愛がつてあげたのに! 分かつたわよ! もう良いこんな島! こつちから出ていってやるっぽいし!」

私は艦装を着けて勢よく海へと飛び出したっぽい。

「ヘンツ! 麦わらの船がまだ遠くに行つてねえだろ? からさつさと追いつくこつたな! 沈まねえことを祈つてやるさ!」

「つづ!! このクソジジイっぽい!!」

私は全速力で麦わらのお兄ちゃんの船を追いかけたの。  
しばらく走るつたら、船が見えてきたっぽい。

「見つけた! おーい! ちょっとー、止まつてっぽー!」

私は急いで声をかける。

すると、こちらに気づいてくれたのか、船のスピードを落としてくれた。  
なんとか船まで近づくと、船から梯子が降りてきた。  
私は艦装を外し、船に上がっていく。

「どうしたの？ 急に追っかけてくるなんて…」

「おつさんと喧嘩でもしたか？」

「あはは…私、邪魔だつて追い出されちゃつたっぽい…さつき残るつて言つておいて言  
いづらいんだけど…私も一緒に行つていい？」

私は恐る恐るみんなの顔色を窺う。

「ああ、いいぞ」

「これでまた一段と賑やかになるな」

「楽しくなりそうね！」

「よーしーここは一丁、宴でも開くか!」

「夕立ちゃん…」

お兄ちゃん達はオツケーしてくれたけど、榛名さんが難しい顔してゐる…。  
やつぱり駄目なのかな?

「… やつぱり駄目っぽい?」

すると榛名さんは首を横に振つて… 微笑んだ。

「ようこそ麦わら一味へ、歓迎するわ夕立ちゃん」  
その言葉に胸の奥が熱くなつた。

「うん!これからよろしくっぽい!」

私はそう言つてから島の方を見る。

きつと誰もいないよね…。

だつてみんな、私の事嫌いだつたんだから。

でも、それは違った。

おじさんや動物さん達はまだ海岸にいたの。  
顔をくしゃくしゃにしながら手を振つてくれたいた。

「くくつつ!!みんなく!!行つてくるっぽーい！」

すると声が帰つてきたっぽい！

「気をつけろよー!!体には十分に気を付けるんだぞー!!」

私も声が届くように声を張り上げる。

「分かってるく!!行つてきまーす！お父さーん!!」

こうして私は海賊として海に出ることになつたっぽい！

# 海上のコックを探せ！向かうはレストランバラティエ！

s i d e 棚名

こんにちは、ハルナです。

今、私達は今後の方針を決めるために会議を開いています。

「これは教訓ね…」

「ああ、長い船旅にはこんな落とし穴もあるつてことか」

何故：こんなことになつてているかを説明しますと…。

これは今朝がたのこと…。

ルフィくんが大砲の練習をするといつて船に積んであつた大砲を引っ張り出してきて撃つていたんです。

それが中々的（この場合は的になつた島ですね…。）に命中しないのを見かねたウソップくんが変わりに撃ちました。

砲弾は見事的に命中…したのですが、そのすぐ後、船に何者かが乗り込んできたんで

す。

幸い、ルフィくんがすぐに無力化してくれたので船に大事はありませんでしたが、その人の連れている方が問題でした…。

その人は壊血病の病人だつたのです。

それに気づいたナミがすぐにルフィくんとウソップくんに指示を出し、その人にライムを食べさせてなんとかその場は落ち着きましたが、ライムを食べたとたんに元気になつて走り回り始めたんです。

でも、そのすぐあとにまた倒れてしまつて今は船の寝台で休んでいます。

そして、話は最初のナミとゾロさんの会話に戻る訳です。

「よく考えたら、必要な能力つて訳ね…。」

そういうのはお姉ちゃんがやつていたから気にしたことなかつたけど…」

ええ、いつもみんなが元気でいられるように全力で腕を振るつていますから！

「確かに姉ちゃんの飯はうまいもんな。でも、必要な能力ねえ…。よし！海のコツクさんだ！海のコツクを探しにいこう！」

ルフィイくんが突然そんなことを言い出して、みんなが啞然としています。

「そうか! そうすりや、船でも上手いもんが食えるつて訳だ!」

「そー言うわけ!」

「ちょ、ちょっと! アンタ達…」

その言葉に私は少し声のトーンを落として声をかけます。  
ナミが慌てていますがもう遅いです。

「お二人とも、すこーし、いいかしら?」

『ん?…!?

私の方へ振り向いた二人は、一瞬で顔を青く染めます。

「今の言葉…どうにも私の料理は美味しいくない…みたいに聞こえたのだけど?」  
その言葉に二人は慌てて首を振ります。

「ち、ちちちげえって！姉ちゃんの料理が不味いんじやねえって…」

「そそそそだぜ！たたただ、オレはハルナの負担が減るかなつて思つて…」

「…………」

二人の言葉に私は無言で見つめます。

『す、すいませんでしたーーっ!!』

勢いよく土下座する二人。

「はあ、ホントにバカなんだから…」

「ははは…（怖え…ハルナはあまり怒らせねえようしねえと）」

「ガダガダガタガタガタ…」

呆れるナミに真っ青な顔で苦笑するゾロさん、それにガタガタ震えているジヨニーさ

んを横目に、私はずっと二人に圧を掛けっていました。

「これからしばらくして、ようやく場の空気が落ち着いたところでジョニーさんが口を開きました。

「コックを探すって言うんなら、うつてつけの場所がありますぜ? 姐さん」

その言葉に私は鋭くジョニーさんを睨みます。

私の料理は美味しいのか? という意味合いを込めて。

「べ、別に姉さんの料理が駄目って言うわけじやありやせん! ただ、麦わらのアニキが言つていた提案にうつてつけの場所があるつて教えるだけなんですから…」

そう言われて私は睨むのを止める。

「そ、それってどこにあるんだ?」

恐る恐る顔をあげたルフィくんがジョニーさんに聞きます。

「しかし、そこはもうグランドライン…偉大なる海の近く、アニキがずっと探していた鷹の目の噂を聞くところ」

すると、ゾロさんがピクリと反応しました。

「進路は…北北東！ 目指すは海上レストラン！ バラテイエ！」

『おお〜!!』

これは確かにスゴいです…。まさかこんな場所があるなんて…知りませんでした。

「どうつすか？ 皆さん！」

「おおー！ デッケえ魚！」

「素敵じゃない！」

「ファンキーだな! おい!」

「スゴーイ! これがレストランっぽい?」

「レストランというよりは…魚…ですね」と、ここから少しだけ長くなりますので説明口調にしますね。

そんな風に海上レストランを見て驚く私達のもとに一隻の海軍の軍艦が寄つてきました。

その船には、海軍大尉のフルボーディと言う方が乗つていらつしやいました。

大尉は部下にこの船を沈めるよう命令して、自身は連れている女性と船を降りていきました。

大尉の指示によつて砲門をこちらへ向けた海兵は、導火線に火を点け、大砲を撃つてきました。

私が水の壁をつくつて防ごうとしましたが、それを制止してルフィくんが自身の身体で受け止めました。が、身体を支えるために掴まつていた手が外れてしまい、受けた砲弾はあらぬ方向へと飛んでいくと…

【ドッゴオオオオン!!】

見事に海上レストランの屋根に着弾しました。

「やつちやつたっぽい…」

辺りには夕立ちゃんの呟きだけが木靈していました…。

s i d e o u t

s i d e 夕立

あの後、すぐにコツク服の人たちがきてルフィを連れて行つちやつたっぽい。  
心配だから私も着いていつたんだけど…

そこに居たのは、伸ばした髪？を三つ編みにしている恐そのお爺さんだつたの…。

「店の屋根の修理代にワシの治療費…おめえこの件は高く付くぞ…」

「別に、まけてくれなんて言わねえさ…でも、金はない！」

ガクツ! ルフィ、それは威張つて言うことじやないっぽい……。

「へつ! きつぱり言いやがるぜ……んで、そつちの小娘はいつたい何の用だ? いきなり私の方に話を振らないでほしいっぽいけど……。」

「別に……私はルフィイが、心配だからついてきただけっぽい」

「ぽいだと……?」

「ああ、コイツのこれは気にしないでくれ、姉ちゃんが言うにやただの口癖らしいんだ」  
私の語尾に引っ掛かりを覚えたのか、聞き返してくるオーナーさんにルフィイくんが助け船を出してくれる。

「ハツ! それが口癖か、面白い事言いやがるぜ。」

「まあ、金がねえんじや、働くしかねえな」

「ああ、ちゃんと償うよ」

軽いっぽいね・ルフィ、ちゃんと分かつてるっぽい?

「1年雑用タダ働き…」

「え?」

「ああ、1年タダ働き!…って! 一年て、1年かーー!?」  
やつぱり、こういうことになるっぽいのね…。

「あの…それ、私も手伝うから…もう少し短くすることは出来ないっぽい?」

流石に一年も待つていられないっぽいしね…。

私の言葉にオーナーさんが目を丸くしてから答える。

「そうだな、おめえがソイツの倍以上頑張るつてんなら一月にまけてやってもいい…」

「ホント! やる! やるから一月にして! お願ひ!」

「ユウダチ、お前…つて! ち、ちょっと待つてくれよ!

1ヶ月でもイヤだぞ! オレは!」

イヤだつてルフィ…これ以上言つたら…

「キッチリ! 一月…働け!」

鋭い蹴りがルフィに飛ぶ。

やつぱり…

そこから先は、ただの意地の張り合いだったので、私は巻き込まれないように外で待つていたつぽい。

s i d e o u t

s i d e 棚名

ルフィくんが連れていかれてから少しした頃のことです。

「腹も減つてきたし、中で飯でも食おうぜ」

「そうね、いつまでもルフィを待つてらんないわ。行きましょ、お姉ちゃん」

「え、ええ…そうね」

大丈夫でしょうか…タ立ちゃん…。

中に入ると、先程の大尉が黒い服に身を包んだ男の人に首を絞められていきました。

「これって…」

「な、なんだ？」

「喧嘩か？」

「酷いですね…いつたい何が…」

すると、レストランの天井が崩れて人が降つてきました。

「はあー！ビックリした。」

「大丈夫っぽい〜?」

上から声が聞こえますね。：

見上げると空いた天井から夕立ちゃんが顔を覗かせていました。

「夕立ちやん? ということは…」

穴から下に視線を移すと…。

「よお！」

やつぱりルフィくんでした。

「クソツ！ なんてこつた！俺のレストランの天井を」

そう言つて崩れた天井を見上げるお爺さん。

「てめえのせいだ！」

「おっさんが壊したんだろ！」

二人で言い合いを始めてしました。  
…これ、もう倒れてもいいですか？

### 【フラツ】

「おつと…大丈夫？お姉ちゃん」  
ナミに支えられてしました…。情けないです。

「ごめんなさい、ちょっと頭痛が…」

主にルフィくんのせいです…。  
お姉様方…霧島…助けて…。  
こうして、騒がしい一日は過ぎていったのでした。

さようなら、みんな…ナミとハルナまさかの離脱！

s i d e タ立

ヤツホー！タ立だよ。

今私とルフィはレストランで働いてるんだけど、前回から少し時間が経っているつぽい。

だから、私が超がつくほど簡潔にまとめて説明するつぽい。

・大尉が捕えていたクリーク海賊団の一人が脱走してレストランにやつて來た。

・パティさんがその海賊をぼこぼこにしてお店の外に放り投げたつぽい。

・副料理長さんが料理をその海賊に食べさせて逃がした。

・ルフィが副料理長さんに目をつけて、仲間にしようとしたスカウト中つぽい。

というのが今に至るまでに起きた出来事つぽい。

それで今は…

「新入り！料理上がつたから持つていけ！」

「はーい！」

「あ、ウエイトレスさん、ちょっとといい？」

「あ、はーい！今行きますー！」

もう、目が回るっぽい…

とりあえず料理運ばなくちゃ。

「おまたせしました。お料理になります。」

「ありがとう」

「ごゆつくり～」

は、早く終わって～!!

その間ルフィは…。

【ガシャーン！ ガシャーン！】

『お前は何枚皿を割つたら気が済むんだ！』

怒られてるっぽい…。

と思つたら厨房から摘み出されたみたい。  
ルフィに注文なんかさせて大丈夫っぽい？

「ウエイトレスさーん！」

あ、呼ばれたっぽい。

「はーい！」

注文を聞いてキツチンにお願いしてから私はまたルフィの様子を見る。

あ、お客様に絡まれてるっぽい…。

いつたいなにしたっぽい？

物を運びながらそれとなく見てみる。

なんだ、榛名さん達だつたっぽい。

「お待たせしましたー」

「ああ、ありがとうねウエイトレスさん」

「いえいえ、ごゆっくりどうぞ！」

あ、ゾロに何かされてる…。何したの？ いつたい。

皆を観察してたら急にやつてきた副料理長さんに、私はどこかに連れ込まれてしまつたっぽい。

「なあ、新人ちゃん。あの席に座っているお姉さんたちはいつたい誰なんだ！」

鬼気迫る顔で詰め寄つて来て怖いっぽい…

「えつと… ハルナさんとナミの事っぽい？」

「そうそう、ナミさんにハル…ナ？ おい！ それは本当か！」  
ガクガクと私の肩を揺らす副料理長さん。

「ゆ、揺らさないでっぽい…」

「あ、悪い…」

そう言つて手を離してくれる副料理長さん。

あー… 頭がくらくらするっぽい…。

いつの間にか副料理長さん、榛名さんのどこに行っているし…。

もういいや、とにかく仕事するっぽい！

私はホールに戻つていった。

それからしばらく時間が経つて。

「はあ… ようやく終わつたっぽい」

「おう、お疲れさん。よく頑張つてたな新人ちゃん」

副料理長さんが声をかけてくる。

「ありがとっぽい… 疲れた…」

「ははは、まあ新人にはかなりキツいだろうな。まあ俺も出来る限り助けてやるから頑張つてくれよ」

「はーい…」

早く慣れないと死んじやうっぽいよお…

「ああ、そうだ。新人ちゃん、ちょっと頼まれてほしいことがあるんだけど」

「え？」

「お前のとこの船にハルナつて人いるだろ？ ほら、昼間に食いに来てた…」

「ああ、うん、分かるっぽい」

「その人をちょっと連れてきてほしいんだ。オーナーと三人で話があるから」

榛名さん、なにかしたっぽい?

その言葉に私は領いて船に戻つていった。

s i d e o u t

s i d e 榛名

私は甲板で空を見上げていました。

ルフィくんに夕立ちゃん… 大丈夫でしょうか。  
何か問題を起こしてないと良いんですけど…。  
すると、背後から声がかけられました。

「榛名さん、ここにいたっぽい?」

その声に振り向くと、そこに夕立ちゃんがいました。

「夕立ちゃんじやない、どうしかたの？」

「えっと、副料理長さんとオーナーさんが、榛名さんを呼んでるっぽい」  
その言葉に私は疑問を覚えました。

ルフイくんでも夕立ちゃんでもなく私……？

「分かったわ。行つてみるわね」

私は夕立ちゃんと別れ、オーナーさんの部屋に向かいました。

「久しぶりだな、娘」

言われた通りオーナーさんの部屋に来て、私が呼ばれた理由がわかりました。

「ええ、十年ぶりですね。ゼフさん」

「ほう、よく一発で分かつたな…」  
シエルエットが特徴的ですからね。

「貴方のそのお髪を見れば直ぐに分かります。そられてしまつていたら分からなかつたかもしませんけど」

「へっ！きつぱり言いやがつて。でも、おめえ、随分成長したな」

「十年ですかね、私だつて成長しますから…」

「時が経つのは早えもんだ…」

「ええ、本当に…」

と、そこで私はサンジくんを見て言う。

「それにしてもサンジくん、大きくなつたわね。前に見た時はこおんな小さかつたの

に…」

「それは姉さんも同じだろ？あの頃から綺麗だつたのにまた一段と美しくなりやがつて…」

あら、殺し文句言われちゃいました。

「そんなことが言えるようになるなんて嬉しいわ…。お礼に御褒美あげますね。」  
私はそつとサンジくんに近づいてぎゅっと抱きしめます。

「なっ！？い、いきなり何すんだ！」

慌てふためいてるサンジくんを他所に私は別の事を考えていました。  
もうこれが、最後の再会になるのでしょうか…。と

その後はゼフさんやサンジくんと雑談をしてその日は終わりました。

船に戻ると甲板にナミがいました。

「あ、お姉ちゃん、帰つて来たんだ…」

「ええ。どうかしたの？暗い顔して…」

いつもと様子がおかしいです。これは何かありましたね…。

「アーロンがね、また暴れ出したらしいの…。ここ最近は大人しかったのに」

「え?!アーロンが?」

予想だにしていなかつたもので、驚いてしました。

「そう…。もうそろそろ潮時かも知れないわね」

「くりと頷くナミ。

「ナミ。辛いかも知れないけど、出ていく準備だけはしておいてね」

「うん…。わかってる」

もう楽しい時間は終わりなんですね…。

翌晩のこと。

私はまた、甲板から空を眺めていました。すると……。

「お嬢さん、そんなとこにいないでこつちで一杯どうだい?」

見ると、サンジくんが向こうの船から声をかけてくれていました。

私は船を移り、サンジくんの元へと行きました。

「……何か悩み事か?」

「え？」

急にサンジくんがそんなことを聞いてきて私は驚きます。

「どうしてそう思うの？」

「悩みでもなきやそんな泣きそうな顔はしねえだろ？」

「え！ 嘘っ！」

私は急いで顔を隠します。

サンジくんは特に気にすることなく話し続けます。

「一人で抱え込むのは『立派だけどよ、辛いんなら誰かを頼つてもいいんじやねえか？』

「い、いつたい何を言つているの？」

「強がんなくても良い。今だけは泣いてもいいと思うぜ？」

それを聞いて私はもはや自身の感情が抑えきれなくなつてしましました。

「うう… グスツ…」

「俺に話してみろよ…。何か協力できることもあるかもしだねえ」

私は聞く姿勢をとつたサンジ君の腕の中で、泣きながらポツリポツリと話しました。  
その間サンジくんは黙つて聞いてくれていました。

その顔が憤怒に歪んでいたことを知らずに…。

目が覚めると、そこは知らない部屋でした。

「…」

私は確か、サンジくんと飲んでいて…。

そこまで思い出して、私は顔が熱くなるのを感じました。

どうしてあんなことを…

悶々と悔やんでいると、机の上に書置きがあるのを見つけました。

「書置き?」

私はそれを手に取つて読みます。

『俺は先に仕事に行つてるから、起きたら店に降りてきてくれ。

何か飯作るから…』

その後に書いてあることを読んで、私は驚愕しました。

『寝顔、とても可愛かつたぜ』

年下の胸を借りて泣いて、泣き疲れて眠っちゃつたなんて…

凄く恥ずかしいですね…。

私は顔の熱が引くのを待つてから部屋を出てお店に降りていきました。

お店に降りると、中では騒ぎのようなものが起こっていました。

騒ぎの中心を見てみると、そこにはあの男が居たのです。

どうしてあの男がこの船に……？

その男はサンジさんが作つたであろうご飯を素手で食べていました。ですが、ご飯を食べ終えて態度が一変したのです。

食べ終えた右手が振りかぶられるのを見た私は、即座に能力を発動させました。

「させません！ アクア・ボール！ ウオータースネーク！」

すると水の蛇がその男に絡みつき動きを拘束しました。

「やはりそう来ましたか。海賊艦隊提督、首領・クリーク」  
クリークが私の方を睨みつけます。

「くっ！ こんな物！ すぐに破壊して……！ なっ！ 外れん！！」

クリークは水蛇の拘束を取ろうともがきますが、それは無駄なあがきです。  
「無駄です。貴方程度の力ではその拘束は解けませんよ」  
さて、どうしましようか……。

「首領・クリーク。あなたは東の海最強の海賊と言われていますが、私は全くそうは思いません」

「なんだとおつ!!」

「さらに言えばあなたが提督などと呼ばれること自体がおこがましいです。

貴方は海賊を寄せ集めただけで戦いの方は奇襲やだまし討ちと、やることは卑怯そのもの。そんな男を誰が提督だと認めますか?」

「このつ! 小娘風情があ!! オレを舐めてんじやねえ!」

「自分の無能さを認めないこの性格の悪さ。あなたはここで始末しておいた方がいいかもしれませんね…。アクア・ボール」

私はそう言つて海水の水球を作り出します。

「ま、待て! 何するつもりだ!」

私の行動を見て慌て始める首領・クリーク。

「なにってあなたに言う必要がありますか？これから死ぬのに…」  
それを聞いて、首領・クリークの顔は青ざめていく。

「や、止めてくれ！俺が悪かつた！もう何もしない！だから！」

それ…」

そう言つて私は先程作つた水球をクリークの顔に被せました。

「ガバババガボボボボツッ！」

拘束されて身動きの取れないクリークは必死にもがきます。  
でも全身を拘束されていては抵抗など出来るはずもなく。

「ガバババガボボボボツッ…！」

「も、もう止めてくれ！ドンが死んじまう！」

部下の男がそう言いますが私は止めません。

「いやですよ、この男はここで息の根を止めておかなければ、きっとこの船を奪うとか言い出すでしようから」

「で、でも！」

「止める！姉ちゃん」

いきなりルフィくんが口を挟んできました。

「ルフィくんは少し黙つていてください…あなたも同じ目にあいたいの？」

私は、ハイライトが消えているだろう目をルフィくんに向けます。

「ひっ！…でも、いやだ！今すぐやめろ！」

「あなたの話は聞いていませんから黙つていなさい…。」

私はルフィくんに冷徹な口調で言いきります。

「いやだ！オレは姉ちゃんが止めるまで止めねえ！」

「そんなことを言つても私は止めませんよ？あら？」  
見ると、クリークはもう殆ど死にかけの状態でした。

これはもう氣絶していますね。

「死にましたね。これでようやく東の海も恐怖におびえなくとも済みますね」

「首領・クリークウウウウ！」

泣き叫ぶ、クリークの部下。

「ハルナアアアアア！なんで殺した！殺す必要はなかつただろ！」

「何を言つてるの？殺す方がいいに決まつてゐるわ。どうせ海軍に捕まれば処刑される運命なのだから。今殺すか捕まつて死ぬかのどちらかなのよ？」

「！… お前は！・海賊をなんだと思つてるんだああ！」

「度の過ぎた悪党… かしらね」

「！… そうかよ、お前はもう姉ちゃんなんかじやねえ！さつさとどつかに行つちまえ！」

その言葉にサンジくんが反応しました。

「なんだ 「言われなくともそのつもりよ」え？」

私はサンジくんの言葉を遮り立ち上がります。

「それじゃあね、皆さん。さよなら…」

そう言うと私は外に出ました。すると…

「榛名さん…」

夕立ちちゃんが心配そうに私の方を見ていました。

私は夕立ちゃんに近づくと耳元でこそっと呟きました。

『夕立ちゃん、後の事は宜しくね。もし私に何かあつたら、その時はナミをお願い』  
それだけ言つて私は艦装を着けると海上を走り出しました。

しばらく走ると、先に出航していたメリーアー号が見えてきました。  
私はメリーアーに追いつき船に乗り込みます。

「どう? 上手くいった?」

「ええ、なんとかうまくやつたつもりよ。」

「そつか?」

「さあ、戻りましょう。ココヤシ村に」

「うん。」

223 さようなら、みんな…ナミとハルナまさかの離脱!

こうして私達はココヤシ村へ向けて船を進めるのだった。

# 一味との思い出：語られるナミの想い

s i d e 榛名

ルフィ君たちと別れてから私達は二人きりで海の上を走っています。

「……」

「……」

特に会話がされるわけでもなく、聞こえてくるのは波の音のみ……。

気まずい……という訳ではありませんが、ナミは大丈夫か心配になります……。

「そう言えばさ……」

不意にナミが話しかけてきました。

「初めてルフィに会った時もこんな天気だつたわよね」

「え？ そうだつたかしら...」

ナミに言われて私は空を見上げます。

「確かに、言われてみればそうね...」

「あの時、お姉ちゃんとはぐれちやつて一人でバギー一味のアジトに乗り込んで海図を盗んだら見つかっちゃつて追いかけまわされていた時にルフィが空から降つて来てね」

「空から？ またどうして...」

「さあ？ 大方、鳥でも獲ろうとして逆に捕獲されちゃつたんでしょ」

「ああ、あり得そうね...」

ルフィ君て、頭悪いから...」

「それでその後ルフィを囮に使って逃げたのよね、確かに...」

道理で私が駆け付けた時に顔を出すのが早かつたわけですね。

「あの時は本当に驚いたわ。ルフィイがお姉ちゃんを『オレのだ』なんて言い出すんだから…」

「それで私の取り合いになつたんですから…」

取り合われる方の身にもなつてほしいです…。

「あれはルフィイが悪いのよ！まあいいわ、あの後のバギーとの戦いの時は…」  
ナミがチラリと私を見てきて私は苦笑します。

「あはは…あの時の事ね、反省してるわ…やり過ぎでした…」

「まあ、私は楽にお宝が盗めたからいいんだけどね？」

それならいいじやないですか。

「ルフィイもそうだけど、ゾロもゾロよね。まさかあの海賊狩りが海賊になつちやつてる

「んだから驚きよ。」

「そういえば、とナミは此方を見て聞いてきます。

「お姉ちゃんってゾロとあまり話してないわよね?」

「ええ、そうね?」

「なんで? 仲悪くはなかつたはずよね?」

コクリと頷いて私は答えると、

「ゾロさんはいつも寝てしまつて いるからなかなか話す機会が無くなつて...」

あー... とナミが納得したように頷きます。

「確かにアイツ船の上では寝てることの方が多いわね」

「そうなの、だからあまり話せてないの。仲が悪いとか嫌いという訳じやないのよ」

「そつか…。それじやあウソップは?」

「ウソップくん?」

「そ、よくルフィと三人で話しててる時にフラツとしてるじゃない?お姉ちゃん  
ああ、確かにありますね…。」

「別に嫌いじゃないんですけど、頭の悪さに頭痛を覚えるわね…。」

あの二人との会話は私の身がもちません…。」

「アイツも面白い奴だつたけどあのビビリつぶりがあまりいただけないわね。  
射撃の腕は確かにのに…。」

「そうね…」

「良い奴らだつたな・・・。今度会つたら、また、仲間に入れてくれるかな?」

「ナミ・・・」

そう話すナミの顔は涙であふれていました。

「また会えるかな・・・」

私はそつとナミに近づき抱きしめます。

「・・・早く自由になりたいよ・・・！お姉ちゃん」

私の腕の中で、涙で顔を濡らすナミは悲痛な声を上げます。

私は優しく、ただ優しくナミを抱きしめ撫でながら言います。

「大丈夫、あなたは絶対に大丈夫。きっと自由になれるわ・・・」

どんなことをしてでも、あなたとココヤシ村・：両方を自由にしてあげる。

私自身がどうなろうとも・・・必ず・・・。

「さあ、行きましょう。ココヤシ村へ」

「… うん」

私達は再び舵を取り、ココヤシ村へ向けて出発するのでした。

s i d e o u t

s i d e 夕立

ヤツホー、夕立だよ。

今私の前には変な格好の盾男がいるの。

「はははははつー・鉄壁、よつて無敵。クリーク海賊団、鉄壁の盾男！」

パールさんとは俺の事よ」

なんでこうなつてるのかはまたまた超がつくほど簡単に説明するつぱい。

・ 榛名さんが出ていつてすぐにクリークは息を吹き返したの。

・クリークは榛名さんに大激怒！だけど榛名さんがいないことに気が付くと、この船を奪い取るつて言いだしたっぽい。

・ご機嫌斜めなクリークは百人分の食料を渡せと命令してくる。オーナーさんが食料を渡しちやつたの。

・受け取った食料を手下に食べさせたクリークが手下たちと共に船に襲い掛からうとした時、クリークの乗っていたガレオン船が真っ二つに斬られて沈没したっぽい。

・船を斬つたのはゾロの探している人物、鷹の眼の男だつた。ゾロは鷹の眼に勝負を挑むが軽くあしらわれ大けがを負つてしまふ。

・ゾロに激励をとばすと、鷹の眼は満足したといつて帰つていつた。

・ゾロ、ウソップ、ジョニー&ヨサクはナミとハルナを連れ戻すべくメリーア号を追いかけるのだつた。

・遂に始まつたコツクVS海賊たちの大乱闘の中、突如現れた盾男がコツクの二人を倒してしまつたっぽい。

それで、最初に戻るっぽい。

「変なカツコ… カツコ悪いっぽーい」

私はバールと呼ばれた盾男に言う。

「キミには分からぬと思つよ。なんたつて、すぐに僕に倒されるんだからさ  
・・・ちょっとイラツと来たっぽい。

「そななんだ、じやあ試してあげる。」

そう言うと、私の周りを風が取り巻きはじめる。

これが私の初の能力戦つて訳ね！

「さあ！クリーク海賊団に悪夢、見せてあげる！」

「何をするつもりか知らないけど終わりだよ。お！」

盾男が何かを投げてくる。が、それは取り巻く風によつて私にまで届かない。

「そななちやちな物じや今私には通じないわ！喰らえ！『風魔螺旋弾』！」

すると、私の周りの風が渦を巻いて小さく圧縮されていき、やがて幾つかの手のひらサイズの小さな玉になつた。

その複数の球は乱回転しながら私の手元で渦を作つてゐる。

スッと手を振った直後の事だつた。

剛速球で盾男に向かつて飛んで行つた風球はいとも簡単に盾男の盾にひびを入れた。

「ゞつふう…！？」

予想だにしていなかつた衝撃に盾男は体をくの字に曲げて吹つ飛んだ。

「はあ…はあ…ヤバいぞ…こいつは危険だぜ…」

カーン！カーン！カーン！カーン！

両手に持つ盾を叩き合わせ始める盾男。

いつたい何を始めるつもりっぽい？

「身のキケーン！身のキケーン！身のキケーン！」

すると、盾男の身体が燃え始めた。

「?!何あれ…」

全身を炎で包んだ盾男は何かを叫び出した。

「ファイヤーパール！大特典！」

瞬間、炎が辺りに飛び散り始めた。

「うあちちちちちちっ！！」

ルフイに火が燃え移つて走り回つてるっぽい。

「燃えろ！この炎と炎の盾で、俺はもう鉄壁だ——！！」

うーん、このままじやお店が燃えちゃうっぽい。

「熱いしうつとうしいから終わりにしてあげる！『風乱 竜巻鎌』！！」

すると辺りの空気が渦を作りだし、炎を消し去りながら巨大な竜巻に姿を変える。

「みんなまとめて切り刻んじゃつて！いつけーつぼーい！！」

巨大な竜巻はまっすぐパールたちの方へと向かっていく。

「や、やめろ！来るんじやねえ！」

炎に包まれた弾丸を竜巻に打ち込むが、竜巻は勢いを衰えることなく進んでいき、

パールを呑み込む。

竜巻に呑まれたパールは風の勢いに押されて炎を消され、自慢の盾は紙を切るかの如く無残に切り裂かれていく。  
パールを呑み込んだ竜巻は、その後も続々とクリークの手下たちを呑み込み切り裂いていった。

「ふう、このくらいでいいかな?」

私がスッと竜巻に手を向けると、竜巻は何事もなかつたかのように消え去つた。

「さあ、あなたの手下はもうほとんど居ないけどどうする?」

私は挑発的な笑みを浮かべて首領・クリークを見るのだった。

# サンジV.Sギン！ハルナ、ココヤシ村到着！

s i d e 夕立

「さあ、どうするつぽい？このまま終わりにしてあげましょか？」

巨大な能力の竜巻の鎌鼬によつて、殆ど壊滅のクリーク海賊団。

残るは、先日レストランにやつて来たギンという名の手下とクリーク、そして少しだけ残つたしたつぱのみつぽい…。

「グッ…！おのれえ！小娘」ときがあ…！調子にのりやがつてえ…！」

全身を怒りでプルプルと震わせるクリーク。

「いいだろう、お前から先に殺してやる！この俺に逆らつた事をあの世で後悔するがいい！小娘え!!」

クリークが戦闘体勢になつたとき、不意に声がかかつたの。

「待つてください！首領・クリーク！ここは俺にやらせてください！」

そう言つて名乗り出たのは先日レストランにやつて来たギンというクリークの手下だつたの……。

「俺も仲間達が倒されて心中穏やかじやねえんだ！だから！俺にやらせてくれ！」  
ギンの言葉にクリークはニヤリと頬を歪ませる。

「いいだろう、やれ、ギン」

「ああ…」

そう言つて私と向かい合うギン。

「まあ、そう言うことだ…。悪いがアンタにはここで死んでもらう…」

そう言つてトンファー?を構えるギン。すると、急に声がかかつたっぽい…。

「ちょっと待てよ…」

声の聞こえた方を見ると、副料理長さんがタバコの煙を吐きながらこつちを鋭く睨んでいたの。

「レーデイにばかり戦わせるのは男の名が廃る…。お前の相手はこのオレだ…。」

そう言うと、副料理長さんは私を後ろに隠すように前に出る。

「フツ…サンジさん、俺は例え恩人のアンタが相手でも容赦はしねえ…それに、アンタじゃ俺には勝てねえよ…」

「そういう事は…俺に勝つてから言うんだな！」

そう言葉を交わすと二人はぶつかりあう…。

初めは互角にぶつかり合っていた二人だつたけど、経験の差か…次第に副料理長さんが押されはじめたっぽい。

最終的に首元にトンファー？を突きつけられた副料理長さんが押さえ込まれてしまつたっぽい…。

でも、ギンはそこから動かなかつた…。

「…駄目だ！俺にはやつぱりこの人を殺すことは出来ねえ…！」

涙で顔を濡らすギンの言葉にクリークは青筋をたてる。

「…なんだと？」

「なあ、首領・クリーク。この船を見逃す事はできねえだろうか！俺はもうこれ以上、この人に武器を向けたくねえんだ！」

その一言でクリークの顔は憤怒に染まつた。

「貴様！命令に刃向かつただけでは飽き足らず！俺に指図する気か!!もういい！そこを動くなよ、ギン」

そう言つてクリークは自らの肩当てを外すと両手でそれを持ち、前へと突きだした。

『なあつ!?不味いぞ！あの構えは！』

『ヤバイ！早く逃げろ!!毒ガスに巻き込まれるぞ！』

生き残ったクリークの手下達が慌て出す。

毒ガス!? アイツ…何を考えてるのよ!!

「喰らえ！ MH5!!」

クリークの叫びと共に肩当てから一発の銃弾が放たれる。

その光景を見た私は榛名さんが沈んだ時の事がフラッショバツクしたの…。このままじや、ギンヤルフィ、副料理長さんが死んじやう！

そんなことさせない！もう、あの時のような事は繰り返させないっぽい！

「毒ガスなんか、こうしてあげる！『風膜 極包』!!」

私が叫ぶと放たれた毒ガス銃弾の前に風の膜が展開され、銃弾を包み込んだ。

【ドッゴオオオン!!!】

包まれた銃弾が毒ガスを撒き散らしながら膜の中で爆発する。

撒き散らされた毒ガスは外に漏れることなく風の膜の中に充满したっぽい。

「ナニイツ!?

驚きの表情を浮かべているクリーク。

「部下を見殺しにしたあなたにはそれ相応のやり方で終わりにしてあげる！さあ！素敵なパーティしましょう！『操風 身体操作』

すると、クリークの体が浮き上がり。毒ガスの塊の方へと飛んでいく。

「なっ！や、やめろ！止めてくれ!!」

榛名さんに殺されかけたとき以上に顔を真っ青にするクリーク。でも、もう遅いっぽい

「今までやつて来た自分の罪を数えながら死んじやえっぽい！」

「止めてくれ————！！」

慈悲の欠片もなく、クリークは毒ガスの塊の中へと突っ込まれていった。

「ツツ…!?」

塊の中で首を押さえながらもがくクリークだが、次第にその力は抜けていき、腕は宙にダラン…と下がるのだつた。

こうして、クリーク海賊団、首領・クリークはこの世を去り、バラティエ工での激闘は幕を閉じたっぽい。

s i d e o u t

s i d e 棚名

「着いたわね…。」

ルフィくん達と別れてから数日。

私達は漸くココヤシ村へと到着しました。

「さあ、先ずは挨拶してこなくちゃね…。ナミは先に行つて帰つてきた事を報告しておいてくれる?」

「分かったわ、お姉ちゃんも早く来てね」

その言葉に私が頷いたのを確認すると、ナミは丘の方に駆けて行きました。

私はナミの駆けて行つた道をゆっくりと進んでいき、ミカン畑に向かいました。

「さて、妖精さん達、またお願ひできますか？」

すると、妖精さん達が現れて…。

『(、・ω・)ノグツ！』

私の持つていた宝をそれぞれ持ち上げると消えていきました。

え？ 今のは何かって？ 妖精さんに宝を隠してもらつたんですよ？ 普通にしまつておくと他の泥棒に取られてしまふかもしれませんからね。

なので、妖精さん達に頼んで管理してもらつてるんです。

じやあミカン畑に来たのはなぜか…。

それはフェイクですよ♪

最初の頃はマンマと騙されたナミが大泣きしてしまつて、あやすのに苦労したのが懐かしいです…。

さて、それじやあ私もある人に挨拶してこないとですね。

私はミカン畑の近くにある一軒の家に向かいます。

コンツコンツ！

『はーい！』

ガチャリとドアが開き、一人の少女が顔を出します。

「やつと帰ってきたんだね、ハルナお姉ちゃん…。」

「ええ、ただいま。ノジコちゃん」

「うん、おかえりなさい…」

ノジコちゃんに続いて中に入るとそこにはナミの他にもう一人女性がいました。

「ようやく帰ってきたの？よく帰つてきたね…。お帰り、ハルナ…」

そう言つてくれる女性に私は笑顔で答えます。

「はい！ハルナ、ただいま帰還しました。ベルメールさん」

# 新たな仲間！サンジ加入！榛名、ゴサの町を調査せよ！

side立

ヤツホー、タ立だよ。

とりあえずまたまた簡単な説明つぽい。

あの後、クリークの亡骸は政府に引き渡して、ギンと残った手下達は小舟でどこかに旅立つていったつぽい。

私達は逃げたナミを連れ戻すために出発しようとした時に副料理長さんが仲間に

なつてくれるつて言い出したの…。

そこから今回の話が始まるつぽい。

sideout

sideサンジ

「つたく、漸く出ていく気になつたか…チビナス…。  
…アイツを探しに行くのか？」

クソジジイの言葉に俺は頷く。

「ああ、姉さんが出ていったのとナミさんが逃げ出したタイミングを考えると二人は恐らく一緒にいるはずだ…。」

その時、ルフィが思い出したように口を開く。

「そういや、アイツら海賊専門の泥棒だとか前に言つてたな」

なるほど、それなら一人が一緒にいるのは確実だな。

「その二人なんですかね…あの二人が向かつたと思われるのがとんでもない場所だつたんすよ」

ヨサクがそう口にする。

「どんでもない場所つて？何処なのっぽい？」

夕立ちゃんの問いにそこで口籠るヨサク。

「とにかく、ルフィの兄貴の力が必要なんです！あつしと来てください！」

ルフィはすぐにそれに頷き、歩き出す。

俺とタ立ちゃんも後について歩いていく。すると…。

「サンジ…。風邪、引くなよ?」

クソジジイの言葉で涙が堰を切ったように溢れだした。

俺は振り向き様に土下座にも似たお辞儀をして叫ぶ。

「オーナー・ゼフ!今まで!クソお世話になりました!」

「おーい!サンジ!出発するぞー!」

「ああ…。娘によろしく伝えておけ…。」

それだけ言うとクソジジイは店に引っ込んでしまった。

「早くつぽーい!!」

船から二人の声が聞こえてくる。

「ああ、今行く…。」

俺はそう返すと船に乗り込んだ。

「よし、出航だーーー!!」

こうして俺は海へと飛び出したのだつた。

s i d e o u t

s i d e 棚名

「それで? 今回はどうして帰つてきたの?」

久しぶりの再会を楽しんだ後、不意にベルメールさんが聞いてきました。

「実は、潜入してた船でアーロンがまた暴れだしたと聞いたのですから…。」  
 それを聞いたベルメールさんとノジコちゃんは『ああ…その話か…。』と納得したよう  
 に頷きます。

「確かにアイツは少し前に暴れたよ…。させたんだ。」

ココヤシ村

「…でという訳じゃないけど、近くの村を壊滅

「ゴサの村が!?

ゴサの村と言えばココヤシ村の近くの海辺の村だった筈です…。  
でもどうして…。

「一人の村人がアーロンに逆らつたからさ、その見せしめに村ごと壊滅させられたんだ…。村人も全て殺されたんだって…」

「そんな…」

私は肩を落とす…。

どうしてこんなことに…。

とにかくゴサの村を調べてみないといけませんね…。

それからしばらく話をしてから私達は家を後にしました。

「さて、そろそろあつちにも顔を出してこないといけませんね…」

「そうね…。正直顔もみたくないけど…。」

心底嫌そうな顔をするナミ。

「まあまあ、ナミは先に向かってもらえる? アーロンにはすぐに向かうと伝えておいてほしいの」

「別にいいけど…。何かあつたの?」

何かに気がついたナミがそう聞いてきます。

「ええ、少し調べたいことがあつてね…」

「…分かつた。それじゃ先にいっておくわ…。早く来てよね」

そう言うとナミは歩いて去ってしまいました。

「さて、私も行きましょうか…。」

私はゴサの村があつた場所へと足を運びました。

## 251 新たな仲間!サンジ加入!榛名、ゴサの町を調査せよ!

「これは酷い…」

ゴサの村跡地についた私は言葉を失いました。

そこはもうつい最近まで人が住んでいたとは言い難い程の荒れ方をしていたのです  
…。

「これはモームを連れてきたのね…」

私は村跡地を見て回ります。すると、電探に反応がありました。

「…電探に反応? これはいつたい…」

『キヤーッ…』

電探の反応を不審に思つてゐると、悲鳴が聞こえてきました。

「悲鳴！まだ生存者がいるの!?」

私は急いで声の聞こえた方に向かいました。

声の聞こえた場所に着くとそこにいたのはなんとノジコちゃんだつたんです。

「ノジコちゃん！？どうしてこんなところに！」

「！？なんだ、ハルナお姉ちゃんか…驚かさないでよ。」

胸を撫で下ろしてゐるノジコちゃん。

ふと視線を下に落とした私は驚愕しました。

「ウソツプくん!?:なんでこの人がここに?」

「事情は後で話すよ。とりあえず今は手伝つて。家まで運ぶわ」

「え、ええ…。分かつたわ」

頷いて私はウソツプくんの身体を持ち上げると家へと運んでいくのでした。

# 明かされるハルナの過去…ベルメールが語る悲痛な人生

s i d e 棚名

ウソップくんを家に運んだ私は、ノジコちゃんにこれまでの経緯を聞いていました。  
「と、言う訳なの…」

「そういうことだつたのね、じゃあ彼はナミを追つてきたのかかもしれないわね…。」  
ルフィくんらしいですね…。

私は苦笑しながら気絶しているウソップくんを見ます。

「姉さんもじやないの？なんでナミだけ…。」

「それはないわ、その人達とは別れを告げてきたもの…一番残酷な方法でね…。」  
そう、もう会うことはないんです…。もし会えたとしてもそれはナミを渡す時だけ  
…。きっとそれが最後になる…。

「さて、じゃあ私もそろそろ行くことにしますね…。

それと、私のことは言わないでおいて…」

そう言つてナミの家を後にしようとした直前でした。

「ハルナ！」

今まで黙つて聞いていたベルメールさんが声をかけてきたのです。  
私は扉を前にベルメールさんの方へと振り向きます。

「一人で背負い込もうとするんじやないよ、アンタはもう私の娘同然なんだからね…。」  
ありがとうございます…。ベルメールさん、でも…。

これだけは譲れないんです。

私は微笑んでこう答えます。前世でもよく使つていたあの言葉を…。

「はい、榛名は大丈夫です！」

それだけ伝えると私はナミの家を後にしました。

向かうはアーロンパーク…。

ナミ、ノジコちゃん、ベルメールさん、それにココヤシ村の人達…。必ず私がアーロ

ンの呪縛から解き放つてあげます。

……例え、自身が沈むことになろうとも…。

s i d e o u t

s i d e ウソツプ

気がつくとオレは知らない家のなかにいた。

「…」は…。」

すると…不意に声が聞こえてきた。

「おや、目が覚めたみたいだね」

声のした方を振り替えると二人の女性がいた。

「アンタ達は…」

オレの問いに青髪の女性が答える。

「私はノジコ、こつちは私の親のベルメールさんだよ。」

「よろしくね、長鼻くん」

あつちの桃髪の女性はベルメールっていうのか…。

「ああ！ そういうや、お前オレをど突きやがったな！ 折角助けてやろうと思つたのに…」  
それを聞いていたベルメールがため息をついて話し掛けてくる。

「アンタは馬鹿なの？ 魚人に手を出したら最後…アンタは死ぬんだよ？ ノジコがド突いてなきやアンタは今頃死体だね…。」

「なんだと!?」

再度ため息をつくベルメールにいきり立つオレ…。  
それをノジコが止めにはいる。

「まあまあ、喧嘩は止しなよ、それで？ アンタは何しにここに来たの？」

言われてからオレは本来の目的を思い出す。

「ああ！ そういうや！ そだつた！ オレはナミとハルナつて女を探してるんだが…」

「へえ、ナミをね…つてことはアンタはさしづめ、ナミに騙された海賊つてところ？」  
「そんなどこまでわかんのかよ！ コイツなんなんだ？」

「なんでそこまでしつてんのか分かんねえけどそうだ。だからオレはナミとハルナを連れ戻そうと思つて追つてきたんだ。」

「そう、でも残念だつたね…。あの子はアーロン一味の幹部よ…」  
「…は？」

「なにいい!? ナミがアーロン一味の幹部!?!」

「そ、更にビックリ、ここはそのナミが育つた家…。」

「いいっ!?」

おいおい…なんて偶然だよ。おい…。

「私とナミは義兄弟なのよ…」

つてことは何か?ノジコとナミを育てたのつて…。

オレはベルメールを見る。

「どうかした?」

オレの視線に気がついたのかベルメールが声をかけてくる。

「い、いや…なんでもねえ…」

でも、ちよつと待てよ?コイツの言う通りナミがアーロン一味の幹部だつてんなら…

「じゃあ、ナミはお前達家族や村の人達を裏切つてアーロン一味に入つたつてことか?」

「そういうこと…。まさに魔女だろ?」

「クッソー！ そうだつたのか！ オレ達はずつと騙されてたつてのか！ あの二人初めから宝目当てで！」

オレの村の戦闘でも参加してくれたし…船の上でもあんな楽しそうにしてやがったのに…！ やっぱあれがあいつらの本性だつたのか！」

すると二人が何か引っ掛けたのかオレの方を見て問い合わせてくる。

「長鼻くん、『あれ』ってなんのことだい？」

ベルメールが真剣そうな表情で問うてくる。

「あ、えつとな…」

オレはハルナがバラティ工でやつたことを話した。

「まあ、結局死んでなかつたんだけどよ…あの顔は間違いなく人を平氣で殺せるやつの顔だつたな…。」

「勝手なこと言うんじやないよ!!!」

オレの話を聞き終わつた後、二人が突如怒鳴りだした。

オレは驚いて座っていた椅子から転げ落ちてしまった。

「な、なんだよ…急に…」

「あの子はね…！そんな事を平気で出来るような子じやないよ！あの優しさの塊の様な子が…！周りのためなら自己犠牲すら厭わないようなあの子が！アンタなんかに何が分かるんだい!!」

「ベルメールさん…。落ち着いて…それにその事は…。」

「なんだ？ハルナのことも知つてんのか？」

「いや、ハルナには悪いけどこれ以上は私が我慢の限界だよ…!!」

「お、おいおいオレ何か怒らせるようなこと言つたか？」

「少し、昔話をしてあげる…。しつかり聞いときな」

「そう言うとベルメールは語り始めた。

S i d e 三人称

~~~~~回想~~~~~

ナミとハルナが連れていかれてから少し経ち…。  
ゲンがやつて來た。

「ベルメール！大丈夫か!? 怪我は？」

慌てふためくゲンにベルメールはなんとか笑いかける…。

「大丈夫よゲンさん…。私は無事、ハルナのお陰でね。」  
その返事に安堵したのかゲンは胸を撫で下ろす。

「とりあえずは良かつた…。」  
だがそのハルナはどこだ?ナミの姿も見えないようだが

•

するとベルメールの顔が一気に暗くなつた。

「…一人ならアーロンに拐われちゃつた…。私、助けようとしたけど…逆にハルナに助けられちゃつた…。」

「な、なんだと…!?」

しばらくの沈黙が包み込む。

その沈黙を先に破つたのはベルメールだつた。

「ゲンさん、私、二人を助けにいくよ…」

ベルメールのその言葉に驚きで目を見開くゲン。

「何を言い出すんだ！ベルメール！お前一人で行つても殺されて終わりなんだぞ！」

「それでも、私はナミの母親でハルナの止まり木…。  
子供一人助けられないで何が母親よ！」

そう叫ぶとベルメールは走り出し駆けていった。

ゲンが慌てて止めるもベルメールはなにも言わず駆けていつてしまう。

「待て！ベルメール！つたく！正義感だけは強い奴だ…  
とりあえず一度村に戻るしかないか…。闘いの準備だ！」  
そう言うとゲンは村の方に走つていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ベルメールはアーロンのもとへ向かい走つていた。

（ナミ！ハルナ！必ず助けてやるからね！）

ただその思いだけを胸にアーロンのもとへ走る。  
すると、前方から歩いてくる人影の姿があつた。

（人影？いつたい誰が…）

段々と近づいて来るその人影はハルナだつた。

「ハルナ！」

ハルナもベルメールに気がついたのか前を見据える。  
ベルメールはホッと安堵して、ハルナに駆け寄る。

「良かつた…。無事だつたんだね？怪我はないかい？」

だが、ハルナから帰つてきた答えは信じがたいものだつた…。

「…ベルメールさん、今すぐ帰つてください…」

その言葉を聞いたベルメールは驚愕した。

「何を言つてるの！アンタ達を助けにきたのに…」

「私、アーロン一味に入つたんです…。その証拠にほら…」

右肩の袖を捲り腕を出すハルナ。

そこから出てきたのはアーロン一味の海賊旗のマークだつた。

「!?:な、なんで…」

「これで分かつたでしよう？早く帰つてください…。

じやないと…貴女を殺さないとならなくなります。」

そう言うとハルナの目から光が消えていく。

まるで感情を宿していないかのように…。  
深く、冷たい表情を…。

「冗談じゃないわ！私はそんな脅しには屈しない！  
アンタもナミも私が抜けさせてあげるわ！」

「そう…なら、こうするまでです…。アクア・ボール」

すると、ハルナの周りに水が集まりだし一つの球体へと変化する…。その球体はベルメール目掛けて飛んできてベルメールの顔をスッポリと包み込んだ。

「!?…ゴボボツ!!」

いきなりの事に慌てて水を飲んでしまうベルメール。

呼吸が出来ない中で必死に息をしようともがくが球体はベルメールの顔から離れな  
い。

「ゴボボツ！ガバツ…………」

やがて意識が切れたのかベルメールの体から力が抜けた。

「……解除」

そう言うとベルメールにまとわりついていた水球が離れ、ハルナの手元へと戻つていく。

「助けたのにみすみす死なせるなんて出来ませんからね：」

その目には感情の色が戻つており悲しげな顔をしていた。

そう言うとハルナはベルメールが飲んだ水を操作して口から吐き出させた。

「これで大丈夫です…。さて、アクア・バリエーション」

ハルナが再度能力を発動させると先程までの水球は大型の艦載機に変化した。

「よい…しょつと…ふう…。それじゃあ妖精？さん、その方を村までよろしくお願ひしますね」

「(、・。・)ノグツ！」

妖精？はハルナにサムズアップするとベルメールを乗せ、空へと飛び上がつていきま

した。

「ベルメールさんにノジコちゃん…。それにココヤシ村の方達…。私が必ず自由にして  
あげますから…それまで、待つていてくださいね…。」

そう言うとハルナは夜の闇へと姿を消した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

一方ナミは…。

ベルメールとハルナがぶつかり合っていたころ…。

ナミはココヤシ村にてアーロン一味に入つたことを報告していた。

ノジコやゲン…。村の人達に見放され、一人海を眺めて泣いていた。  
それに近づいて来る者がいた、ノジコだ…。

「ナミ、ナミはそれで良かつたの?」

「…うん、これが一番なの…」

でも…とナミは続ける。

「寂しくなんかない！ハルナお姉ちゃんも一緒だから！」

更にそれにね？とナミは続ける。

「アーロンと契約したの…。アイツからココヤシ村を買うつて…」

「村を買う？」

「そう、1億ベリーでね…。村を買えば自由になれる。誰も死なせないで済む…。そのかわり、一味に入つて海図を書けつて…。」

「でも、1億ベリーなんて一生働いて払えるかどうか…」

「稼いでみせるわ！どんなことをしても！皆は貢ぎ金を払うので精一杯だし、私がやるしかない…。でも大丈夫！ハルナお姉ちゃんも協力してくれるって言つてくれたから

!

お姉ちゃんなら前から海賊からお宝を盗んでいたからすぐ稼げるって言つてたの。」

「海賊から奪うの？」

「うん、海賊からなら奪つてもなにも問題ないから心配いらんいつて…。だから…！」

「待つて！私とお姉ちゃんと絶対に皆を自由にして見せるから！」

そう言うナミの目は硬い決意の炎を宿していた。

「…うん、待つてる…。でも、無理だけはしないでね…。」

「分かつてる…。お姉ちゃんと一緒なんだもん絶対に大丈夫！」

そう言うナミは笑顔を浮かべる。すると…。

「ナミ、ここにいたのね…。」

やつて来たのはハルナだつた。

「あ、ハルナお姉ちゃん！」

「もうそろそろ戻らないとアーロンが怒りだすわ…。行きますよ」

「うん！ それじゃあね…。バイバイ」

「あ、うん…またね」

「ノジコちゃん、おやすみなさい…」

そう言うとナミとハルナは夜の闇へと溶けるように消えていった。

~~~~~回想終了~~~~~

Sideout

sideウソツプ

「そのあとハルナは自身がボロボロになつてもナミを守つて戦い続けたの…。もう私達の方が見ていられないくらいにね…。それをアンタはまだそんな事を言う気かい？」

オレは開いた口が塞がらなかつた…。

まさかハルナにそんな過去があつたなんて…。

そうしてオレはハルナのことを思い返す。

そういうえばルフィがキヤプテン・クロと闘つてたときも…。

クロを説得しようと出てきたカヤを身を呈して守つていたな…。

船の上でも…困った顔をしながらもニコニコとオレ達の話を聞いてくれていたっけ  
か…。

こんな大事な事をオレは忘れちまつてたのか!!

「いや、すまねえ…。オレが悪かつた…謝るよ…」

「フンッ…謝るならハルナ本人に謝るんだね」

すると、扉が勢いよく開かれ医者のような人物が入つてきた。

「ベルメール！ノジコ！大変だ！村にアーロンがやつて来やがった！」

『なんだつて！とりあえず行くよ！』

「あ、待てよ！オレも行く！」

そういうとオレ達は家を出ていった。

## 二度目の再開！悪を貫け戦艦榛名！

s i d e 榛名

こんにちは、ハルナです。

今私はアーロンパークに向かっています。

目的地はも目と鼻の先…。またあの憎たらしい顔を見なくてはならないんですね…。

目的地に近づくにつれてどんどん憂鬱になります…。もうこのまま沈んでしまえた

らたら楽ですのに…。

そうこうしている間に目的地に到着しました。私は中に入つていきます。

「今戻りました…。」

「おお、ハルナようやく帰ったか、遅かったから心配したぞ？」  
帰投早々の第一声がアーロンだなんて…不幸ですね。

「少しやることがあつたものですから… それで? あの方は?」

私は縛り上げられなぜかずぶ濡れのゾロさんの方を見ます。

「ああ、なんでもお前とナミを連れ戻しに来たらしい…。馬鹿な奴だ。自分たちが騙されているとも知らずにな」

さつきなんか自分から海に飛び込んでやがったんだぜ? と、話すアーロンを無視して私はゾロさんに近づきます。

「ハルナ… まさかお前まで海賊だつたとはな…」

ギロリと凄い形相で睨みつけてくるゾロさんを私は笑い飛ばします。

「私が海賊だつたらどうだというんですか? あなた方はそれを見抜けなかつた… 自分たちの落ち度じやないですか?」

その言葉にゾロさんの表情が更に険しな物になつていきます。

私は顔を逸らしアーロンに問いかれます。

「この人はどうするつもりですか?」

「ああ、ソイツならナミが後で始末するから牢屋にぶち込んでおくつもりだ……なるほど、ナミ。それならこうしたほうが早いですよ？」

「そうですか、じゃあこの人を解放しなさい」

その言葉に一味全員が啞然として静まり返ります。

「おい、副船長。何を言い出すつもりだ？せつかく捕まえたのにミスマス逃すつもりか？」

「そうですがなにか？」

真顔で私が帰すと一味の幹部の一人、クロオビが私につかみかかつてきました。

「ふざけるなよ？人間の分際で魚人の俺達に指図する気か？」

「……そういう台詞は私に一撃で見入れてから言いなさい」

私がそう言つた直後、クロオビの身体がふわりと浮き上りました。

私が捕まれた腕ごとこの人を持ち上げたからです。

私は持ち上げたクロオビが逃げられないよう腕をがつしりと掴むと何度も何度も地面に叩きつけます。

「ガツ！アガツ！グハアツ！」

白目をむいて倒れているクロオビですが、私は無視して叩きつけ続けます。

「もうそのあたりにしてやれ‥：クロオビが死んでしまう」

アーロンの制止が入り、ようやく私は叩きつけるのを止めました。

気絶したクロオビを下つ端に渡し、私は再びアーロンに問いかけます。

「それじゃあ、この人は開放しますがよろしいですね？」

その言葉にアーロンは渋々ながら頷きました。

「分かった‥。解放してやる‥」

その言葉に私は頷いてゾロさんの方に近寄り縄をほどきます。

「どういう風の吹き回しだ？」

ゾロさんが不審そうに聞いてきます。

「そうですね、どういうことかと言われたら… こういう事です！」

氣合と共にゾロさんの腹にパンチを叩き込みます

「なつりガハツ！」

さらに勢いをつけて私はゾロさんを殴り飛ばします。

勢いよく空中に打ち上げられるゾロさん。

そのまま空高く飛んで行き空の彼方へと消えていきました。

「ツ?」

後ろでナミが息をのむ声が聞こえます。

私はチラリと後ろを向くと口パクでナミにだけ伝えました。

『大丈夫よ…』と…。

それを確認したのかナミは不安そうな顔はなくなっていました。

「・・・さて、俺は少しココヤシ村の方に顔でも出してくるか」  
そういうとアーロンは部下を引き連れてアーロンパークを出ていくのでした。

逃げきれウソツプ！魚人と必死の鬼ごっこ！

s i d e ウソツプ

「ヒィィィイイ!!」

『待ちやがれ！この野郎！』

今オレは魚人どもから必死に逃げている。

何故こんなことになつてしているのか、事のあらましはアーロンが村に来たところまで遡る…。

オレはベルメールとノジコと共に村に来ていた。

そこで村長に絡んでいるドデカイ魚人、アーロンを見てたんだ。

アーロンは身勝手な理由をあれこれ村長に付け村長を殺そうとした…。

それにオレはいてもたつてもいられずアーロンに火炎星を放つたんだ。

結果、その攻撃はアーロンの怒りを買つただけで大したダメージになつていなかつた。

そして魚人達から逃げ始めて今に至るってわけだ…。

「はあ…はあ…流石の魚人といえども陸の上じや動きが鈍いな、このオレに競争で勝てる奴がいるかつての！つとと、うわあ…!?」

危ない危ない…。草の根搔き分け必死に逃げてたら崖から落ちそうになつちまつた。

「ふいー…。危なかつたあ…」

すると後方から魚人達の声が聞こえてくる。

「野郎、どこに逃げやがった」

「こつちの方から声が聞こえたぞ！」

ヤバイ！追いかけてきやがった…。どこかに隠れないと…。

「ここか？ん、いねえな」

魚人がすぐ近くまで迫つて来ている…。

どうか、バレませんように……！」

「この崖から落ちたんじやねえか？」

「それだつたらもう助からねえな」

そう言うと魚人達は来た道を戻つて行つてしまつた。

魚人達が完全に見えなくつてからオレはため息をついた。

「はあく……。助かつたあ……。つとと、おわあああああああ……！」

ズデーン!!

崖から転がり落ちちまつた……。

「痛つててて……ん？」

傷みを堪えなんとか立ち上ると向こう岸で手を振つている影が見えた。

オレはそれを声援だと思い手を振り返した。

「おお！声援ありがとう！オレはこの通りピンピンして……」

ザバーン!!

目の前の水が盛り上がり中から魚人が出てきた。

「…ちょいとピンピンしすぎじゃねえか?」

あ、オレ終わつた…。

自慢の長鼻を捕まれ、ズルズルと引き摺られていく。

「つたく、面倒かけやがつて…。この長つ鼻が」

「お、お前の口だつて同じようなもんだろうが…」

抵抗できぬままオレは連行されていくのだつた…。

s i d e o u t

s i d e 棚名

家に戻ろうと歩いていた私達は村の方の轟音を聞き付けて村の方に向かつていまし  
た。

着いてみると、広場には村民達が集まつており何かあつたのだすくに分かりました。  
歩きながらナミが村民達に話しかけます。

「久し振り、みんな…。」

ナミの声を聞くと村民達は私達には目も暮れずそそくさと家の中に入つていつてしました。

残つたのはベルメールさん、ノジコちゃん、村長のゲンさんだけでした。

「ナミ、珍しいじやない…。アンタが村の方を通つてくるなんて」

その問い合わせにナミは答えます。

「大きな音がした…。アーロンね?」

大きく倒壊した家を見ながらナミは言います。

そこに返事をする者は無く、ただ村長の風車帽だけがカラカラと廻つているのでした。

「そうですか、ゲンさんがそんなことを…。」

あの後、村を離れた私達は家に戻つてきました。  
ナミとノジコは近くの海岸に出掛けています。

「そ、それであの長鼻くんがアーロンに攻撃して怒らせちゃつたつてわけ…。」

ま、お陰でゲンさんが助かつたんだけどね…。と、苦笑するベルメールさん。

「それは、その長鼻くんに感謝しないといけませんね…。」

ウソップくん…。どうか、無事でいてください…。

私は心の中でそう祈るのでした…。

s i d e o u t

s i d e 夕立

ぽい!久し振りの出番っぽい!

バラテイ工を出発してから数日、私達は今だ海の上にいるの。

「ねえ、ヨサク♪…。まだその目的地にはつかないっぽい？」  
もう飽きてきちゃつたっぽい♪…。

「まだ数日じゃないですか！タ立の姉貴！ココヤシ村まではまだもう少しかかりますから我慢してください」

「えー…。」

等とブーたれているとサンジさんが声をかけてきた。

「タ立ちやん、飯が出来ましたよ♪これでも食べて期限直してねん♪」

そういえば、出発してからというものサンジさんの私に対する態度が急変したのよね  
…。

ちよつと女っぽいのが気持ち悪いっぽい…。

「わ、わかったからその口調は止めて欲しいっぽい…」

「はーい♪…じやあこれで如何ですか？お嬢さん…。」

「こ、こんどは紳士っぽくなつたけど…。」

「あはは…。もう、それでいいっぽい…」

私が諦めてご飯を食べようとしたときだつた。

探信儀に、大きな反応があつた。

「ルフイ！探信儀に大きな反応！この船の近くに何かいるわ！」

「ん？ もがががもが（ご）か？」

口にものを詰め込みながら話すルフイ…。

「喋るか食べるかどつちかにしろ…アホ…。」

サンジさんが呆れながら注意する。

それを聞いたルフイは口の中の物を飲み込むと喋りだした。

「夕立！ソイツでかいのか？」

「相当な大きさよ、この船の数倍はあるっぽい」

そう話していると海面が盛り上がり巨大な牛のような怪獣が姿を表した。

「うはーっ!!でつけえなあ！」

「喜んでる場合じゃないっぽい！どうするのこれ！」

私は艦装を開けてルフィに問う。

すると、サンジさんが声をかけてきた。

「まあ待て夕立ちゃん。コイツは飯のニオイに誘われてきたんだろう、ほら、喰え、腹へつてんだろう？」

そう言つておかげのひとつを怪獣に差し出すサンジさん

『……モアー』

怪獣が口を開いて食べようとしたときだつた。

「死ね！コラア!!」

サンジさんが思いつき怪獣を蹴り飛ばした。

「アンタなにやつてんすか!?」

あまりの唐突な行動にヨサクがぶちキレる

「アイツ今俺ごと食おうとしやがった…。」

『ウガアーッ!!』

怪獣が激怒して船に襲いかかってきた。

「どうするつもり!?このままじゃ沈められちゃうっぽい!!」

「夕立ちやんは退いてろ、ここは俺がやる…。」

そう言うとサンジさんは船の帆を走り怪獣に向けて跳んだ。

「コリエ! シュート!!」

そして怪獣の喉めがけて鋭い蹴りを放つた。

怪獣はそのまま気絶し伸びてしまつた‥。

「とりあえず、一件落着っぽい？」

あまり腑に落ちない終わり方に私はなんとも言えない気持ちになるのだつた

# ウソップを守れ!ナミの奔走!&ルフィ、ココヤシ村到着!

s i d e ナミ

私は一足早くアーロンパークに戻り、様子を見ていた。  
お姉ちゃんはまだ家にいる。

中ではウソップが捕まつており特徴的な長鼻にナイフを突きつけられている。  
そんな中幹部の一人、クロオビがこんなことを言い出した。

「前から思っていたんだが、ハルナは本当に信用できるのか?」

「どういうことだ?」

クロオビはおもむろに話し出す。

「アーロンさん、こうは考えられねえか?

アンタの首を獲るためにハルナがゾロを侵入させたと…」

何言つてんのかしら？お姉ちゃんなら態々ゾロを差し向けずとも一人でアーロンを殺れるつてのに……。

「言われてみれば確かにハルナの態度は変だつた」

「ああ、捕まえたゾロを解放しろとか言い出したし」

「おまけに水人形まで作つて長鼻も解放しろつて言つてきやがつたしな」  
アンタたちも对外馬鹿ね……。お姉ちゃんは人に死んでほしくないからそうやってい  
るだけなのに……。

クロオビはなおも続ける。

「裏切りはあるの一人の十八番だ、十分に可能性はある。」  
もう聞きづてならないわ！

私は様子見を止め、アーロンパークへと入つていく

「いい加減にして！」

そう大声で言うと魚人たちが一斉に私の方を向いた。

「勝手な推測で話を進めないで」

「……ナミ」

ウソップが何か言つてるけど無視、今はそれよりも重要なことがある。

「口を慎むのね、私達が裏切者ですって？」

歩きながら私は続ける。

「私達がこの一味であることは十年前……」

私左腕についている刺青を叩いて言う。

「この刺青に誓っているはずよ？」

「だが、事実ハルナはゾロを逃がした。それにそこの長鼻も逃がせと言つてきてているんだ、疑う余地は十分にある」

「そういうことは本人に直接言うのね、そんなこと言つた日には海の藻屑でしようけど  
ね」

そういうとクロオビは押し黙る。

そんな度胸もないくせによくそんなことが言えるわよね……。

そこまで言うとアーロンは不敵に笑いながら言つた。

「… フフ、ハハハ、スマンスマン、ナミ、お前が起こるのも当然だ。

だが安心しろ、俺はお前たち二人の事をこれっぽっちも疑っちゃいねえ。  
オレとお前達は十年の付き合いだ…。疑うなんてことはしねえさ」

「… なら、いいけどね」

そう言いつつ私は心の中で安堵していた。

私の安堵を他所にアーロンたちはウソツップをどうするかを話し始める。

「それじゃあこの長鼻はどうする?」

「解放してやれ、下手にハルナに逆らつて怒りを買うのは避けたいからな…。  
だが、無傷でというのは性に合わねえ、死なない程度に痛めつけてあの腹巻にでも帰  
してやれ、ナミ、あの腹巻の居場所は分かるか?」

「アイツならコイツが捕まつてること聞きつければ血相変えてやつてくるわよ」

「そ、うか、ならこちらから探す手間が省けるな…。」

「そういうとまた話し始める。」

私は小さくため息を吐くとチラリとウソップの方を見て目を見開いた。  
ウソップはパチンコを構えてアーロンに狙いを定めていたのだ。

「なんで邪魔をするの!もう直ぐ全てが上手くいくのに!  
もうすぐ!」

私は棍を手にウソップを殴りつける。

「ぐはあ!…あ…てめえ!やろうつてのか!」

折角解放してくれるって言つてゐるのに手を出そうとするやつが何言つてゐるの？

「邪魔なの、あんたが悪いのよ？アーロンに手を出したりするから」

「ナミ、お前にはがつかりしたぜ！ハルナもそりだ！ルフィはな！お前達が船を盗んで逃げた後も、これっぽつちもお前たちを疑わなかつたんだぞ！今だつて完全に信じてる！そんな奴をよくも平気な顔して騙せるもんだな！」

「ううなんだ、まだ信じてるなんてバカみたい……」

「私が信じてるのはお姉ちゃんとお金だけよ、騙される方が馬鹿なのよ……」

「んだとコラアー！」

「私は黒帯の手からナイフを奪い取りながら言う……。

「……何事もなく事は運ぶはずだつた……。

アンタ達は私達二人の十年間のビジネスを無駄にしかねない……。  
だからせめて、私の手で消してあげる」

その言葉にウソップは固まる。

「けす…？ハハハハ！お前がオレを？笑わせんな！」

「私を、甘く見ないことね…。」

「つ！？必殺！煙星！」

不意にウソップが煙幕を放った。

見え透いた手ね…。あんたの考えることは分かるわよ。

私は水門近くまで歩み寄るとそこでウソップを待ち受けた。

やがて足音が聞こえてくるとその人物に向かつて声をかけた。

「アンタが考えそなことね、フンッ！」

私はそう言いながらウソップの腹部に思いつきりナイフを突き刺した。

「つ！ナ…ミ…」

「私達のビジネスの為よ、こうするしかなかつたの……。」

「ナ…ミ…てめえ…」

私はナイフを引き抜く。

「大人しく死んで……。」

「ア…ア…」

バシャーン！

水底に沈んでいくウソップ。

私はそれを無機質に見つめるのだつた。

それを物陰から観察している者がいるとも知らずに……。

s i d e o u t

s i d e 夕立

やつほー夕立だよ。

今私達は襲ってきた怪獣に船を引かせてるの。

「おおー！見えたぞ！アーロンパーク！」

『ンンン…』

怪獣の様子がおかしいのよね…。

「コオラ！暴れるなウシ！」

「この様子だと確実にそれが原因っぽい…」

「おい！違うぞもつと左だ！あの建物だぞ！」  
すると、怪獣が突然進路を変えた。

「おい！違うぞもつと左だ！あの建物だぞ！」

『ンンンンンン...』

声が聞こえていないのか怪獣の進路は全く違う方向へと進んでいく。  
そして迫りくる巨大な岩肌

『いいつ！？』

「ぶつかるつぼい!!」

ドゴオオオオオンツ!!

怪獣は勢いよく岩肌に激突、

引かれていた船はその勢いに乗せられ勢いよく宙を舞う

「おほおー！」

「ひいつ！」

「いいつ！」

「やああああ!!」

私は悲鳴を上げるしかない

「おおー!!まるで空飛んでるみたいだ!」

「みたいじやないっす!!」

「ぶつ飛んでんだよ!このバカ!」

「そんなことよりこれどうするつもりっぽい!?」

徐々に高度が下がり始める船‥。

ズズズズズズズズツ‥‥‥‥!!

地面に着地した後も勢いよく滑り続ける船。

その向かう先には何故かゾロ‥。

「よおつ！ゾロ！」

「ゾロ！危ないから早く退いてえ!!」

しかしゾロが避ける暇なく船はゾロを巻き込み滑り続ける。

そして本日二度目の岩肌が見えてくる。

「ちよつ！どうすんだよこれ！」

このままだとゾロが叩きつけられちゃうっぽい！

私は能力を発動するため技を唱える。

「操風『風玉』」

すると船と岩肌の前に風の大きなクッシュョンが構築される。  
船はそこに見事に激突……。

ブスウウウウウ……！

空気が抜ける音と共に船の勢いは止まつた。

「はあー着いた着いた  
確かについたけど…。

「ゾロ、大丈夫っぽい?」

私は巻き込まれたゾロに声をかける。

「ああ、なんとかな… 助かつたぜ夕立

つてかルフィ! お前なんて登場の仕方しやがる!

危うく殺されかけたじやねえか!」

「なつてナミと姉ちゃんを連れ戻しに来たんだよ。まだ見つかんねえのか?

そうだ、そういうやウソップとジョニーはどうした?」

そこでハツと思い出したようにゾロが顔を上げた。

「ウソップ! こんなところで油売ってる場合じやねえ!」

慌てて走り出そうとするゾロ

「え？どうしたのそんなに慌てて」

「あの野郎、今アーロンに捕まつてやがんだ！早くいかねえと殺されちまう！」

え？そんな切羽詰まつた状況だつたの!?

「殺されました…。」

不意に別の声が聞こえ私達はそちらを見る。そこには息を切らしたジョニーがいた  
の。

この後私達はジョニーの言葉に衝撃を受けた…。

「もう手遅れです…。ウソツプの兄貴は死にました…。殺されたんです…！  
ナミの…！姉貴に!!」

# 夕立激怒!現れる謎の影

s i d e 棚名

こんにちは、ハルナです。  
家で長居してしまった私はアーロンパークに戻っている最中です。  
その道中⋮。

ブスウウウウウウツ!!

「え?!今の音はいつたい⋮。」

私は音のした方へと向かいました。

音のした方へ来てみるとそこには一隻の小舟がありました。

その近くには数人の人影があります。

「誰かしら…?なにやら言い争つてるみたいだけど…。」

そう思い、近づいてみるとその人影はルフィくん達だったのです。

「出鱈目言うな!ナミがウソップを殺すわけねえだろうが!俺達は仲間だぞ!!」

ナミがウソップくんを殺した…?どういうこと?

とにかく、何しに来たのか聞いてみないといけないわね…。

私は意識して目のハイライトを消し無表情を作るとルフィくん達に近づきました。

「あら、誰かと思えば私達に裏切られた海賊さん達じやないですか」

そう言うと一同がこちらへ振り向きました。

そしてルフィくんが振り向き様に言います。

「…姉ちゃん」

「姉ちゃん、ですか、まだそう呼んでくれるのね…。ルフィくん…。」

「姉? もう私なんか姉なんかじやないんじやなかつたんですか?」

「そ、そりやあ…」

「口…」もるルフィイくん…。

意地が悪いと言われるでしようがここはこうするしかありませんから…。  
「口…」もるルフィイくんを他所にゾロさんが口を開く。

「おい、ウソツップはどうだ?」

「さあ? アーロンに捕まつたのなら今頃は海の底でしようね…。」

「てめえ、いい加減にしろ!」

そう言いながら刀に手をかけこちらに向かつてくるゾロさん。

「フッ…水触手…。」

私は軽く手を降り辺りの水を操ると水の触手を作りゾロさんの足を掴み持ち上げま

す。

「ウオツ!?

足を取られ自由を奪われるゾロさんに私は言います。

「私に攻撃を仕掛けようなんて10年早いですよ?ゾロさん…。私に一撃でも入れたければアーロンを一撃で倒すくらいの実力がなければ私には到底届きません…。」

「く、クソツ!」

足の拘束を解こうともがくゾロさんを私は振り回し近くの水田へと放り投げます。

「ゾロ!何すんだ!姉ちゃん!」

まだ分からぬのね…。仕方ないわ。

「これ以上余所者がこの村の問題に首を突つ込むなということです…。貴方達に近づいたのもお金の為以外の理由はない…。早々に引き返す事です。」

ここまで言えば例えおバカナルフィくんでも分かるでしょう…。

「姉ちゃん…」

「ち、ちよつとハルナさん！ いつたいどうしちやつたっぽい？ なんだか今のハルナさん  
変っぽい！」

「そうだぜ、姉さん…。アンタどうしちまつたんだ？」

昔はそんなじやなかつたじやねえか」

私は二人の言葉を嗤い飛ばします…。

「私が変？ 変わつてしまつた？ そんなの当たり前でしよう？ 人は変わる、それは私だつ  
て同じなんです…。昔は昔、今は今…。今の本当の私はこうなんです…。」

「そんな…」

た。 そのやり取りを黙つて聞いていたルフィくんが突然目を閉じると倒れてしまいまし

「ルフイ？」

「……」

私はその様子を黙つてみていると…。

「寝る、島を出る気もねえし、この島でなにが起きてんのかも興味ねえし、ちょっと眠いし…。寝る…。」

「ハア!? いきなり何を言つてるっぽい!?」

「これは…もう怒りを通り越して呆れるしかないですね…。」

「そうですか、それもいいでしよう…。でも…」

そう言うと私は水の触手を操りルフイくんを持ち上げます。

「うわあああああっ!! なんだあ!?」

そして宙にぶら下げる顔を合わせ言い放ちます。

「あなた達が何をしようと構いませんがもう私達には関わらないことです……。死にたくなければね……。」

そして、ルフィくんをぶら下げたままの状態でその横を通り過ぎます。その途中に私は最後の言葉を言い放ちます……。

「……さようなら」

それだけ言つてから私は触手を振り回しルフィくんを放り投げると、そのまま道を進んでいきました。

しばらく進んでいるとナミがいました。

「ナミ……」

「お姉ちゃん、ごめんね……」

「え？どうしたの？突然…」

「大丈夫…お姉ちゃんが苦しいの…分かつてたから…。」

それを言われた私は何かが急ききつた崩れ落ちた。

そして私は静かにナミの腕の中で泣きました。

s i d e o u t

s i d e サンジ

姉さんが立ち去った後、夕立ちゃんはずつと姉さんが消えていった方を見ていた。  
しかし、暫くして少し口を開いた。

「ハルナさん、泣いてたっぽい…」

夕立ちゃんのその言葉に俺は反応する。

「夕立ちちゃんにも分かつたか…。」

夕立ちゃんは頷いて答える。

「うん、前はずつと一緒に戦つてきてたからね…。そのくらいはわかるつもりよ」  
「そういや、夕立ちゃんと姉さんは俺達と出会う以前からの知り合いだつて言つてたな  
すると、クソ剣士が口を挟んでくる。

「ああ? アイツが泣いてた?」

「そうさ、心の中でな…。」

「フンッ…大方、ウソップを殺しちまつたナミを止められなかつた後悔の涙だろ」

「本当にそう思うのか?」

「あ?」

俺達が話していると不意に夕立ちゃんが呟く…。

「許さない…。」

「ん？」

「ああ？」

「ハルナさんをあんな風にするなんて絶対に許さないっぽい！魚人共！このソロモン海の悪夢と呼ばれた夕立がアンタ達に悪夢！見せてあげる！地獄よりも恐ろしい悪夢をね！！」

そう叫ぶ夕立ちゃんは怒りに打ち震えていた…。

s i d e o u t

s i d e ベルメール

ゲンさんの治療を終えて私とノジコは家に帰つてきていた。

家に入ると、椅子に座つたまま動かないナミとソファで寝息を立てているハルナがい

た。

「二人とも帰つてきてたの？ いつたいどした？」

私はナミに問いかける…。

「お姉ちやんに…。また辛い役目を押し付けちゃった…。」

ナミが辛そうな顔をして話す。

「教えて…。何があつたの？」

「実はね…」

ナミはそう言うとポツリポツリと何があつたかを話始めた。

「なるほどね…。そんなことが」

「もう私、お姉ちゃんにこれ以上負担をかけたくない…。でも、どうしたらいいのか分からぬの…。」

ナミが一層辛そうに言う。

私は眠っているハルナの顔を見る…。

「まつたく…。あれだけ言つても分からぬんだね…。この子は…。」

そう言つてそつとハルナの頬を撫でる…。

よく見ると、先程まで泣いていたのか、ハルナの目は泣き張らしたように腫れていた

…。

いつまで経つても手のかかる子だ…。

私はそう思いつつため息を吐くのだつた。

s i d e o u t

夢を見ていました…。

そこは水の中でした。

ユラユラと揺れるだけでなにもない…ただ、真っ青な空間に私はいました。

『まつたく、アンタが考えそうな手ね…。フンッ！』

そんな声が上から聞こえてきて私は上を見上げます。

そこにはナミがウソップくんを刺している場面でした…。

「?! ナミ！え…？」

しかしよく見るとナミはウソップくんではなく、自身の手の甲にナイフを突き立てていたんです。

「これは…記憶？」

恐らくそのでしよう、ナミは私と一緒にいたはずでしたから…。  
その間にも場面は進んでいきます。

『つ！ナ…ミ…』

『私達のビジネスの為よ、こうするしかなかつたの…。』

『ナ…ミ…てめえ…』

ナミはナイフを引き抜くと言います。

『大人しく死んで…。』

『…ア…ア…』

バシャーン！

ウソップくんが血塗れになりながらこちらへ落ちてきます。

私はそれを受け止めようと手を伸ばします…。

しかしウソップくんの体は私の手をすり抜け水底へと落ちていきました。

そこで私は理解しました。

これはナミ達の様子を見ていた水の記憶なのだと…。

「そう、そう言うことだつたのね…。」

ウソツプくんは死んではいない…。

その事実に私は深く安堵しました…。

すると、私の体がフワリと浮かぶ感覚がしました。

徐々に徐々に上へと浮上していく私の体…。

そして光に包まれた時、私は目を覚ました。  
目を開けるとそこは見知った部屋の中でした。

「ここは…家?」

すると、後方から声がかけられました。

「お姉ちゃん、起きたのね」

声のした方を見るとナミがこちらを見ていました。

「気分はどう?」

「ええ、おかげさまでもう大丈夫よ」

「そう、良かつた…」

そこで暫しの無言が部屋を包む…。

「ねえ、ナミ…。約束の金額まで後いくらだつたかしら?」

私は無言を解きほぐすように口を開きます。

「後七百万ベリーよ…。今の私達なら後一回の航海ですべて終わる…。」

「そう…。後七百万なのね…。」

確かにそのくらいならすぐに稼ぐこともできるでしょう…。

昔と違つてナミも潜り込むのが上達しましたし、きっとすぐに集められます…。

「それじゃあ最後の一盗み、行くとしますか!」

「そうね、もう一頑張りしましようか」

私達は立ち上がり家を出る。そこへ…。

「チチチッ！君達かね、ナミとハルナとか言う女二人組の泥棒は」  
海軍の一人の鼠のような顔をした男が話します…。

「…！」

この人、どうして私達のこと…。

鼠のような男は続けます。

『…ッ！？』

この人、いつたいどこでそれを知つて！？

「まあ、相手が海賊なんだ、咎めるつもりはない…。

だが、泥棒は泥棒だ。よつて、お前達が盗んだ金品はたつた今！全て！我々政府が預

かり受ける」

な、なんですかって!?

「さあ、盗品を全て差し出せ！」

ニヤリと笑みを浮かべ男はさらに続ける…。

「没収だ！」

# 持つてけ泥棒！ハルナの罠に嵌まる海軍

s i d e ハルナ

「こんにちは、ハルナです…。  
私は今驚きで動けずにいます…。」

「チチチチッ！どうした？聞こえなかつたのかな？海賊から盗んだお宝は全て政府が預かり受けることになつていてる…。」

「どうして海軍が宝の隠し場所を知つているの？  
この事を知つているのはベルメールさんや、ノジコちゃん、それにナミだけのはず…。  
と、ここでナミが口を開きます。

「フッ…。それはそれは…随分と職務にご熱心なことね、  
海賊どもに立ち向かう勇気がないからコソ泥相手に点数を稼ぐ…」立派なことだわ  
…。」

私はコソリとナミに耳打ちします…。

『ナミ、一応演技だけはしておいて…。フェイクはもう用意してあるから…それと、この事はベルメールさん達にも伝えちやダメよ…。』

私の言葉にコクリと頷くナミ。

「一つ言っておくけど、私はアーロン一味の幹部よ、それにお姉ちゃんはアーロン一味の副船長…。私達に手を出せばアーロンが黙つちやいないわ」

「チチチチッ…小娘が、それで私と対等にやりあつてるつもりかな？盗品を探せ!!」

そう指示を飛ばす海軍の男…。

その指示に数人の海兵が動き出す…が、

「があつ！」

「あがつ！」

「ぐあっ！」

バタリと急に倒れる海兵達。

「な……なんだ!? どうした！」

驚くの無理はありませんね…。

私は背後に複数の水球を展開しつつ口を開きます。

「一つ聞きますが、その情報は何処で手にいれたものですか？」

「チチチチッ…どうして君らに言う必要があるのかね？」

「何故ってこの情報を持っているのは私を含めた極少数の方しか知らないもの…。それを知っているとなれば誰かから聞いた以外考えられませんから」  
さあ、どう出できますか？

「チチチチッ…確かにそうだな…。だが君らに教える義理はない盗品を探してこい」  
またも指示を飛ばす男…。学ばない人ですね。

「水連弾「アクア・マシンガン」

私は背後に展開させていた水球から水を弾丸のように発砲させて海兵共を打ちのめします。

『ぐあつ！』

『ほぎやつ！』

そして残るはその男一人…。

「なんだこいつは？こんなやつがいるなんて聞いてないぞ！」

「さて、もう一度だけ聞きます…。この情報は何処で手にいれたのですか？言いいなさい…。」

だが、海軍の男は往生際悪く言います…。

「お前、わかっているのか？海軍に手を出せば逮捕、下手をすれば死刑なんだぞ！」

「何を今さら…。そんなこと、貴方をここで始末すれば済むだけ話じやないですか？」

「ひいっ！」

「早く言いなさい…。さもなくば、貴方の身体が蜂の巣になりますよ？」

私は水球を見せつけながら脅迫します。

「わ、わかつた！言う！言うから殺さないでくれ！」

「アーロンだ！あの魚人から教えられたんだ！」

なんですって!?アーロンが…!

「…っ！」

「ナミも驚いている様です…。そうよね、これは約束を裏切られたのと同じことですもの…。」

「そうですか、それなら仕方ありませんね…。お宝は差し上げます…。そこの木の根元に埋めてありますから…。」

「ちよ、ちよつとお姉ちゃん!? どうしてあげちゃうのよ!」

「いいのよ、一億なんてその気になればすぐに集められるのだから…。」  
 その代わり…。と、私は男に水球を突きつけ言います。

「次にこんなことをしたら貴方を奈落の水底へと叩き落としますから…。」

物凄い勢いでコクコクと頷く男…。

これだけ言つておけば大丈夫でしよう…。後は…。

私はナミにアイコンタクトをとります…。

(後はよろしくね…) と…。

ナミは小さく頷いてから男に言います。

「さつさと持つていくななら持つてけドロボウ! こんな『はした金』善部くれてやるわ!」

「は、はい!!」

私はそれを見届けると歩き出しました…。

ある場所へ向けて……。

「アーロン！」

私はアーロンパークのとを蹴破りました。

「おお、ハルナ、どうした？何をそんなに怒ってるんだ？」

そう、シラを切るつもりなんですね……。

「よくそんなことが言えるわね……。あの海軍から聞いたわ、あの男に宝の隠し場所を教えたのは貴方だつてね。

約束を破つておいてその態度はなに？」

すると、アーロンは頬をしかめた。

「チツ……鼠の野郎、喋つちまいやがつたのか：使えない奴だ……。」

「私の質問に答えなさい！アクア・スネーク！」

私は怒りに任せて巨大な水蛇を作り出しアーロンを締め上げます……。

「ぐつ……ああ、そうだ、お前達は手放すには惜しい人材だつたんでな」  
「そんな……そんなことのために……！」

「そんなことのためにナミとの約束を裏切つたのか!!」  
私は怒りを強め、蛇の締め上げる強さを上げます……。

「俺は裏切っちゃいないさ、あんなことで見つかるナミが悪いのさー・シャーハツハツ  
ハツハ!!」

「…殺す!!」

蛇に更に締め上げる強さを上げさせます…。

「アーロンさんに何しやがる！」

「ニユウ…！下等種族の分際で団に乗るんじやねえ!!」

「チユツ…瞬殺してやるよ」

『殺つちまええええ!!!』

幹部や部下達が一斉に私に飛びかかってきます…。

「槻水 「アクア・タイフーン」「」

直後、飛びかかつて来た者達は水の奔流に飲み込まれます

「ニユウツ?!?なんだこれは!?!」

「チツ…身動きがどれねえ」

「チュツ…これはキツいな…」

『くつくそお…!!』

先ずは貴方達から終わらせないといけませんね…。

「追撃」「水鎌」

私は奔流を水の刃へと変え部下達を切り刻んでいきます。

『ぐわあああつ…!!』

暫く断末魔の悲鳴が聞こえていましたが、すぐに聞こえなくなりました…。

「残るは貴方だけ……」「隙アリだな」がはつ!?」

な、なに…？

見ると私の胸にアーロンの鋭い鼻が突き刺さっていました…。

「ゴフッ！…!…こ…れは…」

「惜しかつたな、ハルナ、お前がもしあの蛇を硬質化させたりしていたら俺を殺れてたかもしれねえのにな…。」

「つ……ま、まさ…か…」

「そう、あの蛇の拘束はもうねえ、お前の負けだ、ハルナ」

そう言うとアーロンは私の胸から鼻を引き抜き首を持ち上げてきます…。

「がふっ…！…ああ…」

駄目…もう意識が…

「もう終わりみたいだな：フンツ…」

そう言うとアーロンは私を海へと投げ捨てました…。

こ…こんな…ところで……。

「こんどう…おねえ…さま…」

そこで私の意識は暗転しました…。

そして、私は水底へと沈んで行くのでした。

s i d e o u t

s i d e ヨサク&ジヨニー

オレ達は目を疑っていた。

今しがた起こつていた光景が信じられなかつたからだ…。

先程、ハルナの姉さんがアーロンにぶちギレついてアーロンの部下達を瞬殺していた  
と思つたら、その直後に姉さんがアーロンに貫かれていた。

しかもアーロンはそんな姉さんを海へと投げ捨ててしまつた…。

「ど、どうする相棒このままだと姉さんが！」

「ヨサクは姉さんを頼む、オレはその間にアーロンの相手をする」

「相手をするつてどうするんだよ！…こうしてゐる間にも姉さんが!!」

「オレ達が考えてたつてしかたねえんだ！いくぞ!!」

「おう！」

オレ達はすぐに動き出すのだった。

待つててください！姉さん！絶対に助けますから

# 榛名轟沈!? ルフイの怒り大爆発!

s i d e タ立

ヤツホー、タ立だよ。

いま、ルフイと散歩してるんだけどその途中…。

急に胸騒ぎがし始めたっぽい。

「……ハルナさん?」

「ん? どうした? ユウダチ」

ルフイが私の変化に気付き問い合わせてくる。

「なんだか嫌な胸騒ぎがするの…ハルナさんに何かあつたのかもしれないっぽい…」

「姉ちやんが? そりゃ本当か!?

ルフイの問いか私は首を降つて答える

「分かんない…でも、すぐ嫌な予感がするの…」

「よし!じやあ姉ちゃんを探すぞ!」

「…え?」

ルフィの言葉に私は顔を上げる。

「わかんねえなら確かめりやいい、もし本当にヤバそなうなら助け出すまでだ!」

「そう、そうよね!先ずはハルナさんの安否を確かめるのが先決っぽい!」

「分かった!ハルナさんを探そう…。

ハルナさんはいつもナミと行動を共にしてたっぽいから  
ナミに聞いたら分かるかもしれないわ」

「よし、じやあナミを探すぞ!」

「うん！」

私達はナミを探して走り出した。

s i d e o u t

s i d e ルフイ

ナミを探しだしてすぐ、オレ達はココヤシ村に来ていた。

「さて、ナミは何処だ？」

「すぐに見つかるといいつぽいんだけど…」

二人して辺りを見回す…。すると。

「アーロン！アーロン！アーロン！アーロン！」

そう叫びながら自信の左肩にナイフを何度も突き立てているナミの姿があつた。

ユウダチがそれを見て慌てて止めに入る。

「やめるつぽい！そんなことして自分を傷つけちや駄目つぽい！！」

しかし、ナミはユウダチを睨みつけながら言う。

「…なに？まだこの島に居た訳？すぐに島を出てけっていつたでしょ…」

「でも…」

そう言うユウダチの顔が暗くなる…。

オレは代わりに口を開く。

「ああ、言われた」

「出てけ！出てけ！出てけ！出てけ！出てけ！出てけ…でてけえ…」

拒絶するナミの言葉が徐々に弱くなっていく。

「何があつたつぽい？私達に教えて…」

「……実はね」

暫くの無言の後、ナミがポツリ。ポツリと話し出した。

「ほんの少し前に私達のところに海軍が来たの……」

私達のお宝を没収するつてね……」

だけど、その隠してあるお宝はお姉ちゃんがもしもの時の為に用意してた偽者だつたの……」

お姉ちゃんはそれを利用してやつらからどうしてその事を知ったのか聞き出した……。  
それがアーロンだつたの……。お姉ちゃんはその後すぐに何処かに行つてしまつたんだけど、その時のお姉ちゃんの顔、ニコニコしてはいたけど、  
眼は本気のそれだつたわ……。

だからお姉ちゃんがどこにいつたか聞きに村にまで來た……。

その時にゲンさんに何があつたのかを聞かれて全部話したわ、そしたら村の人がお姉ちゃんとすれ違つたときに『アーロン』と言つていたのを聞いた人がいたらしいの……。  
その時のお姉ちゃんの顔は人を平氣で殺しそうな顔をしていたんだつて……。

それで、お姉ちゃんはアーロンの所へ向かつたんだつて話になつて村の人達がお姉

ちゃんを助けにいこうとしたの…。

私は必死に止めた…。けど、駄目だった…。皆は私の制止を無視して行つてしまつた…。」

そこで、ナミが悔しそうに口をつぐむ…。

そして、泣きながらこう口を開いた。

「ルフィ、ユウダチ、お願ひ、お姉ちゃんを、村の人達を助けて…。」

なに言つてやがんだ…。

その言葉にオレは無言でナミの頭にシャンクスの麦わら帽子を被せ、ナミに背を向け歩きだす。

「ルフィ?」

ユウダチが訝しげに声をかけてくる

オレは立ち止まると思いつきり息を吸い込み叫んだ。  
助けるなんてそんなの…。

「あたりまえだああああーーっ!!!!」

「そうよ！安心してナミ！ハルナさんや村の人達は必ず助けるつぽい！」  
ユウダチもやる気みてえだな…。

「つっ!!」

ナミが更に泣くのを聞きながらオレは無言で歩き出した。  
そのすぐ後にユウダチもついてくる…。

進む先にはゾロ、サンジ、ウソップが待ち構えている。

「いくぞ！」

オレは一言そう告げる

『おう！』

「ぽいっ！魚人共に悪夢、見せてあげる！」  
目指すはアーロンパーク…。

待つてろよ！姉ちゃん！

しばらく進むとアーロンパークが見えてきた。  
しかしその入り口に人が溢れていた…。

よく見ると、入り口の所に島を出た筈のヨサクとジョニーが道を塞いでいた。  
その姿はボロボロで酷いものだつた…。

「ヨサク！ジョニー！どうしたっぽい？ボロボロじやない！」

ユウダチが慌てて駆け寄る。

「ああ…ユウダチの姉貴、大変なんです！ハルナの姐さんが！」

「ハルナさん!?何があつたの!？」

「ハルナさんがやられちまつたんです！」

『つつ!?』

オレを含んだ一同が驚いた。

二人は続ける…。

「オレ達は姉さんを助けようとアーロンに挑んだんだが：紙一重で負けちまつた…。だからこうしてここに来る村人達を止めておくので精一杯でした…。すいません!!」

ユウダチは首を降つて答える。

「ううん、謝らなくとも良いっぽい、二人はよくやつてくれたわ…。後は私達の出番っぽい」

「ユウダチの姉貴…!!」

オレは扉に近づきながら口を開く…。

「退いてくれ…。」

サツと避けるヨサクとジョニー…。

オレは扉の前に立つと思いつきり拳を振り抜いた。

ドゴオオオオンッ!!

轟音をあげて壊れる扉…。

オレ達は中へ入りやつを睨み付ける。

「アーロンってのはお前か?」

尖った鼻の魚人は顔をしかめながら答える…。

「アーロンってのはオレの名だが?」

オレはアーロンに近づきながら自身の名を告げる…。

「オレはルフィ」

「ルフィ?で、てめえはなんだ?」

「海賊!」

「海賊だと？その海賊が俺に何の用だ…」

「姉ちゃんはどこだ？」

「姉ちゃん？誰のことだ？」

「ハルナって女がいるはずだ！何処にいる！」

「ハルナ？ああ、アイツなら『深海』だ…。」

オレはアーロンの目の前まで近づくと思いつきり腕を振り上げ拳を振り抜いた。  
地面をバウンドしながら飛んでいくアーロン…。

パークの壁に激突し、その壁に背を預けオレを睨み付けてくる。

「……てめえはいったい…つ！」

その後、アーロンが殴られたように吹っ飛んでいった。

「今の言葉、もう一度言つてみるっぽい…。今度はそんなものじや済まさないから…。」

そのすぐ後にサンジとゾロが現れる…。

「ユウダチちゃんの言う通りだぜ、このクソ看野郎…。」

「つたく、お前ら突っ走りすぎだ…。」

「おいおい、これホントにハルナがやつたのか?!」

やつて来たゾロとサンジそれにウソップにオレは告げる…。

「ゾロとサンジ、ウソップは姉ちゃんを頼む…。オレはアイツをぶつ飛ばす」と、そこでユウダチが口を挟む…。

「ルフィ、私もいること忘れないでくれない?」

「そうだつた…。んじゃ、ユウダチ、二人でアイツをぶつ飛ばすぞ!」

「任せといて!さあ、素敵なパーティしましょう!」

オレ達はアーロンに向かつて突つ込んで行つた。

s i d e o u t

s i d e サンジ

ルフィとユウダチちゃんがアーロンに突つ込んでいくのを見て俺は海を見る。  
この底に姉さんが…。

まだ生きてるんだろうか…またあの優しい眼差しを向けてくれるんだろうか…。  
どつちにしても助けないことには始まらねえ…。

「オラ、クソ剣士、姉さんを助けにいくぞ」

「んなもん、てめえ一人で行けば済む話だろ？」

「ああ、なんだ？・クソマリモ」

「やんのか！グルグル眉毛！」

「つて、喧嘩してる場合かー!!早くハルナを助けねえとヤバインじゃねえのか!?!  
つと、そだつた…。こんなことしてる場合じやねえ…。」

「仕方ねえ、ウソツク、手を貸せ」

「お、おう!」

俺達は海へと飛び込んだ。

しばらく潜ると底の方にうつすらと人影が見えた。  
あれだな?

近づいてみると姉さんの胸から出血していた。  
顔も血の気がかなり引いてきている…。

ヤバイな、相当出血してやがるぞ…。早く地上に戻つて止血しねえと手遅れになつち  
まう…。

(お、おい、サンジ!これヤバいんじやねえか!)

(分かってる、ウソップすぐに姉さんを引き上げるぞ)

(あ、ああ……)

俺達は姉さんを持ち上げ浮上しようとする……が……。

(な!?なんだこの重さは!?これが人間の重さかよ!)

(しのこの言つてねえでさつさと持ち上げろ! 急がねえと手遅れになつちまうだろうが  
!)

だが、不味いな……。こりや本気で持ち上がらねえ……どうなつてんだ!?  
しばらく二人して持ち上げてみるも全く動く気配はない。

(仕方ねえ、ウソップ! 一端、上がるぞ、これ以上は俺らの息が保たねえ)

(そうだな、もうそろそろヤバイ……)

俺達はゾロに協力を仰ぐため一度会場に引き返すのだつた……。

しかし、このときの俺は知らなかつた…。  
姉さんにあんな変化が起ころるなど…。

s i d e o u t

s i d e 夕立

サンジ達が水中で苦戦している少し前のこと…。

「ゴムゴムのお…！」

「風魔…。」

『螺旋 ピストル 銃 !!』

「ざふあつ…!!」

螺旋の力を纏つたルフィのピストルが炸裂する。  
吹つ飛ぶアーロン…。

「追撃よ！疑似風遁『螺旋連丸！』

風の手を複数出現させその手に複数の螺旋丸を作り上げ飛んでいくアーロンに叩き込む。

「がつはあつ!!」

ノーバウンドで超回転しながら飛んでいくアーロン

「まだよね？こんなものでやられてもうつたら困るっぽい、  
あなたにはまだしてやりたいこといっぱいあるのよ？」

しばらくすると奴が歩いてきた。

「チツ……こまでやるとはな、さすがの俺も驚いてるぜ……だがな、魚人と下等な人間とでは圧倒的な差があるんだぜ？それはなんだと思う？」

「鼻…顎？」

「牙つぽい?」

「分かった! 水搔きだ!」

私達の言葉にアーロンはキレたつぽい

「つ!…種族だあつ!!」

叫んだ直後に私達に噛みついてきた。

ルフィはすぐさま躱わす、けど私は動かない

「おわつとつと…つてユウダチ!!」

ルフィが慌ててこちらを見る

だが、慌てることはない、何故なら私は…

「大丈夫、私は平気つぽい」

カゼカゼの実を食べた風人間なんだから!

「チツ…自然系の能力者か…」  
ロギア

「そう言うことよ、降参するなら今のうちよ?まあ、降参したところで許すきはないけど…」

「降参?俺が下等種族に?舐め腐るのもいい加減にしろよカス共!もう手加減は無しだ…。魚人に逆らつたことを後悔しながら死んでいくがいい!」

遂に本気になつたわね…。来るなら来てみなさい!

私達がアーロンの攻撃に身構えたその時だつた。

ザザザザザザザバアアアアンツツ!!

突如、海面が盛り上がり破裂した。

これにはルフィもアーロンも驚きを隠せない。

でも、私は見覚えがあつた…。こんな登場をするやつらなんてアイツらしか居ない…

!

「なんだ、今度は何が起きた!?

「い、 いったい何事だあ!?」

「くっ…！」

私は水飛沫の中盛り上がった波を睨み付ける。  
水が少しずつ落ちていき、やがてその正体が現れる…。  
底に現れたのは…。

黒い巨人のような身体に口から砲身を生やしたナニカとその横で妖艶に微笑む黒い  
ワンピースを来た白い肌の女性だつた。

そして、黒い巨人がその手に持つていたのは海で出会つた怪獣であつた…。

「忌々シイ魚ドモメ…！ サツサト…イーストブルーノ水底ニ沈ンデイケ!!」

# 深海の覇者、戦艦棲姫爆誕！

s i d e 夕立

ヤツホーダ立だよ…。

私は今、驚きで声がでないでいる…。

「あ…あ…え…？」

どうして？どうしてこの世界に居ないはずの深海棲艦がいるの！？  
ここは制海権を奪われた国じやないのにどうして！？

「なんだなんだあ？なんかすげえデカイのが出てきたぞ？」

ルフィが興味津々といった様子で見て いる。

しかし、この時、私達は気づいていなかつた…。

戦艦棲姫の髪飾りが私達のよく知る人物のそれであつたことを…。

戦艦棲姫は私達には見向きもせず、ただギロリとアーロンを睨み付けて いる。

「なんだ、コイツは…お前も俺達魚人に逆らう気か?」

「……」

戦艦棲姫は問い合わせには答えず、ただアーロンとの距離を積めていく…。  
そして、アーロンの目の前まで近づくと…。

「つ!? ぐおつ!? な、なんだこの力は……!!」

いきなり首元を掴み片手で思いきりその首を締め上げた。

「ぐつ…! あがつ…! くつ…調子に…乗るな!!」

アーロンが手についた少量の水を戦艦棲姫に向け飛ばす。  
水は戦艦棲姫に諸にかかるが…。

「……コノ程度カ?」

戦艦棲姫はビクともせず、ただ冷徹にアーロンの首を締め上げる…。

「なつ!? あがつ!」

「……フンツ」

締め上げるのに飽きたのか戦艦棲姫はアーロンを水の中へと投げ飛ばす。私はそれをみて何故か戦艦棲姫に注意を飛ばしていた。

「つ！ 駄目！ それじゃあ相手の思うツボっぽい！！」

すると、戦艦棲姫はこちらを振り向く…。

今度は私が標的……？

そう思い、身構えるが戦艦棲姫は私の予想を斜め上を行く行動をとつた。

「……（ニコリ）」

なんと、微笑んだのだ…。あの戦艦棲姫が…。

私は信じられなかつた…。

艦娘を見つけたら即座に攻撃してくるあの戦艦棲姫が私に向けて微笑んだ？

「なあ、あの女、どつかで見たことないか？」  
不意にルフィイが話しかけてくる。

私は考え事をしていて驚いてしまった。

「ひやあつ!?え、な、なに?」

「なんだ?そんな驚いてよ…。にしてもあの黒い奴カッケー!!!」

ルフィイの言う黒い奴とはあの艦装のことだろう…。

あれがかっこいいなんて…。私達はあれに散々悩まされてきたっていうのに…。

「お前、あの人正体が誰か分かつてもそんなこと言えるのか?」

サンジさん達がやつて来て話す。

「サンジさん、アレのこと知ってるっぽい?」

「ん?いや…。アレを知ってるっていうよりアレの元の人物を知ってるってだけだが  
な、ユウダチちゃんはアレのことを知ってるのか?」

不意に聞かれて私は慌てて否定する。

「え!? ううん! 知らないっぽい!」

「…そりゃ、まあ、別にアレが何かなんぞ知りたくもねえけどな…。」

目の前では戦艦棲姫の艦装がアーロンの海中からの攻撃を難なく防いでいる…。

「なあ、そんでアイツ正体つてなんなんだよお」

ルフィが焦れつたそうサンジさんに聞いている。

「お前これ聞いたら腰抜かすぞ…。アレはな、姉さんなんだよ…。」

その言葉を聞いた私は一瞬耳を疑つた。

確か、サンジさんが姉さんと呼ぶのはハルナさんのことだつたはず…。

そして今サンジさんは戦艦棲姫を姉さんと呼んだ…。

ということはつまり…。

「ハルナさんが戦艦棲姫になつてるっぽい!?」

「ん? アレが姉ちゃんなのか?」

「そういうこつた…。つたく、あんな色っぽくなっちゃってよお…。なんて…なんて美しいんだ…♪」

サンジさん…仮にも敵にそんな目を向けるのはどうかと思うっぽい…。

私は苦笑しつつ戦艦棲姫に目を向けた。

s i d e o u t

s i d e 三人称

「クソッ！何で当たらねえ！俺達魚人は至高の種族だぞ！」

先程から海中からもうスピードで突進するアーロンだがその攻撃は易々と防がれ相手にダメージを与えることができない…。

「チヨコマカ鬱陶シイ魚メ：モウ遊ビハ終ワリダ：サツサト水底ニ沈メ：」

「シャークオン！ダーツ！」

先程とは比べ物にならないスピードで海中から突進してくるアーロン：  
だが、戦艦棲姫の儀装は難なくそれを受け止めると頭を掴み持ち上げてしまう…。

「ぐつ…！クソッ！離せ！下等な人間が!!」

「ニンゲン？何ヲ言ツテイル…。私ハ深海棲艦…。戦艦の戦艦棲姫…深海の覇者…。魚  
程度ノ分際デ私ニ楯突ク愚力者ニハ死ヲ…。」

そういうと儀装が砲身のある頭をアーロンに向かた…。

「沈メ…！」

刹那――

艦装の砲身が赤く輝いたかと思うと轟音と共に真っ赤に染まる弾丸がアーロンに向  
けて放たれた…。

その距離ゼロ…まさにゼロ距離射撃である。

アーロンは身体に大きな風穴を空けたまま力無くダランと伸びた…。

「フンツ…口程ニモナイ…ザコホド洒落タ台詞ヲ吐ク…」

そう言う戦艦棲姫の口調には何処か楽しげなものが混じつていていた…。

s i d e o u t

s i d e 夕立

目の前でアーロンが殺された。

それも絶望的な実力差で…。

目的の者がいなくなつたことで私は一層警戒を強める…。

もしこちらに狙いを定めてきたときは例え刺し違えてでもルフィイ達を守ろうと心に決めながら…。

しかし、戦艦棲姫はアーロンを倒した後、ずっと水平線を見ている…。

どうして動かないの？っていうか、魚人にしかターゲットを示さない深海棲艦なんているの？

と、思考に集中しているとウソツクが話しかけてきた…。

「なあ、アレ、ハルナなんだろ？どうやつたらもとに戻るんだ」

そんなことが分かるならとつぶにやつてるっぽい…。

分からぬからこうして考へてゐるんぢやない！

すると、またも水面が浮かび上がり今度は複数の水柱が浮かび上ると、その水柱達は私達の前に降り立ち人形へと変わつていつた…。

『H-i！ポイポイ、お久しぶりデース！』

『久しぶりね、夕立ちゃん』

『マイク、音量大丈夫？つて…。今はマイクないんでした…あ、お久しぶりですね。夕立ちゃん』

私はまた信じられなかつた…。

目の前に現れたのは金剛型の三姉妹だつたから。

「なんだ？また人が増えたぞ？つつか、ユウダチの知り合いか？」

その問い合わせに金剛さんが答えてくれる…。

『Yes！私達は昔の friend ね！』

「は？何言つてんだコイツ…？」

「えっとね、ルフィ、friendっていうのは友達って意味かの」

「へえーユウダチの友達か！オレはモンキー・D・ルフィ！海賊王になる男だ」「海賊？OH！Pirateネ！私は英国で生まれた帰国子女の金剛デース！」

『私は金剛お姉さまの妹分、比叡です！』

『同じく妹分の霧島です。どうぞお見知りおきくださいね』

なんだか、かなり馴染んでるっぽい…。

サンジさんなんか目をハートにして金剛さんにアタックしてくるし…。

「所で金剛さん、どうしてここに？」

私が聞くと金剛さんは思い出したように話し出す。

『OH！忘れるところデシタ！ ハルナを元に戻す方法を伝えに来たネ！』

「え?! ハルナさんを元に戻せるっぽい!」

金剛さんは可愛くウインクしながら続ける。

『Yes! その為にここに来たネ!』

「そ、その方法は!?」

『なに、簡単なことです。ハルナに提督を認識させればいいのですよ。』

…へ？ 提督を認識させる？

「それってどうすれば良いっぽい？」

『うん… そうですね、例えばそこのマリモヘッドの人がハルナ…今は戦艦棲姫でしたね、戦艦棲姫に『榛名、お前を秘書艦に任命する』とか言えば恐らくは…』  
それだつたら適役はこの人ね！

「ルフィ！ あの人こう伝えて！ 絶対に一言一句間違えないでね？」

私はルフィに耳打ちする。

「おう！ それをアイツにいえばいいんだな？ 任せろ！」

ルフィは戦艦棲姫のところに歩いていき声をかける。

「ハルナ、お前をダイイチカンタイのキカンにニンメイする!」

すると、戦艦棲姫はルフィの方をギヨロリとみる。

そして、ルフィに敬礼をすると戦艦棲姫の体が輝き出した。

光はアーロンパーク一帯を包み込んで消えた…。

光が收まると、底には盛大にキラキラが付いた榛名さんがルフィに敬礼していた…。

「高速戦艦、榛名。着任しました。あなたが提督なのね?よろしくお願ひ致します。」

こうして、改めて榛名が戻ってきた麦わら一味なのであつた…。

# 新たなる船出、さらばココヤシ村

s i d e 夕立

ハルナさんが戻つてすぐ…。

私はアーロンパークを見上げていた…。

こんな所があるからハルナさんやナミちゃんがあんなことになつちやつたつぽい…。  
そんな場所は私が吹き飛ばしてあげる！

「みんな！今すぐここから離れるつぽい！巻き込まれても知らないわよ！」

そう言いながら私は付近の風を操り収束させていく。

『な、何をする気だ？』

「おいユウダチ、いきなり逃げろつて何するつもりだ？」  
ゾロが訝しげに聞いてくるのを私はニヤリとしながら返す。

「今からここを吹き飛ばすっぽい、だから巻き込まれたくなかったら急いで遠くまで離れる事をおすすめするわ」

その言葉を聞いた瞬間みんなの顔色が変わった。

「バカヤロ！それを早く言え!!おい、早く逃げろ！巻き込まれるぞ!!」

ゾロが大声で周りに呼び掛けながら走り出す。

「なんだ？ユウダチ何かすんのか？」

「今はそんなこと言つてねえで早く逃げるぞ！姉さんも早くこつちへ！」

「はい、榛名は大丈夫です！」

「キヤーツいつたい何するつもりなのよお!!」

大慌てで離れていく一同、それを確認すると私は技を発動させた。

「大風乱！螺旋龍!!」

すると、収束させていた風が渦巻き始め、まるで龍が動いているかのように回転を始める…。

やがて風の龍は自らの身体を回転させながら超巨大な竜巻を作り出した。

巨大竜巻は真っ直ぐにアーロンパークへと向かっていき崩壊しかけていた建物をまるごと呑み込んだ…。

辺りは暴風が吹き荒れ、中の様子は伺えない。

「イッケエー！ぶつ飛ばすっぽーい！！」

巨大竜巻は暫くアーロンパークの中を暴れまわりやがて勢いを集約させていき、ポンッと消えた…。

後には何もない更地が広がっている…。

「お掃除完了っぽい！」

ブイサインをする私に声がかけられる。

「おーおー、派手に暴れたなユウダチちゃん」

「な、何よこれ…。アーロンパークは？」

「ユウダチ！ 今のスゴかつたな！ 龍がいたぞ！ 龍が！」

「あの建造物をこんな更地に変えるなんて…どうやつたらそんな火力が…。」

「おい！ ユウダチ！ あぶねえじやねえか！ 殺す気か!!」

上から、サンジさん、ナミちゃん、ルフィ、榛名さん、ゾロが話す。

「だから最初に教えておいたでしょ？ 逃げ切れたんならいいじゃない」

「よくねえよ！ 危うく殺されかけたわ!!」

ウソップがマジギレして、こんなの本気の序の口なのに…。でも、そろそろヤバ  
イっぽいかも…。

途端に身体に力が入らなくなり、私はその場に倒れる…。

「ユウダチ!? どうしたいきなり!?」

「な、なんだ? どうしたんだよ?」

「ユウダチ!? 大丈夫!?」

「ユウダチちゃん!? 何処か具合でも悪いのか?」  
心配そうに駆け寄つてくるルフィ達…。

「大技使つた反動で疲れちゃつたっぽい…もう身体動かない…」

その言葉に途端に拍子抜けしたような顔をするナミ、ゾロ、ウソップ。

「大丈夫かい? そういうことなら運んでいってやるよ」

「疲れて動けねえのか? 大丈夫かよそれ…」

「無理はいけませんよ?」

心配そうに声をかけてくれるサンジさん、ルフィ、榛名さん…。

私はサンジさんに担ぎ上げられるとグデ〜…と垂れてしまう。

それを見かねたのか帽子に風車を刺したおじさんが声をかけてきた。

「そういうことなら、一度村に来るといい。そこでしつかりと休むことだ…。」

「お、そいつはありがてえ、良かつたなユウダチちゃん。休めるみたいだぞ?」

「うう…助かるっぽい〜…。」

そうして、私達はココヤシ村へと戻つていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

村に戻るとそこは大宴会場となつていた。

あちこちに料理が並び島の人達が楽しそうに笑いあつてゐる。

「お前さんも混ざりたいだらうが今はドクターの所へ行くぞ、そこの剣士のお前さんもだ」

「はい…」

「あ？ 何で俺が…」

「ほらほら、早く行くよ！ それ！」

私はゾロを風で浮かび上がらせる。

「うおっ！ クソッ！ 離せ！ ユウダチ！！」

必死に抵抗するゾロ、だけど損なんじや逃げられないっぽい

「はいはい、それじゃサンジさん。お願いつぽい」

「任せとけ！ざまあねえなゾロ」

「クソッ！覚えてろよクソコツク！」

他愛もない言い争いをしながら私達は風車の人の案内でドクターの所へと向かった。

s i d e o u t

s i d e ナミ

アーロンをルフィが倒してから3日過ぎた…。  
私は一人、家にいた。

「なんだ、ここにいたの？ナミ」

その声に振り向くと、そこにいたのはベルメールさんだつた。

「うん、ちょっとと考え事したくて…」

「考え方？どうしたの？話してみな？」

ベルメールさんの言葉に私は三日前の経緯を話し始めた。

「前にね、ユウダチがアーロンパークで大暴れしたことがあつたでしょ？」

その言葉にベルメールさんはああ…と苦い顔をする。

「確かにあつたね…。おかげで酷い目に遭つたわ…。」

「あはは…。その時にね、ユウダチが言つてくれたの

『これならナミちゃんも榛名さんも思い残すことないっぽい、だから私達と一緒にいこ  
う？私はナミちゃんの戦友なんだから！』

つて…』

「…そつか、良い仲間を持つたね、ナミ」

「うん、だからね、私、海へ出ようと思う…。海賊になつて私の夢を叶えようと思うの…。止めないよね？」

ベルメールさんは目を閉じると静かに口を開いた。

「アンタが決めたことなら私は何も止めやしないよ、ハルナも行くつもりなんだろ？」

私はコクリと頷く…。

現状、お姉ちゃんは今までの記憶が変化のショックで飛んでいて私達のことは覚えてない状態にある…。

ただし時間をおいてゆっくりと休ませれば自然と記憶は戻るだろうとあのコンゴウとかいう人が言っていた…。

「なら、安心だね、ハルナがいれば私は何も心配要らないよ…。頑張つてきな、ナミ…。自分の思う通りに進んでおいで」

「つつ!!うん!……もう、行くね」

「ああ、行つてらつしやい…ナミ、ハルナにもよろしく伝えておいてね」

「うん!分かつてる!」

そうして、その夜は更けていくのだつた…。

s i d e o u t

s i d e ルフイ

「よーし!出港だ!つと、その前に荷物、全部積んだか?」

オレの問いにウソップが答える。

「ああ、全部積み終わつたぜ!何日もいなかつたけどよ、思い出深い島だつたよな」

「ああ、ニヒヒヒヒツ！」

「ん？ そういうや、ナミさんはどうした？」  
サンジがキヨロキヨロ見回してナミを探す。

「あれ？ そういうばいないっぽい…。」

「来ねえんじやねえのか？」

「この村に残る…ということなんでしようか…。」

「いや、姉さんが来るのにわざわざ残るような人か？」  
まあ、ナミのやつ、姉ちゃんにベツタリだつたしな…。

すると、遠くの方に人影見えた。

「ん？」

「おおおおお!! ナミさーーん!!」

「ようやく来たっぽい！」

するとナミは大声で叫んだ。

「船を出して!..」

ん? もう出すのか?

「なんだなんだ? 走りだしたぞ?..」

「船を出せつてよ」

「え…でも!..」

「とにかくやるっぽい!..」

船の下では村人達が何かいつているが無視だ..。

「帆を張れ！」

オレはゾロ達に指示を飛ばし、出港の準備をする。

その間にもナミは村人達の間を走り抜けてくる。

「おい、いいのか？あんな別れ方させちまつて」

「いいじやん別に、アイツが決めることだ」

そう、アイツが決めることに口を出すつもりはねえんだ。

その間にナミは飛びあがり船へと飛び乗ろうとしている…。

だが、飛距離が足りず。後、数歩届かない…。

「折角の機会に海に落ちるなんてしてほしくないっぽい『操風、風力操作！』

すると、ナミの身体が浮き上がり、無事に船の上へと降り立つた。

「サンキュー、助かつたわユウダチ」

「ぱい！」

互いにサムズアップする二人⋮。

ナミはその後すぐ自身の服に手をかけると…上に上げた⋮。  
すると、その中から財布がボトボト落ちてくる。

それを見た村人達は慌てて自身の懐を探る

『しまつたー！あの野郎俺達の財布を盗みやがった！』

『なんだアイツやることかわらねえじやん。』

「みんなー！行つてくるー！！」

こうして、オレ達の旅に改めて姉ちゃんとナミが加わり、  
オレ達はまた冒険にでかけるのだつた。

「いくぞ！野郎ども！出港だーー！！」

目指すはグランドラインだ!!

# 世に知れ渡る名前！賞金首になつた三人！

s i d e ハルナ

こんにちは、ハルナです。

今、私は少し混乱しています…。

今まで忘れていた記憶が不意に甦つてきたのです…。

そう、確かに私はアーロンに胸を貫かれて轟沈しました…。

でも、こうして私は生きています。いつたいどうして…？

私が考え込んでいると船室の扉が開き中に誰かが入つてきました。

「あ、お姉ちゃん、起きたのね。どう？何か思い出せた？」

入つてきたのはナミでした。私は微笑んでナミに答えます。

「ええ、全部思い出したわ。心配かけちゃつてごめんなさい…。」  
すると、ナミは安心したようにホウと息を吐いて言います。

「本当よ、もう心配かけさせないでよね？それじゃああいつらに教えてくるからお姉ちゃんも早く来てよね」

私はその言葉に小さく頷きます。

それを見てナミは部屋を出ていきました。

本当に、迷惑をかけてしまいましたね‥。

私は寝間着を着替えると船室から出るのでした。

――

あれから、私達は甲板にて話し合つていきました。

「いやー、でも本当に良かつたよ、姉さんの記憶が戻つてくれて」

「本当っぽい～」

「だな！ニシシシシツ!!」

「あはは…。その節はご迷惑をお掛けしました…。」

私は申し訳ない気持ちで謝ります…。

「まあ、なんだかんだ言つて無事にハルナの記憶戻つたんだ、それでいいじやねえか」  
ゾロさん。ありがとうございます…。

「にしても、あん時のハルナ凄かつたよなあく姿が豹変したと思つたらアーロンの奴を  
瞬殺だもんなあ!」

え? 私がアーロンを瞬殺した…?

「ウソツクくん、その話、詳しく聞かせてくれる?」

「え? ああ、別にいいけどよ、自分のことなのに覚えてねえのか?」

私は首を縦に降ります。

「そつか、じゃあ説明してやるよ。あれは…。」

ウソツプくんが話してくれたのは私が沈んだ後の事でした‥。あの後、私は深海棲艦へと変貌していたらしいのです‥。しかも、アーロンを執拗に狙つて攻撃していたとか‥。

アーロンを倒した私は何をするでもなく海を見つめていたそうです‥。

そこに会えない筈の姉妹、金剛お姉様達が現れたのだそうです‥。

お姉様達はルフィ提督に私の戻し方を伝えると消えてしまつたといいます‥。

お姉様‥。榛名もお逢いしたかつたです‥。

そうして、今に至ると言ふことだつたそうでした‥。

「そうですか、そんなことが‥。」

「ああ！ありや凄かつたぞ！姉ちゃんのあの黒い奴スッゲエカツコ良かつたしよ！」  
提督、あれはそんないいものじやないんですよ？

と、それからあれこれ皆で話し合つていると、不意にナミが思い出したように口を開きました。

「いっけない!忘れるところだったわ、みんな、これ見て!」

そう言つてナミが数枚の紙を出します。

「ん?なんだこりや?手配書?」

ゾロさんがそれを持ち上げて言います。

すると、紙に目を通していくゾロさんの顔が青くなつていきます…。  
どうしたんでしょう…?

「なあなあ?何が書いてあんだ?」

「なんだ?おい、ゾロそれ貸せ」

「あ、ああ…。」

ゾロさんから紙を受けとり目を通していくサンジくん。

「ま、マジかよこりや…。」

見る間にサンジくんの顔も青くなつていきます。

「なになに？何が書いてあるの？私達にも見せてっぽい！」

「あ、ああ、ほら、見てみな…。」

サンジくんが皆に見えるように紙を掲げます。

私はそれを見ます。

そこには、提督の笑顔が写った手配書が…。

「えつと、なになに？モンキー・D・ルフィ、懸賞金、生死に関わらず、三千万ベリー！？」

ウソップくんが驚きの声をあげます。

「驚くのはまだ早いわ…。その後ろを見て」

そうナミが言うとサンジくんが一枚紙を捲つて奥の紙を見せてくれます。

「えつと…。ソロモン・ナイトメア・タ立、懸賞金、生死に関わらず三千五百万、生け捕りで八千万ベリーだと!?」

「わ、私、賞金首になつちやつたぽい!?」

驚くのも無理はありませんよね…。私だつて驚いていますから…。

「い、いや待て、まだあるぞ?えっと、これは?」

アクアマリン・D・ハルナ、懸賞金、生死に関わらず四千万ベリー、生け捕りで一億ベリーー!!なんだこれ!桁違いじゃねえか!どういうことだよこれ!」

「それだけ貴重な能力つて事だろ?にしても、八千万に一億か?:。こりやヤベえんじやねえか?」

確かに危ないです?:。このままゆつくりしてたら海軍の袋叩きにあつてしまふ

「そうね、もうのんびりイースト・ブルー<sup>東海</sup>にいる場合じやないわ?:。早くグランドライン<sup>偉大なる航路</sup>に向かつた方が良さそうね?:。」

確かにそうですね?:。あまり長居は出来ないかもしだせん?:。  
と、そんなことを考えていると前方にボロボロの船が見えました。  
私達はそれを避け、横を通りすぎます。

私達の元の世界で言うところの反航ですね。

すると、ボロ船はいきなり向きを変え私達の船に追い付いてきました。  
それを見て提督が言います。

「どつかの海賊にやられたのかな？軍艦のスクラップだ。」

「いかんな、海軍は。海にスクラップを棄てるとは…。」

「いや、あれどう見ても動いてるように見えるのは私だけっぽい？」

「いえ、夕立ちゃん、私にも動いているように見えるから安心して…。  
すると、向こうの船から人が現れると叫び出しました。

「スクラップじゃねえ！おめえらの目は節穴か！この鉄拳のフルボディを見忘れたか  
！」

「それはいつかの海上レストランでいきなり私達に砲撃してきたあの大尉だったのです。

提督も思い出したのかその人影に話します。

「ああ! いつかの海軍のおっさん! 遭難してんのか? 助けてやろうか?」  
それを聞いて向こうは拳を震わせています。

「ンググツ!! ふざけるな! ここで出会つたのが貴様らの運のツキだ! モンキー・D・ル  
フィ、ソロモン・ナイトメア・ユウダチ、アクアマリン・D・ハルナ! お前達を逮捕す  
る!」

もう、この人鬱陶しいですね:。

「提督、この船、沈めても構いませんか?」

「ん? ああ、いいぞ。やつちまえ!」

提督の許可はいたしました:。さて、それじやあ:。  
一暴レシマシヨウカ:!

「夕立ちやん、協力してちようだい」

「ぱい！榛名さんの頼みならなんだつてやるわ！」  
いい返事ね、じゃあ行きます！」

「アクア・クリエイション、マリンゴーレム！」

「風造『ストームモンスター暴風化物』」

すると、海面から巨大な水のゴーレムが…。

そして虚空からはこちらも巨大な風の巨人が…。

私達は互いに領き合い、叫びます。

『融合せよ！アルティメット・フュージョン！』  
究極合体

すると、水のゴーレムと風の巨人が互いに渦を巻きながら重なり合い始めます。  
やがて、二体は一人の巨大な女性へと姿を変えました。

『顕現せよ！私達の守護神！BIGセブン！ハイパーナガモン！』

そう、そこには、前世で艦隊の旗艦を勤めていた長門が立っていたのです。

『うつひよー!!スッゲエ!!カツケエなあーー!!』

「おいおい、なんだありや…。なんて凜々しくてお美しい♡」  
提督とウソップくんが目を輝かせて興奮している横で目をハートに代えてメロメロ  
になつてているサンジくんがいます。

『いつけえ!!ハイ。パーナガモン! そのボロ船を沈めちやつて! (てください!) BIGセ  
ブンストームバズーカ!!』

ハイ。パーナガモンは両手を構えある構えをとると、水と風の力が合わさった攻撃をボ  
ロ船に向けて放ちました。

スドドドドオオオ!!

「ひ、ひい! 逃げるぞ!」

『あ! 待つてください船長!!』

慌てて船から飛び降りる船員と船長…。

直後、船は粉微塵に吹き飛びました。

『これにて、一件落着!!』

私達が決めポーズをとつている後ろでナミが一人頭を抱えていました。

「なんなのよ、いつたい？。」

# 次なる島へ！ローグタウン上陸

s i d e ハルナ

こんにちは、ハルナです。

今私達はグランドライン手前の町、ローグタウンに来ているんです。

「うひょー！でつけえ町だなあ！」

「本当！こんな場所見るの久しぶりっぽい！」

「かつてはグランドラインへ向かう海賊達で賑わった町よ。必要な物はなんでも揃うわ」

「確かにこれだけ大きな町なら揃わないものは無さそうですね」

「よーし！これから始まる大冒険のために！オレは装備集めに行つてくる！」  
ウソツクくんは装備集めにいくんですね…。

「良い食材が手に入りそうだな。後良い女も♪」  
サンジくんは食材調達に向かうみたいですね。

「俺も買ってえモンがある…。」

ゾロさんの言葉にナミがすかさず反応します。

「あらあ、どうやつて？ 確か文無しよねえ？」

「……ナミ？」

「相変わらず守銭奴っぽい」

「いいじゃない！お金は大事なのよ！」  
開き直るところじやないと思うのだけれど…。

「おーし!俺は処刑台を見てくる!」

『んあ?』

「見に行くんだ!海賊王が処刑された場所を!」

そう言うとルフイ提督は走り去つてしましました。

「つて!おおお、おーい!集合場所まだ決めてねえぞ……!つたく、しそうがねえなあ…。」

「ルフイだから仕方ないっぽい」

「ユウダチちゃんの言う通りだな、早く慣れるしかねえよ」

「ふふつ、提督らしいですね」

「ハルナは相変わらずだな、おい…。」

なんだか今呆れられたような…解せません…。

「それじゃ、みんな、とりあえず用が済んだら船に集合で良いわね？それじゃ、解散！  
そうして私達は解散して動き始めました。

「ハルナさん、私、ハルナさんと行つてもいいっぽい？」

夕立ちゃんがそう言つてきます。

「ええ、それじゃあ一緒に回りましょーか」

「ほい！」

私達が移動しようとした時、声をかけられたんです。

「あ、おいハルナ、ちょっとといいか？」

「え？」

声をかけられて振り向くと声の主はゾロさんでした。

「どうかしましたか?」

すると、ゾロさんはばつが悪そうに頬を搔くと話始めました。：

「悪いんだけどよ、ちょっと、金貸してくれねえか?」

「え? お金ですか? 何か買いたい物でもあるんですか?」

「あ、ああ実は刀が買いたくてな…」

それを聞いた夕立ちゃんが口を挟みます。

「ああ、そういえばゾロ、鷹の目と戦ったときに刀一本とも折られちやつてたっぽいもん  
ね」

鷹の目…?

「ああ、それで流石に刀一本でグランドラインに入るわけにいかねえからここで一本、間に  
合わせでいいから調達しておきてえんだ」

なるほど、そう言うことでしたら断る理由はありませんね

「いいですよ、十万ベリーでいいですか？」

「い、いいのか？貸してもらつちまつて…」

「ゾロさんは三刀流の剣士なのでしょ？それが一本じや実力も出せないでしうし…。  
構いませんよ」

ただし、と私は付け加えて言います。

「あまりお金が減つているとナミに怪しまれます…。なのでなるべく安く仕入れてきて  
くださいね？」

そう言うと私は十万ベリーをゾロさんに渡します。

「ああ、助かつた。これは必ず返すからな」

そう言うとゾロさんは町の人混みに消えていきました。

「私達はどうするつぽい?」

「うん…そうね」

特に見たいものや欲しいものがある訳じやないんですよね…。

「とりあえず町の中を探索してみましようか、でもその前にやることをやらなきやね」

「ぽい? やること?」

「そう、やること。それじゃ、行きますよ」

「あ! 待ってよハルナさん!」

こうして私達は動き始めました。

—————

私達がやつて来たのは船着き場でした。

「こんなところで何するつぽい？」

夕立ちゃんが不思議そうに聞いてきます。

「まあ、見てて、『アクア・クリエイション！』

私は能力を発動させると水から変装用の服やグッズを作り出します。

「さて、これで変装してから町を探索しましょう」

「変装？どうして？」

「私達は今お尋ね者なんですよ？堂々と町の中を歩いたりしたら通報されて海軍が来てしまいます。」

「あ、そつか、言われてみれば確かにそうかも」

「ほら、分かつたら早く変装して行きましょう」

「はーい」

こうして私達は変装して名前を偽名に変えると町へと繰り出すのでした。

s i d e o u t

s i d e ルフイ

俺は処刑台に向かつてんだ！向かつてたんだけど……。

「あれー？ なあんで港に出ちまつてんだ？ なんでだ？」  
もしかして、道間違えたか？ お！ 彼処に誰かいる！

「ん？ おーい！」

俺は近くにいた男に声をかけてみる

「丁度よかつた、処刑台はどう行つたらいいのかな？」

「処刑台？」

「迷子になつちまつたんだ…。」

「見かけねえ顔だな？」

「ん？ ああ！ さつきこの島についたんだ！ でつけえ町だなあここは、フーシャ村とは大  
違ひだ」

そしたら道に迷つちまうとはツイテねえよなあ…。フーシャ村じや迷う事なんか無  
かつたのによ

「何故処刑台を探す？」

「見たいんだ！ 海賊王が死んだ場所を！」

「……！」

「どうしたんだ？ 急に黙つちまつたぞ？」

「……知らないの？ まあいいや」

俺が歩き出そうとした時だつた。

「待て、煙の行つた先だ！」

そう言うと男の吸つてるタバコの煙がある道の方へと飛んで行くのがみえた。

「おお！ あつちか、ありがとう！」

俺は煙を追いかけて走り出すのだつた。

今度こそ処刑台に行くんだ！ そんで海賊王が見た景色を俺も見るんだ！

s i d e ユウダチ

ヤツホーユウダチだよ？

あ、間違えたっぽい。今はチユつて名前なんだつた…。

今私達は変装して町の中を歩いてるの

「ねえ、ルナさん。これから何処に行くっぽい？」

するとルナさんは少し考え込んで…。

「そうね…せつかくだから服でも見に行きましょうか」

「了解っぽい」

そうして私達が動き出そうとした時、不意に声をかけられたの…。

「おお！美しいお嬢さん方！ボクとお茶でも如何ですか？」

その声に振り返るとそこには目をハートにしたサンジさんがいたつぽい…。

「サンジくん？」

「何してるつぽい？」

そう声をかけるとサンジさんは我に返ったように…。

「その声は姉さんと yuuu… か？」

「ストップ！それ以上は話さないで！」

私は慌ててサンジさんの口を塞いだ。

「ムグッ…!? んーんー!!」

「チユちゃん、離してあげて？それじゃあ呼吸もしづらいと思うから  
ルナさんに言われて私は渋々手を離す。

「んーんー!! プハツ! は、話は何となく分かつた。  
けど、なんで変装なんかしてんだ?」

「私達お尋ね者だから捕まらないためにつぽい」

「ああ、なるほどね…。それじゃあこうしよう俺がお嬢さん方を悪いやつらから守つて  
やるってのは?」

良い案かも知れないけど…。  
私はルナさんを見る…。

「そうね、その方が良いかもしねないわ…。」

それじゃあ、サンジさん。エスコートはお願ひ出来る?」

「ああ、任しとけ…! それじゃ、行こうかお譲さん方…。」

「ええ、お願ひね? クルクル眉毛くん」

「頼りにしてるっぽい！」

こうして私達はサンジさんと合流して町の探索をし始めるのだった。

# サンジV.Sカルメン！東の海一の料理人対決！

s i d e ハルナ

こんにちは、ルナです。

今私とチユちゃんはサンジくんの付き添いのもと、服を買いに来てるんです。

『まいどあり！』

「あー…！ いっぱい買っちゃつたっぽーい」

満足そうにチユちゃんが話します。

「そうですね、たまにはこういうのも悪くありませんね」

そう言う私も結構な量の服を買つたりしちやつてます。

「サンジさん待ちくたびれてないといいつぽいけど…。」

「早めに行きましょうか」

「ぽい！」

私達は急ぎ足でサンジくんの待つ場所へと向かいました。

――――――

待ち合わせ場所に着いてみるとそこにサンジくん姿はありませんでした。

「あれ? サンジさんいないっぽい」

「何処に行つてしまつたんでしょう…。」

辺りを見回して探していると、近くで聞き覚えのある声が…。

「おおおーここにいらつしやいましたか！ 我が愛しのマドモアゼルよ！」

そんな声が聞こえ振り向くとサンジくんが女性をナンパしているのが目に入りました。

「ねえ、ルナさん…。あれってサンジさんじやないっぽい？」

「ええ、間違いなくサンジくんね…。」

「どうするっぽい？」

様子を見てみていると好みのタイプではなかつたのか相手の女性から離れると気持ち悪くニヤついて鼻の下を伸ばしていました…。

「ええ、ルナさん…。これ、ルナさんも同じ気持ちっぽいよね？」

「ええ、チユちゃんきつと同じ気持ちだと思うわ…。」

『凄く話しかけたくない（っぽい）…。』

でも、話しかけないとどうしようもありませんから…。  
なら、ここは敢えてこうしてましょう！

「チユちゃん、サンジくんを少し困らせてあげましょう」

私がいたずらっぽく言うと、チユちゃんは悪い顔で頷きます。

「いいかも! サンジさんに悪夢、見せてあげる!」

二人して頷き合うと私達はサンジくんの所に近寄つて行きます。そして…。

「サンジくん、さつきのはいつたいどう言うことかしら?」

まず、私がサンジくんに詰め寄り問いかけます。

「え? あ、いや…これはその…。」

言い濶んだサンジくんにすかさずチユちゃんが追い詰めます

「私達バツチリ見てたんだから! あなたがナンパしてたところ!」

「うぐつ…」

さらに追い討ちをかけるように私が話します。

「酷いです！私達という者がありながら他の女に手を出すなんて！」

「うぐぐつ……！」

「これはナミにも報告つぽい」

「ちょっと…待つナミさんにもか!?」

「当然でしょ？」んなことしておいて許せると思う？」

「うぐぐぐぐつ……！」

もはやなにも言えなくなっているサンジくん。するとそこに…。

『ああああああ……』

私達の目の前の通りをルフィ提督が通りすぎていったのです。  
しかも空を…。

私達はその光景にしばらくなにも言えませんでした…。

「……何やつてんだあいつら」

ようやく口を開いたと思ったらそれはサンジくんの声でした。

「つて！今のルフィイじやなかつたっぽい!?」

我に返ったのかチユちゃんが叫びます。

「え、ええ…確かに提督でしたね」

「いつたい何があつたのよ！私ちよつと様子見てくるわ」

そう言うとチユちゃんはルフィ提督が消えた方向に走り去つて行きました。  
その場に残された私達…。しばらく無言が続いた後、私は言います。

「とりあえず行きましょうか」

「あ、ああ」

こうして私達はこの場を後にしました。

s i d e o u t

s i d e サンジ

俺達は今市場にむかっている。航海用の食材を買っておくためだ…。

「……」

「……」

き、気まずい…！何か話しかけられるようなこと無かつたか？  
俺がそんなことを考えていると不意に声をかけられた。

「見つけたよサンジ…。」

その声に俺は振り返る…。

「え？」

姉さんも俺が呼ばれたのが気になつたのか声のした方を向く。

振り向くとそこには派手な衣装を身に纏い薔薇：ではなくおたまを加えた女性が立つていた。

「十年間！」

なんだ？コイツ…。でも、美人だなあ！

するとすかさず姉さんが…。

「サンジくん…。」

おつと、あぶないあぶない…。さつきの二の舞はごめんだ…。

「アンタ誰だ？俺を探してたつて言つてたけど」

「彼女の名はカルメン！」

「東の海イースト・ブルー一の料理人！」

すると今度は女性の後ろから変な顔の奴らが出てきやがった…。  
 なんだ？あいつら…。顔の面積がやたらデカイ奴に目が異様にデカイ奴までいやが  
 る。

「情熱の女！人は炎のカルメンと呼ぶ…」

『オーレ!!』

終いには全員揃つて決めポーズ取り出したぞ…。

俺が何も言えないと横から姉さんが耳打ちしてくる。

『サンジくんの知り合い？』

『いや、全く知らない奴らだ…。』

『でも、あの真ん中の人あなたを知ってるみたいだつたけど…』

そこが謎なんだよなあ…。顔を覚えられるようなことあつたつけか?  
俺が考え込んでいると目の前の三人は勝手に喋りだした。

「そして私はカルメン様の一番弟子レオ!」

「僕は二番弟子のホセ!」

「つて!あの目玉っぽいとこ全部鼻かよ!!

「それで?ボクに何の用ですか?あなたとはお会いした記憶g 「ホセ!・レオ!!」

急に声を被せられ遮られた…。

「説明おし…。」

「ハツ!」

そう言うと顔面男がピールを差し出してきた。上には何かが乗っている…。

「見られよ!」

言われて乗っている物を手に取つてみてみる。これは…。

「ドイツもコイツもコツクばかりじやねえか」

「どんなものなんですか？あら、本当だわ…。」

「イースト！」

いきなり顔面鼻でか男が唾を飛ばしながら割り込んできた。  
きつたねえな…。

「そいつらはイースト・ブルーの中でも評判の腕利きばかり！揃いも揃つてカルメン様と勝負して散つてつたのだ！」

「そう！あたしはイースト・ブルーのナンバーワンコック

勝負するコツク達はドイツもコイツ物足りない腰抜けばかり…。もうこのイースト・ブルーにあたしの敵は居ないと思つていた…が!!」

「それは海上レストランバラティエにいた頃の特集記事だつた。あのコツクはその服料理長こそがイースト・ブルーのコツクだと言いおつた！あたしらには及びもつかない程の名コツクだと、抜かしおつたのだ！」

それ以来、あたしはお前を探し続けてきた。イースト・ブルーを隅から隅まで…。十年間も!!」

「ホントは十日間だけどね」

「カルメン様は物事を大袈裟に言うのがお好きなのだ」

「十年と十日間は流石に大袈裟すぎじゃないですか…？」

「余計なことを言わんでもいいわ!!」

「フライパンで殴られてるな…。」

「痛そう…。」

「姉さんは相変わらず優しいね…。」

「あたしと勝負おし！サンジ！」

今日の午後一時市場の料理コンテスト海上に来るのだ！そこで必ず、あたしはお前を倒して見せる！よいな！」

オーホツホツホツホツホホホホホホ！オーホツホツホ！』

そう言いながらつむじ風のように消えていつた…かに見えたが…。

「ホホアヒヤヘハ…。」

回りすぎて目え回してんじやねえか…。

「おつとー！それではまた、後程会おう！」

倒れるカルメンさんを顔面男と鼻でか男が抱き抱えその場を後にしていった。

「なんだつたんだ？あいつら…。」

「サンジくん、あの人の言っていた料理コンテストに出場するの？」  
姉さんがそう聞いてくる。

「いや、そんなもん興味ねえよ、それより早く市場に向かおうぜ」

「いいのかしら…。」

こうして俺達は市場へと向かつた。

――――――

市場にやつて来た俺達…。

「おおーー！へえ！流石ローグタウンだな。質も種類も他とは比べ物にならねえ」

「確かに凄く品揃えが豊富ね、これじゃ選べませんね」

姉さんも驚いてるみてえだ…。

手始めに近くの魚から見てみる。

「こりや最高だ！」

それを聞いていた市場の主人が話しかけてきた。

「あんちやん目が効くね！ソイツは今朝上がつたばかりの近海ものよ！」

「近海もの？」

「なんですか？それは確かに見たことない魚ですけど…。」

俺は一匹取り出して見てみる。

「確かにコイツは身も締まつて新鮮だがこんな魚俺も見たことねえぞ…。ホントに  
イースト・ブルーで捕れたのか？」

「ほう、アンちやんホントに詳しいな。  
お察しの通り、コイツは本来<sup>ウエスト・ブルー</sup>の海でしか捕れねえ魚だイースト・ブルーの人間が知  
らねえのも無理はねえ」

「ウエスト・ブルー? なんでそれが近海ものなんだ?」

「……グランドラインの海流、ですね?」

「おお、姉ちゃん良く分かつたな、そう! このローグタウンはグランドラインの海流に  
乗つて他の海の魚が紛れ込んでくるのさ……じゃ良くあることなんだぜ?」  
「へえ、そんなことがあるのか?」

『おおー!』

なんだ? 人だかりが出来てんじやねえか?」

「お? なんか上がつたみてえだな行つてみつかあんちやんに姉ちゃん」

「あ、ああ」

「行きましょう、サンジくん」

姉さんに連れられて俺は人混みに呑まれるのであつた。

s i d e o u t

s i d e ハルナ

「ごめんなさい、ちょっと失礼しますね‥。」

人混みを搔き分けその原因を突き止めようと中央に来てみると、そこには象のような牙に鼻、それに耳のようなヒレを持つた大きな魚が上がっていました。

「すっげえ！そりやエレファントホンマグロじゃねえか！」

エレファントホンマグロ？象鮪つてことですか？

「おうよ！南海の方から紛れ込んで来たんだろうが、そこを俺が一本釣りよ！」

一本釣りつてよく釣り上げられましたね。あの魚、結構な大きさですよ？

「エレファントホンマグロ‥。あ‥‥」

そんな呟きが聞こえたので見てみると  
サンジくんが惚けたようにエレファントホンマグロを見ていたんです…。

「サンジくん…?」

「……オール・ブルー」

「サンジくん? 大丈夫?」

私の声が聞こえてないのでしようか…。

私がサンジくんを気にしているとエレファントホンマグロは何処かに運ばれようと  
していました。

そこで我に返つたサンジくんが漁師の一人に声をかけました。

「ちょ、ちょっと待つてくれ! コイツは幾らだ?俺に売つてくれ!」

「なにい?」

「金ならあるぞ！コイツを俺に譲ってくれ！頼む！」

「サンジくん…？いつたいどうしちやつたの？」

私はサンジくんの豹変ぶりについていけません…。

「駄目駄目、コイツは売りもんじやねえ、たつた今商品になることが決まつたんだ。悪いがな」

「商品、ということは…。」

「そう、姉ちゃんのお察しの通り。今日、これから年に一度の料理コンテストが始まるのさ。そのコンテストにはイースト・ブルー中のコツクが集まる。コイツはコンテストの優勝者に与えられるのさ」

「なんたつてエレファントホンマグロだからな。

これこそチャンピオンにふさわしいってんで今そう決まつたんだ！」  
確かにあの大きさの魚なら商品になつてもおかしくは無いですね…。

良く分かりませんがとても珍しい魚のようですし…。

「どうしても欲しいなら出場すればいいさ。あんちゃんもコツクなんだろ?」

「え? ああ…。」

「向こうで受付してつからよ、もし用事があるんだつたら手続きしてきな。急がねえと  
もうすぐ締め切りだぞあんちゃん、その姉ちゃんにいいとこ見せるためにも頑張れよ  
! じやあな!」

優しい人でしたね。何から何まで教えてくれて…。

それにもさつきのサンジくんの慌て様…。

そんなにあの魚が欲しかったんですね。

よし! ここは私も可愛い弟くんの為に一肌脱いであげましょう!

榛名! 全力で参加します!

サンジくんに气取られぬよう私は受付をしにいくのでした。

――――――

時は少し進みコンテスト開始直前…。  
実況の声が聞こえています。

『さあ！やつてきやました！年に一度の祭典！

料理コンテスト！イースト・ブルーに名高いコツク達が結集でい！今年の商品はエレ  
ファントホンマグロ！

海の宝奇跡の食材！エレファントホンマグロを手に入れイースト・ブルーの栄冠を  
手にいれるのかいってえ！誰だ！』

まさかあの人人が実況者だつたなんて驚きました…。  
でもそれよりも驚いているのは恐らくこの人でしょうね。

「なんで姉さんがこのコンテストに出場してんだよ！」

「なんでつて出てみたかったからに決まってるでしょ？」

「出てみたいつて姉さんコツクじやねえだろ！」

「あら、知らなかつた? 私、少しだけどコックの経験あるのよ? だから料理の腕には自信があるの」

轟沈する前限定ですけどね…。

「へ? そうなのか?」

「ええ、だから、お互い頑張りましようねサンジくん」  
するとサンジくんの顔つきがキッと引き締まります。

「ああ、例え姉さんが相手でも負けねえからな」

その答えに私は満足して頷き、サンジくんの頭を撫でるのでした。

その後にサンジくんがカルメンさんに絡まれていましたけどスルーしていました。  
さて、何を作りましょうか?:。

――――――

コンテストが始まる直前の事です。

「おーい！サンジにハルナアア！！」

「お姉ちゃん!!」

あれは、ナミとウソップくんね？

私は二人のところに歩み寄ります。

サンジくんも二人に気づいてこつちにきました。

「あら、どうしたの？ナミ」

「どうしたのじやないわよ…どうしてもお姉ちゃんがそこにいるの？」

「しつかしなんでまたこんな大会になんか出てんだよ」

「どうしてと言われても出たいから出場したってだけよ？」

「ナミセーン! 応援に来てくれたの!!」

サンジくん…。すごいタイミングできましたね。

「別に? 通りかかつただけ。それにしたつてお姉ちゃんの料理の腕は知ってるけどよく出場出来たわね」

「ええ、なんだか簡単にいれてもらえたわ」

「俺も驚きましたよ、まさか控え室に入つたら姉さんが待ち構えてるんですから…。」

「オレを無視すんな!!」

「おお、ウソツク、居たのか」

「まあまあ、もう始まるわ行くわよサンジくん」

「おうよ、姉さん」

「頑張つてー!!二人ともー!!」

「優勝しろよー!!」

二人の激励を背に私達は戻つていくのでした。

――――――

『さあ！いよいよ開幕だい！！

審査員はご覧の方々！

尚、審査の公平を期すため！

一般の方から仕事で来ているというヨシノサブロウさんとシグレちゃんにも来て  
ただいてやす!!

サブさん！シグレちゃん！準備はいいですか!!』

「はーい、頑張って審査させてもらうよ…。ね、おとつあん」

「いや時雨クン? どうしてそんなにやる気なのか聞かせてもらえる? 自分達今それどころじゃないんだけど…?」

あの子…。時雨ちゃん…? どうしてこっちの世界に…。

それにの人…もしかして…。

『ルールは簡単まず一人ずつ対決して

それぞれの審査員の合計点が多い方の勝ち!

これで最後まで勝ち残った者こそが!

栄えあるイースト・ブルーナンバーワンコックってえ訳だ! じゃあ早速1回戦!  
まずははるか東の果てより参加の!

トカゲのシュウタイ!

対するは! このローグタウン代表! エツコイデ!  
じやあ用意! スタート!!

【カーンッ!!】

始まりましたね。料理対決が…。

それからしばらく時は進み…。

『さあ！準決勝だ！』

『ウオオオオツ!!』

すごい大歓声ですね…。

『ずば抜けたセンスと技で危なげなく勝ち上つてきたサンジ！  
華麗な舞と技で他を圧倒し続けてきたカルメン！

決勝に進むのは果たしてどちらだ！！

注目の準決勝スタート!!』

始まりましたね、カルメンさんとサンジくんの対決が…。  
それよりも気になるのは…。

「ねえ、提督。この勝負どっちが勝つと思う…？」

「そうだねえ…。二人の料理は多分あのサンジって人なんじやないかな?」

「じゃあ賭けしない? 負けた方はギャラクシー一気飲みつて言うのはどうかな?」

「いやそれじゃただの罰ゲームだとテイトク思うんだけど…。」

「それじゃあひやしあめにしておく?」

「種類変えただけだよね!? 趣旨はまつたく変わつてないよね!?」

……審査中に何をしてるんでしょう…。

つて、そんなことしてる間に終わつたみたいですね。

『さあ! いよいよサンジが

最後の仕上げにかかつたようだ!

カルメンの方もおおずめ!

あとは盛り付けるだけのようだ!

いよいよクライマックス！

いつたい決勝に進むのはどつちだ!!  
決着の時はまもなく……だつ!!』

『ウオオオオツ!!!』

『サンジ選手完成だ！

さあ！そしてカルメン選手！

こつちも出来上がつたようだ！

……出揃つた!! 果たして！栄冠はどつちの手に!!』

――――――

「それでは発表します…。今回の勝負、勝者は…。

サンジ選手!』

『おおー!! サンジ選手、

カルメン選手を打ち破り決勝進出だ!

待ち構えているのはことごとく審査員を泣かせてきた女将! ルナ! 果たしてエレファンントホンマグロを手にするのはどっちだ!!』

ついに勝ち上ががつて来ましたね、サンジくん…。  
やるからには全力で相手してあげます!  
さて、あつちの方は…。

「あーあ…。負けちゃったボクが飲むのか…ま、負けちゃったし仕方ないよね」

「いや、それはそうだけどね時雨クン…。その前にどうにかこの現状をどうにかする方法を考えないとならないのを忘れてない…?」

あの二人には後で個別で接触してみましょうか…。一応夕立ちやんも誘つて…。

—————

『さあ！いよいよ決勝だ!!

ズば抜けたセンスと技でカルメンすら倒したサンジ！

対するは！包み込むような愛情と優しい味で幾人もの審査員を泣き落としてきたルナ！

栄光のエレファントホンマグロを手にするのはどっちなのか!!

大注目の決勝戦！スタート!!』

さあ、いきます！

鳳翔さんや間宮さん直伝の料理の腕、見せてあげます！

『出たあー!! 目にも止まらぬ早業で調理していくルナの料理法！あまりの早業に対戦相手は多いにペースを崩されるんだが！サンジの場合はどうでい!!』

「……」

『乱れない!! まったく自分のペースで黙々と調理をしていくサンジ選手！』

やつぱりサンジくんは一筋縄ではいかなさそうね…。

でも、負けません！金剛型四姉妹の三番艦として負けるわけにはいきません！

一方のヨシノ、シグレペア…。

「ねえ、提督、あのルナつて人…。見覚えない?」

「時雨クンもそう思うかい? 実は自分も思つてたんだよね…。何か引っ掛かるんだけど…」

「こう、喉のところまで出かかっててなかなか出でこない感じだよね…。」

「そう、まさにそんな感じなんだよ…。 いつたいどうしてなのか分からぬんだけど  
…。」

「もしかしたら艦娘だつたりして…。」

「いや、それはないと思うよ時雨クン。ここはあの深海棲艦の姿が一つもない…。おまけに海賊が闊歩しているような世界だ、艦娘はあり得ないとと思うよ…。」

「そうかな？なんなくそんな気がしてるんだけど…。」

「まあ、今は料理が出てくるのを待つしかないからねえ…。  
それにしてもお腹が…。」

「美味しいけれど沢山は食べられないよね…。」  
などと話し合っていた。

『さあ、いよいよサンジが

最後の仕上げにかかったようだ!!!

ルナの方は……おおつと！もう完成間近のようだぞ！！  
早い！早すぎるぞ謎の料理人ルナ！！

いよいよクライマックス！！

果たしてエレファントホンマグロはどつちの手に!!  
決着の時はまもなく……だ!!』

『決まつたあああ!!

サンジ選手完成だ!

さあ、そしてルナ選手はおおつと先程より豪華になつて完成している!!』  
『出揃つたああ！果たして勝利の女神はとつちに微笑むのか！』

『ウオオオオツ!!』

――――――

審査員の食べ比べが終わり結果発表…。

「それでは発表します…。

今年の料理コンテスト、優勝者は……ルナ選手!』

『優勝！ルナーーーせんーしゅー!!』

『ウオオオオオオオオツ!!』

こうして料理コンテストは私の優勝で幕を下ろしたのでした。

――――――

「サンジくん」

コンテストが終わり私はサンジくんに声をかけます。

「おお、姉さん優勝おめでとう」

「ええ、ありがとうございます。それでね、はい、受け取つて」

私は先程受け取つたエレファントホンマグロをサンジくんに渡します。

「……なんで俺に渡すんだ? 姉さんが欲しかったんじや…。」

「そんなわけないじやないあなたにあげようと思つて頑張つたのよ? 結果的に競い会う結果になつちゃつたけれどね」

「…! それじゃあこれは全部俺のためだつたつてのか…?」

サンジくんの問いに私は首を縊に降ります。

「あなたと料理対決を出来てよかつた。とても楽しかつたわ…。またやりましょうね」

「つ! ああ! 次はぜつてえ負けねえぞ!」

泣き顔を必死に堪えながら言うサンジくんを私は抱き締めます。  
大丈夫、あなたはまだまだ伸びますよ…。

頑張つて、応援しています…。

私はしばらくサンジくんを抱き締めるのでした…。

# 接触！別世界からの訪問者！

s i d e ハルナ

こんにちは、ルナです。

サンジくんにエレファントホンマグロを渡した私は人を探すため、メインストリートを歩いていました。

「あの二人はどこに行つたのでしょうか…。」

まだそこまで時間は経っていないですし、そう遠くまで行つているとは思えないですが…。

それとも二人を見つけるより先にチユちゃんと合流するべきかしら？

どちらにしても止まっているわけにはいかないですね。

先に見つけた方を優先していきましょうか…。

私はそう方針を決めると歩き出しました。

s i d e o u t

s i d e 時雨

コンテストが終わり、僕達は町の中を歩いていた。

「コンテスト終わっちゃったね？提督、これからどうするの？」

「とりあえず状況把握が最優先かな？自分達の今の状況がまつたく把握出来てないから」

「今分かつてる事といえばこの町がローグタウンと言う名前だということだけだもんね」

「そういうこと、だから出来る限り情報収集をしておきたいと自分は思つてるけど時雨クンはどうかな？」

「僕もそれで構わないよ、提督の方針に従うだけだからね」

「……いつも苦労をかけるねえ」

「それは言わない約束だよ？おとつつかん……!?」

と、そんな漫才をしていると僕の目に信じられないものが写り込んできた。

『まいどー!』

「（バ）ちそぅさん!」

「（バ）ちそぅさまつぽい！」

「……くあ」

それはある三人が食事処から出てきた時だった。

「あーうまかった！」

「一時はどうなることかと思つたぞ…。」

「優しい人がいてくれて助かつたわ…。あの人がいなかつたら私達今頃…。そう言いながら三人は僕達の横を通りすぎて行つたんだ…。僕は振り返つて三人の内の一人の少女を見る。

「ゆう…だち…？」

その後ろ姿は間違いなく夕立のものだつた…。

s i d e o u t

s i d e ヨシノ

先程から時雨クンの様子がおかしい…。

「…？時雨クン？どうかしたのかい？」

そう訪ねると時雨君は我に返つたのか、訳を話してくれた。

「あ、うん、実はね…」

それはポイヌにそつくりの火とを見かけたと言つものだつた。

「なるほど、あのポイヌを見かけたと…。それは間違ひなく夕立クンだつたのかな？」  
自分の言葉に時雨君は大きく頷いた。

「間違ひないとと思う、あんな口調してゐる子なんて早々いなから」

まあ、確かにあんな個性的な口調してゐる人はそういなかもねえ…。

「ううん…じやあ情報を集めつつそつちも探してみるとしようか」

「うん、ありがとうね提督」

これで当面の方針が決まつた。

動きだしかけたその直後の事だつた…。

「あの…ヨシノさんとシグレさんでしようか？」

「え？」

不意に声をかけられ振り向くと。

そこにはコンテストに出場していた人物が立っていた。  
時雨君が思い出したように話しかける。

「僕が時雨だけど…。

あ、あなた確かコンテストに出ていたルナさん…だよね？」

「ええ、『今は』ルナです。でもこれ実は偽名なんです」

ん？今とんでもないことをさらつと抜かさなかつた？この人…。

「偽名つてどう言うこと？」

「そうですね、直ぐ分かりますから少し待ってくださいね？『アクア・ボール・バリエー

ション』

目の前の女性がそう言うと、何処からともなく水が彼女へと集まつていく…。やがて水は彼女を包みこむと一つの球体へと変化した。

その球体の中を見てみると彼女の姿が先程とは打つて変わり、球体から出てきた時は自分達がよく知る戦艦榛名がその場に立っていた。

変化を終えた彼女はにこやかに話始める。

「改めまして、金剛型三番艦、榛名です。よろしくお願ひ致します」

その変わりように自分はしばらく思考が追い付いてこないのだつた…。

s i d e o u t

s i d e ハルナ

「えっと…榛名君…でいいんだよね？今はいつたい…。」

「水に包まれたら姿が変わった…。どういうこと？」

「一人とも信じられないって顔してますね…。」

「今のは私の悪魔の実の能力ですよ、水を使って変装していたんですね」

「あ、悪魔の実…？」

「え？…これって現実だよね…？もしかして夢だったりするのかな？」

「理解できないのも無理はありませんよね…。」

「私もこの世界にきたばかりの頃は信じられませんでしたし…。」

「とりあえず、変装していたということは分かったよ。それで榛名君は自分達に何の用かな？」

「やはり聞いてきましたね…。」

「少し、確認したいことがありますて」

「確認したいこと？僕達に？」

小首を傾げながら言う時雨さんに私は頷いて答えます。

「ええ、まずはヨシノさんあなたに確認です。あなたはあの大阪鎮守府の吉野三郎大佐で間違いありませんか？」

するとヨシノさんの表情に警戒の色が浮かび上がつてきました。

「……どうしてそれを君が知っているのかな？」

「私もこっちに来る前はそちらの世界にいましたから

大阪鎮守府の吉野三郎大佐、大本營から戦力（意味多数）をごつそりと引き抜き類い希なジュウコン提督だと…」

「待つて!! それの殆どが自分の意思関係なく進んじやつてるものだから勘違いしないで

!!」

もう周知の事実なんですからそんなに慌てなくてもいいと思いますけど…。

「時雨さんのことも聞いていますよ、艦装を使わずに接近戦で戦う駆逐艦だと」

「そこまで知られちゃってたんだね…。」

「その二人がどうしてこの世界に来ているのかを確認したかつたんです。単刀直入に聞きますが、お二人はどうやってこの世界にいらつしやったのですか？」

そう聞くと二人は顔を見合わせた後、口を開いた。

「実はね…。」

そう言つて吉野さんが話して内容はとんでもないものでした。

「……なるほど、出撃祝いの祝勝会中に防空棲姫こと朔夜さんが謎の地獄飲料を編み出してそれを飲まされたお二人が気がついたらこっちに來ていたと…。」

私の言葉に頷く吉野さんと時雨さん…。

防空棲姫を味方に付けているのにもおどろかされましたが、まさかそんな方法でこちらに来るとは思いませんでした…。

「話は分かりました。そういうことでしたら榛名も協力致しましょ  
う話を聞いてしまつた以上放つてはおけませんしね……」

「え？ それはありがたいけど良いの？ あなただけつて都合があるんじやない？」

「大丈夫ですよ、困つた時こそ助け合いですから」

「…ありがとうございます、それじゃあ力を貸してもらえるかな？ 榛名君」

「はい！ 榛名にお任せください！」

「でも、私だけだと少し心許ないのでもう一人協力者を呼びますね」

私はそう言うと夕立ちゃんに向けて無線を飛ばすのでした。

――――――

無線を飛ばして十分程経ち…。

「ハルナさんお待たせつぽい！」

夕立ちゃんが走つてきました。

「来てくれてありがとう夕立ちゃん。早速で悪いんだけどこの人達を元の世界に返すのに協力してほしいの」

「ぽい？この人達…？え…」

「あ…」

そこで時雨さんと夕立ちゃんの目が合いました。

「…時雨？」

「…夕立？どうしてここに…？」

二人はお互に信じられないものを見たような顔のまま止まつてしましました…。

これじゃあ話が進みませんね。

「二人とも感動の再会は後にして話し合いをしますよ」

「え？ う、 うん」

「はーい」

「果たしてこんな再開？ でいいのだろうか…。」

大丈夫ですよ、きつと…。

こうして話し合いが始まりました。

「まず、どうやつて向こうの世界に送り返すかと言うことですね」

「夕立ちyan、それだと一度沈めないとならなくなりますから却下です。」

「夕立ちyan、それだと一度沈めないとならなくなりますから却下です。」

「良かった、帰るために沈められるなんて嫌だつたからね」

「いやそれ以前にその前提でいくと自分殺されちゃうから!!」

「こんなのはどうかな？僕達が来たときと同じ手を使うっていうのは」

「それ結局死ぬよね？第二の人生まつしぐらだよ!?」

「でもそのくらいしか方法がありませんし…。」

「なら、せめて殺されない前提で考えようか…。」

「良い案があれば良いっぽいけど…。」

吉野さんの提案でしばらく話し合いが続いた結果、最終的に決まつた方法はとてもあり得ないものでした。

――――――

船着き場に移動した私達は船が停まつていない場所にやつてきました。

「それじやあいきますよ？『アクア・クリエイション』」

私は能力を発動させ、大砲のようなものを作り出します。

「ねえ…これ本気でやるの？下手したら、いや下手しなくても死ぬよね？これ…。」

「大丈夫だよ提督。そのときは僕も一緒さ」

「ああ…。もうなんだか全てがどうでもよくなつてきた…。」

フラフラと大砲の砲口に入り込む吉野さん。

それに続いて時雨さんが吉野さんの隣に入りました。

「それじやあいきます！3、2、1、榛名！全力で参ります！」

私はあらんかぎりの力で大砲を撃ち放ちます。

「～～～～～！」

撃ち出された二人は光速を越える速度で飛んでいきすぐに見えなくなりました。

「夕立ちゃん、電探に反応は？」

「ん～…。ないわ、成功っぽい」

私はその言葉を聞いて胸を撫で降ろしました…。

「良かった…。それじゃあ戻りましょうかみんなが心配しているわ」

「ぽい！」

こうして二人との別れを告げ私達は町の方へと戻つていくのでした。

この時の私達にルフィイ提督がピンチに陥っているということなど知るよしもないのでした…。

# 絶体絶命のルフィを救え！戦艦棲姫再臨！

s i d e ハルナ

こんにちはハルナです。

私達は再び変装して街の中を歩いています。けど、何か妙な雰囲気になつていてるんで  
す。

街の雰囲気や風に違和感を感じるんです。

なんだか一荒れ来そうな……。

「なんだか嫌な感じっぽい…さつきまでそんなことなかつたのに…」

どうやらユウダチちゃんも違和感を感じているみたいですね。

すると前の通りを人が群れを成して走つていきます。こんなことを叫びながら……。

「海賊だああ！逃げろおおお!!道化のバギーだああ！」

バギーですって!? バギーって確か……。

『アクア・トルネード!』

『ゴババボボボツ!!』

『ルブイくん 後はどうぞ』

「ああ、んじや！ ぶつとベバギー！ ゴムゴムの……バズーカアアアツ！！！」

· · · · · 回想終了 · · · · ·

つて私と提督に吹っ飛ばされていつた人ですよね？  
こんなところで飛ばされていたんでしょうか……。

「処刑だ！ 処刑が始まる！ 道化のバギーが麦わらのルフィを処刑するぞ！」

「ルフィイが処刑つぽい!? なんでそんなことになつてゐるのよ!」  
ユウダチちゃんも同じく驚いています。

私達が場の状況をよく掴めないとそこに……。

「あ! お姉ちゃんとユウダチじやない! やつと見つけた」

「おいヤツベえぞつ! ルフィイがバギーに処刑されちまう!」

そう声をかけてきたのはナミとウソップくんでした。

「ナミ、ウソップくん。ええ、今聞いたわそれに妙な風が吹いているもの……」

「! そうなの、嵐が近づいてるの! 急いで船をを確保しておかないと、いざ逃げる時に流されちゃうわ!」

なるほど、それで港の方に走つてたんですね。恐らくサンジさんとゾロさんは提督を助けに処刑台に向かっているんでしょう。

そう結論付けて、私はユウダチちゃんに指示を出します。

「ユウダチちゃん、あなたはナミと一緒に船に戻っていて何かあつた時戦える人がいた方が心強いから」

「はい！でも、ハルナさんはどうするの？」

私がどうするか？そんなの決まっています！

「私は提督を助けに処刑台に向かうわ」

「……了解っぽい、ぜつたいルフィを助けてきてね！」

「ええ、必ず……」

「それじゃあ先に船に戻ってるわね！お姉ちゃん達も早く戻ってきて！」

「き、気をつけろよ！じやあな！」

そう言つて走り去る三人。

私は三人に背を向け処刑台の方面に向かい歩き出しました。

内側から湧き上がる黒い感情に身を委ねて……。

side out

sideルフイ

オレは今、処刑台の上で拘束されちまつて身動きがとれねえでいる……。オレの横ではバギーの奴が高笑いしてオレを見下ろしている。

下でゾロとサンジがオレを助けようとしてくれてるみてえだけどもう無理かもな。オレは覚悟を決め、仲間たちの名を力の限り叫ぶ。

「ゾロ！サンジ！ウソツク！ナミ！ユウダチ！それに姉ちゃん！  
悪いい、オレ、死んだ」

せめて最後は笑つて死んでやろうそう思い笑つた時。  
何かが飛んできて、オレの近くで爆発が起こつた。

「ウギヤアアアアアアアアアアツツ！」

バギーの悲鳴と共にオレの拘束が爆風と一緒に解け。処刑台から放り出された。

「のわつとつとつと…なんだあ？…！」

なんとか着地し、何かの飛んできた方向を見ると広場に続く大きな通りにデツケ工黒いナニカを傍に侍らせた黒い髪に死人みてえな肌に血のように赤い瞳をした女が立つていた

# ロストアイランド編

モクモクVSミズミズ！勝利の女神はどちらに微笑む？

sideルフィ

『グオオオオオオオオオオオオ!!』

黒いナニカが方向を上げた直後、強い雨が降り出した。

それと同時に海兵の群れが一斉に押し寄せてきた！

海兵と海賊共がぶつかりだす。

「うつひよおつ！アレ前に見たことあるぞ！スッゲエ！」

広場に突く大きな通りに立つ黒いナニカとその前に立つ白い女を見てオレはワクワクしちまつた！

すると襟辺りを掴まれた。ゾロだ。

「おいルフィ！」

「わあわあわあッ！ゾロ」

「ワクワクしてゐる場合じやねえ。逃げるんだ」

「早く船に戻らねえと二度と島から出られなくなる。グランドラインに入れなくなるぞ！」

「ナニイツ！そりや大変だあッ！」

「その前に姉さんを回収しねえとな」

「あり？ そう言えば姉ちゃんどこにいるんだ？」

「あの白い女がそなへんだよ！バカ！」

「ナニイツ！あれ姉ちゃんなんのか!?」

姉ちゃん変身できんのか！スッゲエ!!  
 つて、そんなことしてる場合じやなかつたんだ！早く戻らねえと！  
 オレ達は急いで走りだし、白い女の方に向かつた。

「・・・ヨウヤク来タカ」

「ああ！姉ちゃん！船に戻つて出港だ！」

「フツ・・・分カツタ、少シ待テ」

そう言うと姉ちゃんの身体が淡く光り出した。

「な、なんだあ!?」

『何が起こつてる！』

オレ達が驚く間に姉ちゃんの光は消えて元の姿に戻つていた。

「お待たせしました。さあ、行きましょう！」

姉ちゃんのその言葉でオレ達は港の方に走り出すのだった。

s i d e o u t

s i d e ユウダチ

ヤツホー。ユウダチだよ！

私達は急いで船に戻つて来てたの、そしたらもう先客がいたっぽい。

「きさまら何してる！」

ウソツプも氣づいて叫んでるわね。

その先客はと、いうと……。

頭に変な被り物を被つたおっさんと大きなライオンだつたっぽい。

「モージ！」

ナミが驚いてる。知り合いなの？

モージと呼ばれたおっさんは立ち上がると此方を向き喋りだした。

「フフフツおまえかコソ泥女。いけ！リツチー！！  
『グウツワオウツ!!』

変な髪形のライオンが私達に飛びかかるつてくる。  
いい度胸じゃない！

「返り討ちよ！『突風 旋風 大嵐！』

私は自身に風を纏わせると風の勢いをなん十倍にも強めて撃ち出す。

「グオツ!?」

「ヌアツ!!」

何かを言い終える間もなく突風に巻き込まれたライオンとおっさんはどこかに吹つ  
飛んでいつたわ。

「今のおちよ！ナミ！ウソツプ」

「え？あ、ああ！」

「そうね！ありがとうユウダチ！」

そう言つて慌てて船に乗り込むナミとウソップ。

二人が乗り込んだのを確認して私が船に乗り込もうとした時だつたつぽい。チュインツ！

私の横を銃弾が通り過ぎていったの。

「一斉射撃よーい!!」

背後から廃兵の声が聞こえてくる。

「海軍！？」

「や、やつべえ！ユウダチ！早くしろ！」

そんなの分かつてるつぽい！でもその前に！

「船に傷つけないでくれる！『風魔 大玉螺旋連弾』！」

螺旋弾をさらに強化したものを海兵たちに向かつて撃ち放つ。

『うわあああああッ!!』

吹き飛んで行く海兵たち。

よし！成功っぽい！

私はそれを見てすぐに船に乗り込んだ。

s i d e o u t

s i d e ハルナ

私達は今港に続く道を走っています。

「どつちだ！海は！」

「雨が酷くて方角がよく分かんねえぞ！」

「この道を真っ直ぐです！急いで！」

すぐ後ろからは海兵の群れが押し寄せてきています。

『いたぞお！捕まえろ！』

かなりの数ですね……。

「しつこい奴らだ！止まつて戦うか？』

「そんな時間はねえよ。ん？」

「？どうかしたの？サンジくん」

「いや、姉さんあれ見てくれよ」

「？…！あれは」

サンジくんの目線を追つてみると前方に一つの人影が。  
よく見ると小柄な女性の用です。

「だあれだ！あのレディ！」

サンジくん：ここに来ていつもの病氣ですか？

「あなたがロロノア・ゾロ海賊だつたなんて… 私を、私を騙したんですね！」

「なにいつ！おまえ！彼女に何をした！」

「サンジくん？ ちょっと黙つていて」

私はサンジくんを黙らせると様子を見守ります。

「お前が俺の名を聞かなかつただけだ。騙したわけじやねえ」

「あなたみたいな悪党が名高い刀を持つて いるなんて許されません！ 名刀『和道一文字』  
回収し m 「『アクア・ボール ウオーターシエル』 かつはつ… !?」

私の攻撃で壁に叩きつけられる女性剣士さん。

私はそれを見て冷たく言い放ちます。

「あなたの戯言に付き合つていられるほど私達に余裕はないんです。邪魔をしないでく  
ださい」

「な…ん…で…」

女性剣士さんはそれだけ言うと氣絶してしまいました。

「さあ、早く行きましょう」

私が三人に声をかけると三人は若干引いたような顔をしながら言います。

「相変わらず容赦ねえなー姉ちゃん…」

「おまえ…これが女のやることか?」

「女同士だから…いやでも…」

全く時間がないって言つてているのに……。

「早く行きますよ! 急がないと本当に手遅れになっちゃいます!」

『そうだつた! 急がねえと』

私の言葉で今の状況を思い出した三人は慌てて走り出しました。

しばらく走ると出口が見えてきました。

「出口が見えた！ 港はこの先だあ！」

提督の言う通り、あの出口を抜けければ港まであと少しです。でも……。

「どうやらそう簡単にはいかないみたいですね……」

そう、出口の前にはローグタウンの海軍大佐。スマーカーが待ち構えていたのですから。

「来たな？ 麦わらのルフィ。それに漬しのハルナ。この俺を倒さなければグランドラインに入れねえと言ったはずだ」

そんなこと言われてないのでですが……それに漬しつてなんですか？

「ああ、そういうやあ忘れてた」

忘れてたら駄目だと思います。そういう大事なことは……。

「……とぼけた奴だ」

しばし沈黙が辺りを包む。

「提督、ゾロさんとサンジくんも先に行つてくださいすぐに追いつきますから」

「さあ、それはどうかな？誰が相手だと俺のやることは変わらねえおめえらは……で終わりだ」

再度沈黙が包み込む。

「……分かつた、死ぬなよ姉ちゃん」

「ええ、必ず……」

それを聞いて三人は走り出していきました。

「……」「……」

「… 提督のご命令ですので早急に終わらせます！アクリア」

「させねえぞ！ホワイトアウト！」

突如煙が私の身体を拘束します。でも……。

「掛かりましたね！行きなさい！ウォータースネーク！」

「なっ！なんだと！？」

これだけ雨が降つていれば能力を使うのに時間はいりません！  
海水に変化させた水蛇は力強くスモーカーを締め上げます。

「こんなものすぐに抜け出して… !? 力が！」

「気づきましたか？それは海水で出来ていますあなたはもう何もできません」

「チツ… ミズミズの能力か。能力者対策も出来てやがるのか」  
なんとか脱出しようともがくスマーカー。

そんなもので私の蛇からは逃れられません！

「貴方にはここで終わりです！榛名！氣合！いれて！打ちます！『アクア・アッパー』比叡お姉様の言葉を借りて私は水を纏つた拳で全力のアッパーを叩き込みます。

「ガハッッ!!」

空叩く打ち上げられたスマーカーは勢いよく地面に叩きつけられて動かなくなりました。

近寄つて脈を確認すると、生きていました。

私がホツとしていると不意に声がかけられました。

「ほう、それがミズミズの力か… 大した力だ」

振り向くとそこには顔に変わったマークを付けた男性が立っていました。

「あなたは… 革命家ドラゴン…」

「ほう、俺の事を知っていたか艦娘の娘よ」

！：この人艦娘の事をどうして！

ドラゴンの言葉に驚く私ですがあくまで冷静に話します。

「ええ、有名人ですから：：革命軍、しかもそのトップともなれば尚更です」

「フツフツ、それもそうか。まあいい、息子の事は頼んだぞ」

それだけ言うとドラゴンはゆらりと消えていきました。

息子つて誰の事だつたんでしょう？

私は疑問に思いながらも船に向かつて走りだした時でした。

突如、突風が吹き荒れ。私はその風に吹き飛ばされてしまうのでした。

s i d e o u t

s i d e ナミ

私達はお姉ちゃんが戻つてくるのを待つていた。

なんでもお姉ちゃんはここに来る途中白獅のスマーカーの相手をするために一人

残つたらしいの。

お姉ちゃんの事だから負けることはないとと思うけど、  
帰りが遅いと心配になる。  
するとどこからか物凄い突風が吹いてきた。

「キヤアアアアアア!!」

「ほいい～……！」

「クツツ……！」

「な、なんだあ！？！？」

「おい、おい！なんだよこの風は！」

私達は地下くんの捕まれる場所に捕まつて風をやり過ごす。  
しばらくして風がやみ港の方を見るとこちらに走つてくるお姉ちゃんの姿が！

「お姉ちやんだわ！」

「なに！おーい！姉すわーん!!」

「ふつ…」

「ハルナさーん!!」

「おーいおーい！ハルナーーーー!!」

「やっぱ姉ちゃんはこうでなくっちゃやな！」

「そうして船に戻ってきたお姉ちゃんを乗せて私達はローグタウンを出発したのだつ  
た。

s i d e o u t

s i d e ゾロ

ローグタウンを出てしばらく……。

「あの光を見て！」

ナミが前方に見える当代の明かりを見て話す。

「島の灯台っぽい？」

『尊きの灯』あの光の先にグランドラインの入り口がある！』

「あの先にグランドラインが……」

「どうしますか？提督」

ハルナがルフィにそう尋ねる。

「し、しかしよ……なにもこんな嵐のなかを……」

俺はルフィを見て頷く。

サンジの奴もサムズアップしている。

ユウダチも楽しそうに笑っているし、ハルナも笑顔で頷いている。  
ナミもどことなく楽しそうだ。

「よつしゃ！偉大なる海に船を浮かべる進水式でもやるか！」

「うおおおい……」

「おう！いいぞ！」

「ハルナは大丈夫です！」

「さあ、素敵な進水式しましょう！」

「やりましょーーー！」

「……」

そうして樽を用意するとサンジが足を樽の上に載せながら言う。

「俺はオールブルーを見つけるために」

「オレは海賊王!」

ルフィの後に続いて俺も足を乗せる。

「俺は大剣豪!」

「私は世界地図を描くため」

「私はこの世界全てを見て回るために……」

「私はお父さんとの約束を果たすために!」

「お、オレは……！ 勇敢なる海の戦士になるためだ！」

全員が足を置いたのをみてルフィが叫ぶ。

「いくぞ！・グランドライン！」

そうして一斉に足を高く上げ……。

「「「「「おお！」」」」」

勢いよく蹴り落として俺達の進水式は幕を閉じた。

さまよえる謎の少女！向かうは軍艦島！

s i d e ユウダチ

ヤツホー、ユウダチだよ。

ローグタウンを出てから二日が経つたっぽい。

「ナミー！グランドラインはまだかなあ？」

ルフィイ…それ二日前にも聞いたっぽい……。

「二日前にローグタウン出たばつかでしよう？後何日か掛かるわよ。もう少し待ってな  
さい」

「あーい、ニッヒッヒッヒッヒッ！」

これでまた明日になつて聞いてくるのよね、ルフィイのことだから……。

「良い日和だなあ……あの嵐がウツソみてえだ」

「本当ね。なんだか夢でも見ていたみたい……」

ハルナさんの言う通り夢でも見てたみたいに海が静かっぽい。  
あれはいつたいなんだつたの？

するとマストの上で見張りをしていたウソップが声をかけてきたの。

「おーい！右舷方向に鳥の大群が見えるぞ！」

鳥の大群っぽい？

言われて私も右舷の方向を見る。

確かに鳥の大群と…下に何かいるっぽい？

「あら、確かに見えますね。その下に…何でしよう？小さくてよく分からぬですね」

「小舟か…？大きな魚にも見えるけど……」

そこでウソップの言葉を聞いたサンジさんが口を開いた。

「海鳥の群れ下には魚が良くいるつて聞くがな」「さかな!!」

その言葉に真っ先に反応したのはルフイだつたつぽい……。サンジさんがルフイに声をかけたの。

「ルフイ、飯にしようぜ」

「よし来たあ!ゴムゴムのお……!」

そう言つてルフイは腕を目一杯伸ばすと……。

「網取りいイツ……!」

思いつきり鳥の群れに向かつて伸ばしたつぽい!

「おおー!伸びる伸びる!!」

「便利な奴だ……!」

「提督！ ハルナ！ 感激です！」

「さすがはゴム人間っぽい」

ルフィの腕はあっさりと鳥の群れまで届き、散らせた。

「捕まえた！ よつと！」

そう言うと、そのままこつちに引き戻し始めるルフィ。  
え？ ちょっと待って！ これってこのままいくと……。

「ちょっと待てよ！ この後どうするつもりだよ！ うわあっ！」

「ちょっ！ ルフィどうするつもり！」  
バゴーンッ！

勢い良く戻ってきた腕はゾロに命中して吹っ飛んでいつちゃった。

「ぬがあつ！？」

勢い良く海に放り出されるゾロ、それを見かねたハルナさんが能力を発動したっぽ

い。

『アクア・ボール ウォータードラゴン!』

するとゾロを受け止めるように水の龍が出来上がり、ゾロさんを船へと戻した。

「悪りいゾロ、それと姉ちゃん助かつた!」

「ドアホ!!」

「お前! いつかぜつてえ斬り倒す!!」

「ふふつ…いいんですよ提督」

半ギレのゾロとサンジさんに微笑むハルナさん。

何なの? このカオスっぽい空気……。つてそんなことより!

「見てよ、この子魚じゃないっぽいよ!」

「女の子じゃない!」

「ありい？魚人か？」

「おまえどこをどう見たらこれが魚人に見えるんだよ……」

「そうですよ提督。この子は人間の女の子です」

「なんでこんな女の子があんな小舟に…？」

？？？  
？？？  
？？？

その後、気絶してた女の子を私達は船の船室へと連れてきて寝かせたっぽい。起きたまで様子を見ようサンジさんがご飯を作り始めた時。

「痛あああいつつ！」

突然の悲鳴に振り向くとさつきの女の子が頭を抱えて叫んでいたの。その隣には気絶してウソツクの姿。

「気がついたっぽい?」

私は女の子に声をかける。

「思つたよりも元気そうね。どこか痛いところない?」

「腹減つてるだろ?今スープ作つてるからな」

そう話すのはナミとサンジさん。

『……ラツキー!』

なにか小声でガツツポーズとつてるけど、何があつたっぽい?すると、ハルナさんが女の子に近づいて話しかけ始めたっぽい。

「ナンパしたの?危ないところだつたのよ?あなたの名前は?」

「…人にものを聞くときは自分の方から名乗るものよ」

ハルナさんにそんなこと言うなんて！

でもハルナさんは気にした風もなく微笑んで話す。

「そうね、私の名前はハルナと言うの。それで向こうで料理を作っているのがサンジくん」

「よつ！」

「怖い顔して腹巻きをしてる人がゾロさん」

「うるせえ…」

「あそこで気絶してるのがウソップくん」

「…………」

「それと椅子に座つてる三人がナミとユウダチちゃん。それと……」  
そこまで言つたところでルフィが割り込んだ。

「オレはルフィ、この海賊船の船長だ」

その言葉を聞いた女の子は顔を引き吊らせて叫ぶ。

「ひつ！ 海賊ウゥウウウ……!?!?」

そう叫んだつきり女の子はピクリとも動かなくなつたっぽい。

そうとも知らずルフィは続ける。

「オレ達グランドラインを目指してるんだ」

しかし反応がないことに不振に思つたのか、ナミが声をかける。

「……どしたの？」

ハルナさんが様子を確かめる。

「えつと…氣絶してますね……」

「どうすんだ? この子供」

ゾロの言葉にルフィが首をかしげる。

「あー……そうだな……どうしようつかなかあ……

明日考え方

「そこで放置つぽい!?」

「ユウダチちゃん、これが提督クオリティですよ」

あ、そうだつたっぽい。ルフィはいつもこんな感じだつたわね。

????? うしてそのまま日は沈んでいった。

みんなが寝静まつたころ……。

???

「きやああああああああツツ！」

突如響き渡る悲鳴に私達は飛び起きたの。

慌てて船室に向かうと……。

ルフィと女の子がご飯を食べてたつぽい。

「こんな美味しいのはじめて!」

「やつと笑ったわね。」

「ルフィってばまた食べてるっぽーい」

「昼にあんまり食わなかつた……」

「そんなこと言つて、鍋を二つも空にしてたじやないですか」

そう言つてハルナさんがクスクス笑う。

「あり? そうだっけ?」

ルフィの記憶力つていつたいどこまで低いっぽい?

ナミがその間に女の子に近づいて話しかける。

「海賊って聞いてそれでビビつたんでしょ？」

「それは……」

「そうなつても仕方ありません。この時代で海賊って聞いたら当然の反応だと思うわ」

「……売り飛ばしたりしない？」

「そんなことしないわよ！」  
すかさず私はツッコむ。

「おまえら皆人相悪いからなあ…」

「この顔で言うかねキミは」

そう言つてゾロの顔をつねるウソップに即座に反論するハルナさん。

「ゾロさんには言われたくありません」

「んだとおつ! それとてめえなにすんだコラアツ!」

「おまえのその顔で言われたくねえんだよ!」

その場でジャレ合い始める二人にナミが呆れたように声をかけるつぽい……。

「あーもう、やめなさいって」

「アツハハツハツハツハツ」

それとルフィは笑つてなくていいからアレ、止めてきてくれない?

「あ、あはは……」

ほら。女の子が苦笑いしてゐるじやない。

「おかわりあります? お嬢さん」

「少なくとも」この船はあなたが思つてゐるような海賊船とは違うと思うつぽい。だから

安心して

私がそう言うと女の子はようやく安心したように笑つて言つた。

「おかり！」

「畏まりました……」

「オレも！」

「あめえは自分でやれ！」

アンジさん：相変わらず男には手厳しいわよね……。

そして翌朝……。

??

出港の準備をするために私達は船の上を走り回っていたの。

主に走り回つてるのはルフィ達なんだけど……。

私はといえば……。

「何してるっぽい?」

「え?ちょっと料理でもしようかなって……」「女の子の面倒を見ていたっぽい。」

「料理ならサンジさんがやつてくれるからいいのよ?」

「でも、なにかお手伝いしたくって……」「ああ、そういうことっぽいのね。」

「分かったわ、なら私も手伝つてあげる」

「え?いいの?」

「っぽい♪」

「?????・ありがとう！」

「うして私達は料理を始めるのだつた。

「よし、これで完成っぽい！皆を呼んできてくれる？」

「分かった！」

料理を粗方作り終えた私は女の子に皆を呼んできてくれるよう頼んだっぽい。

それにもしても、私がついていて本当によかつたっぽい……。

あの子一人にやらせてたらどんな物が出来上がるか……想像出来ないわ……。  
そんなことを考えていると続々とみんなが入ってきた。

「おお、今日はユウダチちゃんが作つてくれたのか」

「うん、その子にも手伝つてもらつたっぽい」

「へえ、偉いなお嬢さん」

「えへへ…さ、早く食べよ!」

「おーしー!メシにするぞ!」

うして私達は朝食を取り始めるのだった。

「あんめえなコレ!」

「ユウダチも料理出来たんだな。知らなかつたぜ」

「ハルナさんやサンジさん程じやないけど私もこのくらいは出来るのよ!」

「本当に美味しいわ、これガイモンさんにも作つてたの?」

「まあね、でも今日はこの子が手伝ってくれ……そういうえばあなたの名前は？」  
そこまで言つて私は名前をまだ聞いていなかつた事を思い出したつぽい。

「アピス！アピスっていうの！」

「アピスちゃんが手伝つてくれたお陰で何時もより早く終わつたつぽい！」

「そうなのね、手伝つてくれてありがとうアピス」

「うん！」

「でも、今度からは誰かに聞いてから行動してくださいね？」

「うつ…分かりました…」

そうして朝食の時間は進んでいったの。

「…………飯を食べ終えるとナミがアピスちゃんに話しかけてたっぽい。  
『…………いえ、アピスはなんで海の上を漂流してたの?』

「海軍の船から逃げ出してきたの……」

「海軍の船から?」

「うん、三日前の嵐の夜に」

「あの嵐のなかをあんな小舟で……」

「良く無事でしたね」

「本当つぽい。無茶するにもほどがあるわ」

「そもそも何やらかしたんだお前？」

「え？」

「そういえばそうよね、こんな小さな子が海軍から逃げ出さなきやいけないなんてよつぽどの理由があるつぽい？」

「それは……」

「客として軍艦に乗つてたつて訳じやあねえんだろう？ かといって、小物の悪人を海軍がいちいち相手にするわけもねえ」

「なんだ？ おまえ極悪人か？」

「ルフイ…その考えはおかしいつぽい……。

「違うわよ！ 悪い事なんかするわけないじやない！  
…してないけど、理由は…ちょっとと言えないと」

「なんだよそりやあ……」

「良いじゃないですか、きっとこの子にも事情があるんです言いたくないなら聞かなくて良いじゃないですか」

「お姉ちゃんの言う通りね。でも、何処から来たかだけは教えてもらえない?」

「え?あ、うん。あたしね、軍艦島の人間なの」

「軍艦島?聞いたことないっぽい」

「私もないわ、ルフィは?」

そう言つて海図を調べ出すナミ。

「いや、知らねえ。姉ちゃん何か知らないのか?」

「軍艦島…前に風の噂で聞いたことがあります。なんでも遠くからみると軍艦の形にしか見えない島があると…」

軍艦の形をした島？そんな島があるつぽい？

「うん、ハルナお姉さんの言う通り島の形が軍艦そつくりなの」

「へえ、おもしれえ」

「ああ！ここねー！」

ナミの言葉に私達は海図を除き混む。  
ナミが指差した場所を見てウソツプが言う。

「へえー、グランドラインの近くじゃんか」

確かにグランドラインの近くに小さな島があるわね。ここが軍艦島つぽいのね。

「今いるのはここら辺だから…そう遠くはないわね」

そうナミが指すのはその子島からそこまで離れていない海。  
私はアピスちゃんに問いかける

「アピスちゃん、あなたはどうしたいつぽい?」

「え?」

「軍艦島へ帰りたい?私達はこのままだとグランドラインに入っちゃうから」

その言葉に少し俯くと申し訳なさそうにアピスちゃんは話す。

「……あたしね、折角助けてもらつて迷惑かけちやうけど……あたしは島に帰りたい!…めんなさい……我が儘よね……出来れば途中で西の方へ向かう船にでも渡してくれれば自分で何とかするわ……」

「迷惑ね~ほーんと、海賊船がそう簡単に他の船に近づけるわけないじやない」

「ナミ……」

ハルナさんが嗜めるようにナミの名前を呼ぶ

「デスヨネ……」

あーあ……ちぢこまつちやつたわ……。

『でも』と、ナミは続ける。

「ま、進路から大きく外れる訳でもないし、急いでる旅な訳でもないし、しようがないか」

「え?」

「あたしはどうちでもいいけどどうする? 船長」  
ナミがそう聞くとルフィは笑顔で言つた。

「ああ、いいんじやないの?」

「グランドラインもすぐっぽいしね!」

「そつかあ、軍艦みたいな島か」

「良かつたですね、連れていつてもらえるそうですよ」

「ホントに!ホントに軍艦島に寄つてくれるの?」

「ああ!」

「やつたあ!ありがとう!ルフィ!」

ルフィの言葉に飛んで喜ぶアピスちゃん。

こうして私達の次の行き先は軍艦島へと決まつたのだつたつぽい!

# 艦隊から逃げ切れ！カームベルト突入！？

s i d e ユウダチ

軍艦島に向かうことが決まつた私達は軍艦島へ向けて進路をとつていたの。そしたら不意にハルナさんが立ち上がり外に出ていつたつぽい。

その後続くようにナミも外に出ていく。

二人が外に出るとウソツプがこんなことを言つてきたつぽい。

「おーい！後方に船が見えるぞ！ゲツ！なんてこつた！ありや海軍の船だぜ！」  
海軍！？どうして急に！

ナミとハルナさんも慌てて外を見る。

私も気になつて外に出て確認する。

見てみるとそこには軍艦が数隻艦隊を組んで接近してきていたの！

「ええっ！なによあれ！軍艦じやないっぽい！？」

「ホントだわ、なんであんな艦隊がこんなところに……」

「もしかして、提督や私の首を狙いに来たのでは？」  
と、ここでルフィイ達もやつて來たっぽい。

「なんだなんだ？どした？」

「提督、海軍の艦隊が接近しているんです！」

「おお、スッゲエ！オレ達の首を狙いに來たのか？」

「喜んでる場合じゃないわ！すぐに逃げるっぽい！」

私はロープを手に海の方へと走っていく。それ見てナミが慌てたように声をかけて  
きたっぽい。

「ちょっとユウダチ！なにするつもり！」

「決まつてるでしょ！私が引つ張つて海軍から距離を離すのよ！」

「そういうことでしたら私も協力するわ、ユウダチちゃん」

そう言つてくれたのはハルナさんだったっぽい。

「ありがとう、ハルナさん！じゃあ早速！」

私達は艦装を展開して海に降りた。

「いけない！みんな！すぐに帆をたたんで！」

そうナミの声が聞こえるとすぐに船の帆が畳まれる。

それを確認すると私達は船にロープを括りつけて最大船速で走り出す。

しかし、走り始めてすぐにナミが声をかけてきたっぽい。

「お姉ちゃんにユウダチ！早く船に上がつて！それとあんた達！急いで帆を張つて南に傾けて！それとゾロとサンジくんは面舵一杯に進路をとつて！」

帆を張るっぽい？なんですよ？」

「ナミイー！いつたいどういうことつぽい？」

私達は言われた通り船に上がりながら声をかけたの。

「風が来るのよ。とても強い風がね」

ナミがそう言うと声が聞こえてきたつぽい。

「おい、進路を南に変えたぞ」

ゾロがそう言つた直後のこと……。

突如、突風が吹き荒れたつぽい。

『風壁』つぽい！」

私は吹き飛ばされないように全員に風の壁を纏わせる。

風を受けた帆は力一杯船を押し進んでいく。

どんどん離れていく海軍の艦隊。

「うつほおー！早え早えツ！いい風だあ！」

「見ろよルフィ！ 海軍のやつらどんどん離れてくぜ！ ハハーンだ！ ドンガメ野郎おおい  
！」

「ユウダチ、さつきは助かつたわ。皆に壁を張つてくれて」

「ええ、ありがとう。ユウダチちゃん」

「えへへつぽい……」

そんなに褒められると照れるつぽい……。

と、そんなことをしていると風は弱まり次第に落ち着いていった。

そこでゾロがじつと難しそうな顔でなにかを考え込んでいたのつぽい！

「ゾロ？ どうかしたつぽい？」

「……いや、気のせいならいいんだが……さつきからよ、この船。動いてなくねえか？」

「え？」

言われて私も帆を見る。

「ホントっぽい、帆が風を受けてないっぽい」

「あああああツツ!!」

ナミの悲鳴!? いつたいどうしたの!

私が慌ててナミの所に行くと、ハルナさんがナミに理由を聞いていたっぽい。

「どうしたの? 急にそんな大声だして……」

「しまった…カームベルトに入っちゃつたあ……」

「え!? なんですって!」

その言葉に私は首をかしげる。

「ねえ、カームベルトっていつたい何?」

私の問いかけにハルナさんが答えてくれる。

「ユウダチちゃん。カームベルトというのは別名、嵐の海域と言わわれているの」

「ナミの海域？」

「アホ！」

ルフィイ、今はボケるところじゃないと思うわ……。  
すると、船が小さく揺れた。

「なんだ？」

「地震か？」

「アンタ達ー！ぼさつとしてないで帆をたたんで船を漕いでーさつきに軌道に戻すのー！」

「はーい！ナミさん！」  
ナミの慌て様に首をかしげるルフィイ達。私も同じく首をかしげる。

「何をそんなに慌ててんだ? こりや帆船だぞ」

「そうだよ、なんでわざわざ海軍の待ち受ける海域に戻るんだよ……」

『いいから早くやりなさい』

その声をあげたのは他でもないハルナさんだつたっぽい…しかも副司令官モードの  
……。

「「「「は、はい! 只今!」」」

その言葉を聞いたルフィ達は足早に船を漕ぐ為に中に入つて言つたの。

「ねえ、どうして船を漕ぐつぽい? 私達が船を引けばいい話じやないの?」

「何も知らないのね? いい? ユウダチ。私達がを目指しているグランドラインは更に二本の海域に挟み込まれて流れてるの。この両側の二本の海域がカームベルトと呼ばれるのよ。何故かは分からぬけどこの海域は風も吹かなければ海流もない。完全な風

の状態の海域！もうひとつ危険な理由があるのよ。この海域には……」

そこまで言つたところで船が大きく揺れ、中から超巨大な海王類が複数姿を表した。船はその一匹の上に乗り上げてしまつたっぽい！

「な、なによこれ?!」

「……カームベルトは海王類の巣なの……。しかも超大型のね……」

「ここを抜けられないのはこの子達の大**海王類**の所為でもあるの」

ナミが泣きながら、ハルナさんは微笑みながら説明してくれる。

大海王類？面白そうじやない！

「それなら最高に素敵なお手本が出来るわね！」

私の言葉にナミが信じられないものを見たような顔で話す。

「なにをする気？お願いだから下手なことは考えないでよ？」

「大丈夫よナミ。ちょっとこの大海王類達に風穴開けてくるだけっぽい」

「それだけはやめてーツ!!」

「えー！ 駄目なの？ ジヤア……。

「じゃあハルナさんの能力と私の能力でここから逃げ出せばいいっぽい」

「そうね、ユウダチちゃんやりましようか！」

ハルナさんもやる気っぽい！

私は風をハルナさんは水を操り、 巨大な渦を作りだす。

### 『乱風水 竜巻鎌』

超巨大な竜巻は続々と大海王類を切り刻んでいく。

船を上に乗つけていた大海王類はそれを見て逃げるよう海の中へ潜つていく。

「今ね！ 棒名！ 全力で参ります！ 『アクア・フロー マリンストリーム』

すると船はスイスイと進み始める。

「私もやるわ！『風身 追風』！」

自身の体を風へと変化させる。

「その手があつたか！みんな！急いで戻つて帆を張つて！」  
ナミの指示を聞いてルフィ達がすぐさま帆を張つてくれる。  
私はその帆に思いつきりぶつかり押し始める。  
グングン速度をあげる船。そして苦労の末に……。

「やつたあー！カームベルトを抜けられたぞ！やつほー！」

ルフィの叫びと供になんとか私達は危機を乗り越えたつぽい……。  
はあ、疲れたつぽい……。

# 新たな再開！華の二水戦登場！

s i d e ハルナ

こんにちは、ハルナです。

今は嵐カームベルトの海域を抜けた直後です。

ルフィ提督が口を開きます。

「ユウダチ、オマエスツゲ工な！風になれんのか!?」

「流石は風の能力者よねえ…便利なものだわ……」

「えへへ…♪」

ルフィ提督とナミの言葉にユウダチちゃんが照れていますね。微笑ましいですね

…

その後、他の仲間からも一通りユウダチちゃんは褒められるとルフィ提督が不意に叫びました。

「よおーし！出発だ！」

それに合わせるようにナミも声をあげます。

「目的地は！」

「もつちろん！軍艦島だ！」

その一声で私達は軍艦島に向けて出発したのでした。

---

軍艦島へ向けて出航してから暫く……

私達は今霧が立ち込める海の上を進んでいます。

「なんも見えねえな……」

「霧がみえるじやん!」

「アピス、本当にこの辺なのか?」

「さあ?」

「さあ? って…自分の島なのに他人事っぽい?」

サンジくんの言葉に他人事のように答えるアピスちゃん。

それにすかさずツッコむユウダチちゃんというなんとも言えない場が出来上がつて  
いますね……。

「多分、このすぐ近くの筈なんだけど……」

ナミがそう話しているとマストの上からウソップくんが声をかけてきました。

「おーい! 前方に人影が見えるぞ!」

「人影? 船影じゃないのかしら?」

「なんか、ハルナやユウダチみてえな奴背中につけてるけど…霧で良く見えねえな……」

私達のようなもの？艦装ということでしょうか……

私は気になつて海を眺めます。

「あなた達！あの島にいつたい何の用ですか！」

すると、不意に凜とした声が響き渡りました。

その声のした方を向くとそこには確かに人影が……

「俺達、アピスを送つてくるのに軍艦島に向かつてる最中だ！」

その声にルフィ提督が答えます。

「アピスちゃんを？アピスちゃんがそこにいるんですか？」

「ああ、いるぞ？ほら」

「もしかして、ジンツウ姉ちゃん？」

ジンツウ? ジンツウ? てもしかして…あの神通さん!?

「ツ! アピスちゃん! どうして海賊船に! ?」

「そ、」じや話しづらいでしょ? 上がつてきなさいよ  
ナミが割り込んでそう話します。

「……では、お言葉に甘えて」

そう言つてジンツウさんは船に上がつてきました。

その姿を見て私は驚愕しました。

嘘…どうしてあの子がここに?

「え!? 嘘つぽい……」

ユウダチちゃんも驚きの声をあげています。

「……?」

上がつてきたその人は紛れもなく私達の仲間であつた軽巡洋艦で川内型一番艦の神

通さんだつたのですから……

「神通……さんっぽい？ どうしてこんなところにいるの？」

ユウダチちゃんの言葉に神通さんも驚いたような表情になります。

「その言葉遣い……もしかしてあなた……タ立ちゃん？」

「ツー……はい！」

神通さんの言葉にユウダチちゃんは笑顔で頷きます。

「それじゃあ……あなたは…榛名さん…ですか？」

今度は私の方を向いて信じられないものを見たような顔をする神通さん。

「ええ、 そうですよ？ 榛名です。 お久しぶりですね、 神通さん」

「そんな…どうしてあなた達がここに…あなた達は轟沈したはずじゃ……」

「話すと長くなるんだけどね?」

突然の再開に戸惑う神通さんにユウダチちゃんが船室に連れて行き説明をしてくれます。

私もその後に続いて船室に入ります。

私やユウダチちゃんが轟沈したこと、神様という方のお陰で人間としてこの世界に転生したこと、今の私達の境遇のこと…全てを……  
神通さんはそれを黙つて聞いていました。

「そういうことだつたのですね、ということは私も……」

「恐らく轟沈したんだと思います……」

私の言葉に神通さんは表情を暗くします……。

「そう……だつたんですね……だから私はこの世界に来たのですね」

「ごめんなさい……辛いことを教えてしまつて……」

私は本心から神通さんに謝罪をします。

「いえ、謝らないでください。自分の現状が知れてよかつたです……どうしてこの世界に来たのかずっと疑問でしたから」

そう言うと神通さんは笑つてそう答えてくれました。

「それで海軍から逃げてきたアピスを助けてくれたんですね、ありがとうございます。榛名さん、夕立ちちゃん」

「いえ、榛名は大丈夫です」

「私も、あんな小さい子を放つておくなんて出来ないもの！」

「そうでしたね、お二人はそういう人でしたね。それで、この船は軍艦島に向かっているのですよね？」

「ええ、その通りです」

「なら、村の人達が誤解しないように私も一緒に行きます。アピスちゃんだけだと不安ですから」

「それは助かるつぽい！神通さんがいてくれたら心強いわ！」  
こうして私達は軍艦島へと上陸するのでした。

# 軍艦島の伝説とアピスの秘密！

s i d e ハルナ

こんにちは、ハルナです。

神通さんの案内のものと、私達は軍艦島へと上陸しました。すると、私達が来るのを見ていた島民の方々が警戒した面持ちで船の周りに集まっています。

「警戒を解くために先に私とアピスちゃんが下りますね」

「ごめんなさい、お願ひします」

「任せといて！ ハルナさん」

自信満々にサムズアップして神通さんと共に下船するアピスちゃん。

「やー！ ただいまー！」

「皆さん、ただいま戻りました…。」

それを見た島民の方達は驚きの声を上げています。

「アピス！どうして海賊船から!?」

「神通ちゃんまで一緒にだなんて… いつたい何があつたんだ？」

そんな言葉を聞きながら私達も上陸します。

それに気づいて更に警戒が高まる島民たち…。

「皆さん、落ち着いて聞いてください！この方たちはこの島を襲いに来たわけじゃありません」

「そう！ルフィたちはね？海賊だけど、良い海賊なの！」

「海賊に良い海賊なんているのかよ…」

「うん！」

「まあ神通ちやんがそう言うんなら間違いはないだろうけど…」

そう言つて渋々納得する島民の方々。

するとルフィ提督が不意に口を開きます。

「……お前達…」

「……！な、なんだ！」

少しの威圧を混ぜながら話すルフィ提督に島民の方が咄嗟に警戒して聞きます。  
また変なことを言い出したりしませんよね…？

私の警戒を他所に提督は私の予想の斜め上をいくことを口走ります…。

「この島に焼肉屋あるか!!」

『はい??』

「提督……上陸して一言めがそれはどうかと思います……」

久しぶりに頭痛がしてきました……。

夕立ちやんも苦笑いしています……。

「なんというか……苦労してるんですね、榛名さん」

温かい目で私の方をポンと叩く神通さん。

神通さん、それを言わないでください……。

私が内心で一人頭を抱えていると、不意に声が聞こえてきました。

「アピス！」

声のした方を見やるとそこには杖をついたお爺さんが立っていました。

それに気が付いたアピスちゃんは声のした方へ駆け出していきます。

神通さんもあとからそれを追つて歩いていきました。

「ツ！ボクデンじいちゃん！」

そのまま勢いよくボクデンと呼ばれたお爺さんに抱き着くアピスちゃん。

「おお、無事で何よりじゃ… ジンツウも見回りご苦労じやつたの」

「いえ… このくらいは当然ですから…。」

ボクデンさんの言葉に神通さんはそう短く答えます。

神通さんは相変わらずみたいですね…。」

「神通さん変わらないっぽい…。」

夕立ちゃんも同じことを考えていたのかそんなことを呟いています。

すると、ボクデンさんは私達の方を見て言います。

「アピスを助けていただきて礼を言いますじや、如何かな? ささやかながら歓迎の宴を開かせていただきたいのじやが」

「お前んち焼肉屋か?」

「ルフイ、もうそれはいいっぽい…」

「そもそも失礼ですよ？ 提督……」

「え？ そつかあ？」

はあ… 提督にはもう少し礼儀と言う物を覚えてもらわないとけませんね…。

「あはは… 家は焼肉屋じゃないけど、ボクデンじいちゃんの豚まんはこの島で一番おいしいんだよ！」

「いやつたあ！ いくぞ!!」

「じゃ、いくか」

「なんだか、ご迷惑をおかけします…」

私は申し訳なさから頭を下げます…。

「いやいや、構わんよ、アピスを助けてもらつたお礼じやからな」

「すみません… 本当にありがとうございます」

「私達はそうしたいんですから榛名さんは気になさらないでください」

「ええ、 そうね」

「話し終わつたか？ んじゃ行くぞ！」

私の話が終わつたのを見て提督が歩き出しました。

私は一つため息を吐いてからその後をついて歩き出すのでした。

---

あの後、私達はボクデンさんの家に着き、豚まんの準備を済ませて家にお邪魔させてもらつていきました。

豚まんができるまで四、五時間ほどかかるそうなのです…。

「ああ… 腹減つたなあ…」

提督はいつもそう言つてますからこの際無視でいいですね。

「ボクデンさん、アピスは何故海軍に狙われてるの？心当たりは？」  
不意にナミがボクデンさんに問いかけます。

「アピス、心当たりは？」

「全然」

「ツ！あなた理由はあるけど言えないって言つてたじやない」

「ああ、あれは嘘」

「ウソつて…」

「下手したらその場で殺されていてもおかしくないっぽい…」

「相手が深海棲艦だつたりしたら確実ですね… それよりアピスちゃん?」

神通さんが不意に声のトーンを落としてアピスちゃんに話しかけます。ギクッ冷や汗を垂らしながら神通さんの方を見るアピスちゃん。

神通さんは笑つて言います。

「私は散々嘘はつかないようにと教えたはずです。それを知らない方に… ましてや海賊相手に使うなんてもつてのほかです! 今回は優しい人達だつたから良かつたけれど、下手をしたらあなたは殺されていたかも知れないんですよ?」

「……ごめんなさい」

ショーンボリと項垂れるアピスちゃんに神通さんは止めの一言をお見舞いします。

「罰としてこれから一週間村の周りを十周です」

それを聞いたアピスちゃんはガタガタと震えだしてしまいました。

「ああ～あ… 始まつたっぽい」

夕立ちゃんがまた始まつたとでも言いたげに咳きます。

私もそれには同意でした。

神通さんは鎮守府にいた頃、鬼教官と呼ばれるほどの厳しい方だつたのですから…。  
私は内心でアピスちゃんに合唱しつつボクデンさんを見ます。

「そうさな… アピスの心当たりはワシにもわからんがこの島にある伝説なら知つと  
る」

「ツ！ それ、お聞きしてもよろしいですか？」

もしかしたらその伝説に何か手掛かりがあるかも…

「ちょっ！ ハルナお姉ちゃん！」

「おお、いいともいいとも、ではお話ししよう… この島には…」  
話の内容はこういつたものでした。

軍艦島の住民は数万年前に栄華を築きながら海底に沈んだロストアイランドの末裔なんだそう、そのロストアイランドには千年龍と呼ばれる龍が住んでいてその骨は不死の妙薬になると言わっていたそうです。

「で、ここからが本番でな…そもそも、ロストアイランドの初代の王はイスカンダンク…さて、pokeボーデス王には三人の子供がおつての…」

私はその話を聞き逃すまいと耳を傾けるのでした。

アピスちゃんと夕立ちゃんがいつの間にか居なくなっていることにも気がつかず  
に…。

# 伝説の生物、千年龍とユウダチ

s i d e タ立

やつほータ立だよ♪

ボクデンさんが島の伝説について語りだしたのを話し半分に聞き流していたらアピスがコソコソと外に出ていくのが見えて私は後を追つたの…。

風で姿を消してアピスの姿を探す…。

アピスはボクデンが豚まんを作っている石窯の部屋にいたっぽい。

その手には大きな袋…。よく見ると、せつせと中に何かを詰め込んでるみたいだつ

た。

私は部屋に顔に覗かせながら声をかける…。

「なにしてるっぽい？」

その声に飛び上がらんばかりに体を跳ねさせたアピスがキギギとこちらを向く。

「ゆ、ユウダチさん……」

その手には湯気の立ち上る豚まんが……

「あ！私達の豚ま…ムグッ！」

そこまで言いかけてアピスが慌てて私の口を塞いできたっぽい…。

『しーつ！声が大きいよ!!お願いユウダチさん！どうかこの事は黙つててほしいの！』

小声でそう話すアピスの必死さに、私は何かあると察して小さく頷く…。

それを見て安心したのか、アピスはそつと私の口から手を離してくれたっぽい。

「ふはっ…黙っているのは良いけど、訳は話してくれるのよね？」

「うう…ホントは黙つていたかつたけど見つかっちゃつたらしようがないもんね…うん、ユウダチさんには話すね？実は…」

「ツ…!!しつ！誰か来たっぽい」

アピスが話し始めようとしたとき、家の方から誰かの気配を感じとり、即座にアピスを黙らせて息を殺して様子を伺う…。

「ぶたまん…（ムニヤムニヤ…）」

歩いてきたのはルフィだつたつぽい。あの様子だと寝ぼけて豚まんの薰りに誘き寄せられたつてところね…。

私が様子を伺つていると、反対側で大きな木槌を振り上げているアピスの姿が……

『ちよつ!!なにするつもりつぽい!?』

『頭を叩いて氣絶させるのつ…そうしないと大変なことになつちやうから』

『そんなことしたらルフィに気付かれるつぽい！』

「ぶたまん…」

そんなことをしている間にもルフィは刻一刻と近づいてくる…。

もう一か八か氣絶させるしかないつぽい：ルフィ、ごめんね！

私も覺悟を決めルフィに攻撃することを決意し風の大槌を手に待ち構える…。

「ぶたまん…」

どうとうルフィが部屋に入ってきた、もうやるしかないっぽい！

そう一思いに大槌を振り下ろそうとした時だつた。

【バタツ…】

不意にそんな音が聞こえ、ルフィを見ると地面に倒れ伏し眠つてたっぽい…。

「……わたし、殴つてないよね？じやあユウダチさん？」

アピスも不思議そうに首を傾げてる…。それはそうよね、殴った記憶がないっぽいんだもん…。

「私もやつてないわ、ルフィが勝手に寝ただけっぽい」

「勝手について…あはは…そんなに食べたかつたんだね、豚まん…。」

そう言うとアピスは袋から一つ豚まんを取り出すと寝ているルフィの顔の上に置いてから言つた。

「よし、それじやあ早くいかなきや！ユウダチさん、悪いんだけど運ぶの手伝つて！」

「分かつたっぽい！けど、私にも一個分けてよ？」

「うん、約束する！それじやあ行こー！」

そうして私達は大量の豚まんの入つた袋を引きずりながらアピスの案内のもと山の中を進んでいったのっぽい…。

森を抜け、山を登り、崖を越えて着いた先にはぽつかりと空いた大きな洞穴があつたっぽい…。

「この中の、早く入ろう」

「ぽい？あ、ちょっとと…！」

先にズンズン進んでいくアピスを追つて慌てて私も中へと入っていく。  
中はほの暗くて、目を凝らさないと辺りがよく見えないっぽい…。  
しばらくアピスの後に着いて歩いていると、アピスが急に立ち止まる  
とある方向に向けて話し掛けたの…。

「ただいま、龍じい：わたし、帰ってきたよ」

誰に話しかけてるの…？

アピスが見ている方へ視線を向けるとそこには…。

「なっ！？なにっぽい！？これ！！」

そこには巨大な一頭の龍が横たわっていたっぽい…。

「…………」

龍はなにも言わず私をじつと眺めるとアピスの方に視線を投げかける。：

「あーこの人は大丈夫だよ龍じい、彼女はユウダチつていつてとつても強いんだよ。」

「…………」

「うん！心配ないよ！龍じいのことは誰にも話してない、ユウダチさん？この人は信用できるから大丈夫だよ、安心してね」

何も言葉を発していないのにまるで龍と会話するように話すアピス…。

「あ、アピス…？もしかしてあなた、悪魔の実の能力者？」

「うん、ヒソヒソの実を食べたの、だから他の生き物が何を考えてるのか分かるんだ！」  
へえ～悪魔の実ってそんなものまであるっぽいんだ…初耳かも…。

「じゃあさつきから話してくる相手つて…」

「うん、勿論龍じいだよ？」

「…………」

ジツと私を見つめてくる龍…。

私は何を伝えようとしているのかその眼を覗き混んでみるけどさっぱりだつたっぽい…。

「龍じいがね？ アピスを助けてくれてありがとうだつて」

「え？ ううん！ 大丈夫っぽい！ それに、助けたのはルフイだから」

「…………」

「それでもありがとうございます、素直に受け取つておいたら？」

そんな感謝されるような事じやないっぽいのに…。

「それもそうね、ぽい！ どういたしまして♪」

こうして私達は持つてきた豚まんを龍じいにあげて話始めるのだつた：つぽい

# 故郷を探せ、幻のノロストアイランド！

s i d e 夕立

「…………」

「うん、大丈夫だったよ、私も最初はどうしようかと思っちゃつたけど、とてもいい人た  
ちだつたから私をここまで送り届けてくれたの」「

「…………」

「え？ そんなこと無かつたよ？ 逆にわたしの事を心配してくれたんだから」

暇っぽい…………。

あ、ヤツホー、ユウダチだよ！

今、アピスに連れられて山の裏手にある洞穴にいるんだけど…………。

「…………」

「ああ、ごめん… 一生懸命調べてるんだけど……」

この会話からわかる通り、私はやることがないっぽい……。

元々ジツとしてるのが得意つていう訳でもなかつたから余計に退屈っぽい……。  
そんなことを考えながらアピス質の話を聞いていると、不意に探信儀に反応があつた  
の。

「アピス、誰かこっちに来てるっぽい」

「え？ 誰かって？」

「…………」

龍のおじいさんもその大きな瞳をこちらに向けて何かを訴えかけてくる。  
けど、私じや何を言つているのかさっぱり分からなっぽい……。

「分かんないけど、アピスを探している海軍の可能性もあるわ、少し身を隠すっぽい」

「で、でも……それじゃあ龍じいが……」

「… 風幕（風敷物）」

私は風の幕を作つてそれを軽く龍じいさんに掛ける。

風の幕はすぐに辺りの砂を吸い上げて保護色となり不可視化する。

「これなら見つかる心配もないっぽい、ほら、早くアピスも隠れるっぽい」

「う、うん……」

渋々といった様子で近くの岩壁に身を隠すアピス。

それを見届けた後、私は近づいてくる気配を待つた。

「あれえ？ なんでユウダチがここにいるんだ？」

「姿が見えないと思つたらこんなところで何してるの？」  
 気配を警戒していたところに不意にそう声を掛けながら近づいてきたのはルフイと  
 ナミだつたっぽい。

「え？ ナミにルフイっぽい？ そつちこそ、どうしてここに？」

「あたし達？ あたし達はなんか怪し気に引きずられた跡がここまで続いてたから、その後を辿つてきたのよ」

あちやあ……ごめんねアピス、これはもう誤魔化しようがないっぽい……。

「そつか、そこまでバレちゃつてたら仕方ないわね、アピス、出てきて良いっぽいよ」  
 そう岩肌に向けて声を掛けると、アピスがひよっこり顔を出したっぽい。

「え？ アピス、あんたもいたの？」

突然のアピスの登場でナミが驚きの声を上げる。

それを横目に私は発動していた能力を解除したっぽい。  
途端に風の幕が消え、姿を現す龍のおじいさん。

「…………」

「いいつ  
！？！？」

「ひつ  
！？！」

いきなり目の前に現れた巨大な龍に二人は驚きの表情を浮かべる。  
しかしルフィはすぐさま態度を変え……。

「おおー！スゲエ！スゲエスゲエ！」

「やめて！やめてつたら！ルフィ！」

スゲエスゲエと連呼しながら龍のおじいさんにまとわりつくようにべたべたと触りまくるルフィ。

そしてそれを必死に止めようとするアピス。

それをみて私が思つた事……。

…… うん、なんだかハルナさんの苦労が分かつた気がするっぽい。  
これだつたっぽい……。

ナミは驚いた顔のまま動かないし…… これどうしたらいいっぽい?  
私がどうしたものかと迷いあぐねていた時だつたっぽい。

「…………」

「…………」

ベタベタと龍のおじいさんに触っていたルフイが、ふと動きを止めたの…………。

「…………」

「…………」

しばし無言で見つめ合うルフイと龍のおじいさん。

「……そつか、お前故郷に<sup>ふるさと</sup>帰りたいのか」

!?

え？ 今ルフィ、何て言つたつぽい？ もしかして、龍のおじいさんの心が読めたつぽい

アピスも驚いたような顔をしてるつぽい。

龍のおじいさんに無言で見つめられてアピスは小さく頷くと口を開いたつぽい。

「龍じいが、ルフィとお友達になつても良いつて。ユウダチさんと同じ匂いがするから  
信用できるつて」

その言葉にルフィはチラリと私の方を見てからまたアピスの方を見てニッと笑う。

「ルフィ、どうして分かつたの？ 龍じいの心が……」

「なんとなくつて……」

「なんとなくつて……」

「なんとなくで心を読めるつていつたいどういうことつぽい？」  
アピスですら悪魔の実を食べたから分かる程度つぽいのに……。

「お前こそよく分かるな」

「あ、いや、わたしはその……」

「アピスは悪魔の実の能力者っぽい、ヒソヒソの実を食べたヒソヒソ人間らしいっぽいよ」

「ヒソヒソの実？聞いたことない名前ね」

「あ、ナミがここでようやく復活したっぽい。」

「うん、わたしもよく知らないんだけど、それを食べてから動物の心が分かるようになつたの」

「ついであの時、風が来るってわかつたのね」

「うん、海鳥たちが教えてくれたんだ。龍じいと会えたのも、ヒソヒソの実のおかげな

の」

そこからはアピスと龍のおじいさんがあつた時の回想だつたっぽい。  
内容は簡単に説明するところな感じだつたっぽい。

ある日、島の花畠で遊んでいたアピスにふと風に乗つて声が聞こえてきたの。  
その声の悲しそうな雰囲気にアピスは誘われるようになその声のする方毛と向かつたっぽいの。

そこで辿り着いた先にぐつたりとした龍のおじいさんがいたつていうことだつたつぽい。

「仲間達からはぐれちゃつた龍じいはその後も一人で探し続けてたんだつて、龍の巣のある『ロストアイランド』を」

「ロストアイランド？それつて……」

「ええ、ユウダチもボクデンさんから聞いたでしょ？あの話に出てきた島の事よ。  
でも『ロストアイランド』ってずっと昔に沈んだんじゃなかつたの？」

「龍じいの話では、島は再び浮上するんだって。

そろそろその時のはずだつて言つてるんだけど、  
その場所がどこなのか、

龍じいはもうはつきりと覚えていないんだつて……。  
もうすっかり年老いちやつて、

飛ぶ力も無くして……。

でも、帰りたい帰りたいつて……。

わたし、何とかしてあげたいんだけど、

そんな島どこにあるのか全然分からなくてさ……。

伝わつてゐる伝説だけじや、なんの手掛かりにもならないし……。

だから、偶々この島に立ち寄つた海軍にちょっと聞いてみたの。

それが間違ひだつた、あの人達、竜骨を探してたの」

「うん……知つてること全部言えつて連れて行かれちやつた……。  
んな物の為にアピスを」

「竜骨つてボクデンさんのお話に出てきてた不老不死の妙薬のことっぽい？あの海軍そ

龍じいに貰つた爪をペンドントにしていた所為もあるかも知れないけど

「それであの嵐のなかを… 無茶しすぎよ」

「本当に運がよかつたっぽい」

「うん、だから、ボクデンさんにも村の人たちにも内緒にしてる。  
迷惑掛かるといけないから……。」

でも、わたし、どうしても龍じいを故郷に帰してあげたいの！

龍じい、いつも言つてるわ、龍の巣に戻ればきっと元気になるつて……。  
何年掛かっても、必ず見つけてあげるの。

絶対、なんとしてでも、見つけてあげるの……」

最後の方の言葉には涙交じりになりながらも言い切ったアピス。

「ルフィイ」

「こんないい子を放つておくなんて出来ないっぽい！」

「ああ、ユウダチも考へてることは同じみてえだな。

アピス、じゃあオレが、いやオレ達が連れてつてやる！」

「え？」

「ちよつとルフィ！それにユウダチも、話聞いてた？『ロストアイランド』は海に沈んだって言つてんでしようが」

「でも、伝説の千年龍だつていたんだから、『ロストアイランド』もきっとどこにあるさ」

「探してみないことには分からぬわ！」

「あんたたちねえ…」

「はあ…：どうせ何を言つてもあんたたちの答えは変わらないんでしようし……。  
しようがない、行くか！」

「さつすがナミー話が分かるつぱーい♪」

「よーしー。」

「ホント？ ホントに？」

「ああ！」

「任せるっぽいー。」

「ありがとう!!」

「よーしー。そうと決まればもつと食え！」

そう言つて袋に入つてゐる豚まんを食べさせようと龍のおじいさんの目の前にしゃがみ込むルフィ。

「あ、ルフィそれだとちよつと……」

【バクリツ】

「… 龍じいちょつとボケが入つてんのよ」

「ちよつと遅かつたっぽい…」

そんなこんなで話は纏まり、私達はハルナさん達にも話をするために一度ボクデンさんのお家にも戻つていつたっぽい。

# 軍艦島からの脱出！海軍の追跡を振り切れ！

s i d e ハルナ

…… z z z … はつ！

あ、えっと、おはようございます？ ハルナです。

今は… 何をしていたのでしょうか？

あ！ 思い出しました！ ボクデンさんにこの島の伝説を聞いていたんです。

三百代目の王様の話を聞いていたところまでは覚えてるんですけど、その後から記憶が……。

そ、それより、ボクデンさんは？

「千二百三じゅう…（コツクリコツクリ）」「

ま、まだ話していらしたんですね……。

というより、どれだけ長いんですかその話！？

「あら、榛名さん、起きてたんですね……」

この声は?

その声に振り向くと、神通さんが私を見て笑んでいました。

「ええ、つい先ほど…… 神通さんは?」

「私……ですか? 私は寝ていません。ボクデンさんのこのお話はよく聞かされていますから慣れてるんです。大抵はこうして途中で寝てしまうんですけど」

それで起きていられたんですね。

確かに話をしているボクデンさんが寝てしまっていますけれど……。

「…… z z z」

クスツよく寝てますね、ボクデンさん、それに皆さんも……。

「おい、みんな! スゲエんだぜ!」

「なによ、これ……」

あら？この声は……。

「お帰りなさい、ルフィさん、ナミさん」

「あら、お帰りなさい二人とも」

「お姉ちゃん、それにジンツウさん、二人は起きてたのね、これ、どういうことなの？」  
やつぱりそう来ますよね。

私はチラリと眠りについているボクデンさんを見ます……。

「……呆れた、まだ話続けてたの」

きつと起きていたらまだ続いていたでしょうね……。

そんな私達を尻目にルフィ提督は鼻提灯を出しながら眠っているウソップくんを起こしています。

鼻提灯を割られて慌てて起きたウソップくんの叫びで他の二人も目を覚ました。

「ん？なんだ？もう朝か？」

「ゾロさん、一泊もしていないんですからそれはおかしいですよ?」

「ん? そうか」

「はああ… こんな調子で大丈夫なんでしょうか…」

「うつ… あんまり爺さんの話が長いから、いつのまにか寝ちまつたな」

「クスッ… 可愛い寝顔でしたよ? サンジくん」

「ツ! おいおい趣味悪いぜ姉さん…」

良いじゃないですか、弟分の寝顔を見るくらい。

「ふふつ仲がよろしいんですね」

ジンツウさんも微笑ましくそのやり取りを見守っています。

そんなことをしていると、不意に扉が勢いよく開かれ、村人の方が一人入ってきまし  
た。

「ボクデンさん大変だ！アピスは！」

「どうかしましたか？」

ボクデンさんの代わりに神通さんが答えます。

「ジンツウさん、いや、あの海軍の艦隊が港を封鎖し始めてるんだ！」

それに反応したのはナミでした。

「まさか、アピス一人を狙つて？」

「ん？ なんであんな女の子をお？」

「これは怪しくなつてきましたね……。

アピスちゃんとユウダチちゃんの姿が見えないのも気になります。

「ねえ、みんな、あたしと一緒に来て！」

「はい! ナミさん!」

「サンジくん?」

「あ、いや、姉さんこれはだな……」

「どしてえ?」

「いいから!」

「爺さんはどうする?」

「ん~… よく寝てるし、そのままにしてあげた方がいいわ。ジンツウさん、あなたはどうする?」

「そうですね、アピスちゃんに、関わることみたいですし、私も一緒に行きます」

「分かつたわ、ねえ、ボクデンさんが起きたら伝えて、アピスはあたし達が守るからって」

「あ、ああ」

何がなにやらよく分かっていなさうな返事ですね。

「それよりも、ナミ、早くここを移動したほうが良くないかしら？」

「そうだつたわ！みんなあたしについて来て」

そう言つて歩き出したナミを追つて、私達は移動するのでした。

その後のお話はただの作戦会議でしたので飛ばさせてもらいますね。

「それじゃあみんな、手筈通りにお願いね！」

「ああ（（はい！））」

えつと、今までに起きたことを簡単に説明します。

ナミに案内された先にいたのは話に出てきた伝説の千年龍とアピスちゃんとユウダチちゃんでした。

提督たちは、その千年龍、龍爺さんを故郷である『ロストアイランド』へと帰してあげるために協力してほしいとの相談を持ち掛けてきたんです。

私、ゾロさん、サンジくん、それに神通さんがその相談に賛成しました。

ウソツプくんが少し反対していましたけど、皆さんの勢いに押されて諦めていましたね……。

そうして、龍爺さんの故郷を探すため、軍艦島から脱出するための作戦会議をしていたんです。

そこで先程につながるという訳です。

「それじゃあウソツプくん、ゾロさん、行きましょう！」

「ああ」

「あ、おい！待つてくれよお!!」

私達は船を奪還する役目です！

内容は簡単、港に停泊しているゴーイングメリーオ号を、島の裏手にあるウソップくんの鼻のような岬の所まで船を回せばいいだけです。

ゾロさんとウソップくんが船の操舵、私は海流を作つて航行速度を上げるための能力者要因です。

艦装で船を曳舟してもいいのですが、それだと逆に目立つてしまふので避けてほしいと言わされたのでこの方法です。

さて、それでは……

ハルナ！全力で参ります！

s i d e o u t

s i d e ユウダチ

ヤツホー、ユウダチだよ

私は今、龍のおじいさんを能力で浮かび上がらせてるっぽい。

「さて、それじゃあユウダチ、そのまま洞窟の外に出してちょうどだい」

「はーい、動くから暴れないでねっぽい」

「……」

「… 龍じいがよろしく頼むだつて」

アピスの翻訳とっても助かるっぽい♪

「任せといて！おじいさんが若い時みたいに空高く飛ばせてあげる！」

その横ではナミが海を眺めてるっぽい。

「んく… お？ 来たわね？」

その言葉に私も海の方を見てみる。

すると確かに遠くに船影が見えてきたっぽい！

「夕立ちゃん、その力は……？」

不意に神通さんがそう聞いてきたつぽい。

「え？ ああ、これ？ これは悪魔の実の能力だよ」

「悪魔の…… 実？」

この反応だと、神通さんも悪魔の実の事は知らないみたいね

「えっとね…… 「大変！ 海軍が近くまで来てるって!!」 え？」

ウソ!? どこにいるつぽい？

辺りを見回してみると、いたつぽい。水兵帽を被った海軍の軍団……。

「あらー…… 以外に来るのが早かつたわね」

「ちょっと、どうするつもりなの!!」

「ああ、大丈夫よ、この二人がいるし、それにユウダチだつているんだもの」  
信用してもらつて嬉しいけど、ちょっと今の状態だと厳しそうよね……。

「神通さん、その話はまた後でね！」

「ええ、今はそれどころではなさそうだわ」  
さあ、素敵なパーティーしましよう！

「待つて、ユウダチ、それにジンツウさんも……ここはルフイ達に任せておきましよう」  
「ああ、さあ！ 暴れるか！」

「レディにばかりやらせるわけにはいかねえよ、ここは俺達に任せとけ」

そう言つて前に出るルフイとサンジさん。すぐ頼もしいっぽい！

「二人とも、ゴーイングメリーア号があの岬の所に来るまでの間時間稼ぎお願ひ」

「おう！ 任せろ！」

「はい！ナミさん！」

と、そんな時だつたつぽい……。

「ツ！ダメ！龍じいを撃つちやダメエ！！」

「ちょっとアピス！何やつてるつぽい！？」

「夕立ちちゃんはそのまま、ここは私が  
え？神通さん？」

神通さんはそう言うとアピスを連れて下がつてきたつぽい。

「アピスちゃん、今は出ていってはダメです！」

「でも、龍じいが！！」

「あなたが今出て言つて何ができますか？ここは私達に任せてくれださい」

「そうだよ、アピスはおじいさんの近くにいてあげてっぽい」

「… うん」

「いい子です。約束ですよ?」

そう言つて神通さんが前に出た時だつたっぽい。

「撃てえつ!!」

【バンッバンッバンッバンッバンッナンッ!!!!】

「神通さん!!」

まずい!このままじや神通さんが!!

一直線に神通さんに迫る弾丸の嵐……。

私達の誰もが動き出そうとした、その時だつた。

【シユバババババババツ!!・バラバラバラ】

「……こんなものですか？」

え？ 神通さん今何したつぽい？

見間違いいじやなければ銃弾を全部素手で受け止めてたように見えたつぽいんだけど……。

「アピス、今の何が起きたかわかるつぽい？」

「ううん、さっぱり……」

そうよね、神通さん、いつたい何をしたらそんなことが出来るつぽい！？

「スッゲエ!! なあお前今のそれどうやつたんだ？」

ルフイが滅茶苦茶目を輝かせながら聞いてる。

「え？ 単に飛んできた弾を手で受け止めただけですよ？」

「弾を受け止めるとは… すぐえな姉ちゃん」

「いえ、あなたも訓練すればすぐできるようになりますよ」

神通さん、簡単に言つてるけどそれ、そうできる」とじやないっぽい……。

「おお、そりやご教授願いたいね、けど今は…」

サンジさんが前を見据える。

そうだつたつぽい、今は目の前に敵をなんとかしないと!

「シツ！」

【スツタタタタタタンツツ！】

「ゴムゴムのつ… ガトリング!!!」

【ドガガガカツツ！】

剣を構えて向かってくる海兵たちに迎え撃つように突っ込んでいくルフィとサンジ

さん。

「うぎやあああああつ!!」

勢いよく吹つ飛ばされていく海兵たち。

私もこれさえなかつたら暴れられるのにい・つ!

そんな風にやきもきしている間にも状況は進んでいつてるっぽい。

吹つ飛ばされた海兵たちに見かねたのか、スーツ姿のヘンテコ頭の男が出て気たっぽい。

「俺は旋風のエリック、ネルソン・ロイヤルに雇われている傭兵だ。

貴様ら海賊に用はない、我々はそこにいる千年龍に用があるのだ。

邪魔立てすると、カマカマの実の鎌鼬の餌食にするぞ?」

あのヘンテコ頭、エリックっていうつぽい? それにしてもカマカマつて……。

「驚いたか? 俺様も悪魔の実の能力者なのさ」

ヘンテコ頭エリックが何か言つてるけどルフィとサンジさん話聞いてないっぽい。

「ナミ! まだやんのか?」

「うーん… もうちよい!」

「そうやつて遠くの海を見やるナミさんも素敵だあ!」

「早い」としてくれよお~」

拳句の果てには無視してナミと会話してるし……。  
というかサンジさん、今の榛名さんに伝えておくからね?

「(ゾクツ) お、おい、ちょっとユウダチ? 今何か物騒なこと考えなかつたか?  
あら、意外と勘が鋭いっぽいのね

「さあ、どうだつたつぽいかな~?」

「……ま、まあ今はいいか」

「おい！貴様らあ！！こつちの言うこと聞いてんのかあ！！」

あ、ヘンテコ頭が顔を真っ赤にして怒ってるっぽい。

「流石に無視されたら怒ると思いますよ？」

「そか？聞いてるよ、オカマのエリックだろ？」

「ちがーう!! オカマのカマじやねえ！ 鎌鼬のカマカマだあ!!」

「どつちでもカマわないぜなんちやつて！ あひやーひやつひやつひや！」

ブフツ!!： カマと構を掛けたっぽい!! クフツ!! お腹痛いっぽい!!

「うッ!! 僕を怒らせたことを後悔するな？」

「アイツ、何かする気ね？」

「カマカマのツー・シユシユシユシユツツむじ風え!!」

ツー・あの風はヤバイっぽい！」

「ルフィー! サンジさん! その風をまともに受けたらだめっぽい! 避けてえ!!」

「いっ!?」

「うおつ!?

紙一重でなんとかそれを避ける二人。

二人の後ろに抉れたような跡が出来てるっぽい。  
ふう、間に合ってよかつたっぽい……。

「ほう、躲したか、そこの小娘に助けられたな」

「あつぶねえ……」

「なるほど、これが鎌鼬つてやつか、助かつたぜ! ユウダチちゃん!」

「ぽい!」

「来た！ ユウダチ！ お願ひ！」

いよいよ！出番ね！

さあ、最ツ高に素敵なパーティーしましょう!!

「いくわよ！ 爆風（瞬間風速）!!!」

〔ゴウツツ  
!!!〕

「うおおつつ!?

「うつはあ！スッゲエ速さだ！！」

艦載機もビックリの速度で飛んでいくっぽい！  
ルフィとサンジさんを回収するのも忘れずにね。

そのまま船まで一直線っぽい！

「いつかえつ——!!」

あ、忘れてたっぽい……。

「風幕（極包）！」

【ドツツ!!バシャアアアアアンツツ!!!!】

物凄い水柱つぽい！

「ハルナさん！今のうちに船を出すつぽい！全速力で!!」

「え？ええ！」

するとメリーア号の周りの海流が凄い速さで移動し始めたっぽい。  
私は幕を操作しながらその船の後を追っていくのだつたっぽい。  
あ、因みにみんなは伸びちゃつてたっぽい……。

# 口ストアイランドを探せ！向かうは軍艦島の東！

s i d e ハルナ

こんにちは、ハルナです。

私達は今、龍の巣のある『口ストアイランド』に向かうため、龍爺さんとアピスちゃん、それに神通さんを連れて海を進んでいるところです。

龍爺さんは今、私が海水から変化させた木製の筏<sup>イカダ</sup>兼、荷車に乗つてもらつています。ずっとユウダチちゃんに任せていたらあの子が疲れてしましますからね……。

「口ストアイランドかあ、海図だと軍艦島の周辺海域にはそれらしい島は無いんだけど……」

「私が見てきた方がいいっぽい？」

「私達なら艦装もあるから探すにはうつてつけだと思うけれど」

私達のその言葉にナミは首を横に振ります。

「ううん、それだといざという時に龍じいを守れる人がいなくなっちゃうからやめておきましょう」

「分かったわ、ユウダチちゃんもそれでいい？」

「ハルナさんがそうするなら私もそうするっぽい！」

そうなると、見渡しながら探すしかありませんね……。

私が辺りを見回していると、遂に痺れを切らしたのか、ウソップくんが龍爺さんに問い合わせていました。

「おーい龍のじいさん！どつちに行けばいいんだよ！」

「……」

しかし龍爺さんは海を眺めるだけでなにも反応しません……。

提督がその目を覗き込むと龍爺さんは再び目を閉じてしまいました。

「うーん…なんかまた寝ちまつたぞ」

困りましたね…これじやあ何処をどう探したらいいのか分かりません……。

「みんなお待たせ！ご飯が出来たわよ！」

その声に振り返ると、アピスちゃんが鍋のようなもをミトンを付けた手で運んでいました。

それを見て青ざめるユウダチちゃん。

「あ、アピス…そ、それ…一人で作つたっぽい？」

「え？ ううん、違うよ？ サンジと一緒に作つたの」

「サンジさんと？ それなら安心っぽい……」

そう言つてホウと胸を撫で下ろすユウダチちゃん。

「むう…わたしそんなに信用ないの？ ユウダチさん」

「そういう訳じやないっぽいけど、アピスつてちょっと日を離すと何するか分からいつ  
ぽいしねえ……」

「わたしそんなやんちやじやないもん!!」

「クスッ… なんだか夕立ちゃんがアピスちゃんの姉みたいですね」

二人のそんなやりとりを見ながらクスクスと笑う神通さん。

それを尻目にやいのやいのと口喧嘩がヒートアップしている二人。

もうご飯の事が頭になさそうですね……。

私は船の周りの海水を引き寄せるとな腕のような形に変え、料理の入った鍋を持ち上げると龍爺さんのところにいる提督たちに声を掛けます。

「提督、龍爺さん、ご飯が出来ましたよ!たくさん召し上がるくださいね」

「姉ちゃん、そのティトクつて呼び方やめてくれって… 前みたいに名前で呼んでくれりやいいよ……」

そう言えばそうでしたね……すっかり忘れてました。

「ごめんなさいね、じゃあルフイくん、これお願ひできるかしら？」

「おう！任せろ！」

そう言つて腕を伸ばすと、私の持つ鍋を手に取るルフイくん。

「熱いから気を付けてくださいね？」

「分かってるって！つて！うわちやあ!!」

「ちょ、ちょっとルフイくん!?」

「ああーッ!! テメエエツ!!」

持つていた鍋を思い切り宙に放り投げるルフイくんと怒鳴るサンジくん。  
今さつき注意したばかりじゃないですか……。

そして宙を舞つた鍋は龍爺さんの頭にクリティカルヒット……。

瞬く間に真っ赤に染まつていく龍爺さんの頭。

「………… ツツ?!?」

あまりの熱さに龍爺さんも驚いたように目を見開いています。  
大丈夫……じやないですよね……あれは……。

「はっ!? 龍じい!!」

先程までユウダチちゃんと口喧嘩をしていたアピスちゃんがそれに気が付き、すぐさま龍爺さんの所へと駆け寄ります。

慌てて頭の上にひっくり返った料理を払うアピスちゃん。

龍爺さんはその間も目を見開いて空を見つめていました。

「龍じい、大丈夫?」

目を見開いたまま空を見つめる龍爺さんを心配して、アピスちゃんが声を掛けます。

「…………」

しばらくすると、龍爺さんはいつものように半開き戻してアピスを見ました。

また何かを伝えているみたいですね……。

「…え？」

その様子を見守っているとサンジくんが起こつたように口を開きます。

「まつたく…せつかく作つたメシが台無しじやねえか」

「また作ればいいだろ？」

「そういう問題じやねえ、食いモン粗末にするなつて言つてんだよ」

「これ、もし間宮さんや鳳翔さんは見たら激怒するっぽい…」

「そうですね、今この場にいなくて本当に正解でした……」

「もしいたらきつとルフィくんは今頃あんなに呑氣にしていられないでしよう  
ね……」

「??さつきから何話してんだ?おまえら」

ゾロさんが私たちの会話に口を挟んできます。

「ううん、大したことじゃないから気にしないでっぽい」

「… そうか」

そう言うと、ゾロさんは再びルフィくん達の方を見ます。

きっと先程の内容を説明してもゾロさん達には理解できないと思いますからね……。

私も再びの提督の方に視線を向けます。

すると、アピスと提督が不思議そうに海を眺めていました。  
何かあつたんでしょうか?

「…… ロストアイランド…… 龍の巣は、軍艦島の東……」

アピスちゃんが不意にそう呟きます。

その言葉に提督が嬉しそうに話します。

「ウヒツ！そこにロストアイランドがあんのか！」

「龍じいが思い出したつて！」

龍爺さん、思い出せたみたいですね‥‥良かつたわ‥‥‥。

「おーい！みんな分かつたぞ！ロストアイランドは軍艦島の東だ！」

「龍じいがそう言つたの！」

提督たちが私達に伝えてきます。

それを聞いたナミが慌ただしく皆に指示を飛ばし始めます。

「ウソツク！舵とつて！お姉ちゃんは曳舟お願ひ！」

「おーう！」

「ええ、分かつたわナミ」

私は指示通り艦装を展開して海へと降ります。

「よーし！ロストアイランドに向かつて突つ走るぞー!!」

「はい！提督！」

「ツ！！……姉ちゃん……それは止めてくれって……」

あつ……つい癖で忘れてました……。

気を付けないといけませんね……。

「ハルナさん相変わらずっぽーい……」

「ふふつ懐かしいですね」

うう……恥ずかしいです……。

そんなことがありつつも私達は軍艦島の東へと船を進めるのでした。

# 辿り着いた孤島、龍の巣の手掛かりを探せ！

s i d e ハルナ

こんにちは、ハルナです。

今私達は軍艦島の東、荒れ狂う台風の嵐の海を越えた孤島に来て います。  
え？ 嵐の中をどう潜り抜けてきたのか？

私と夕立ちゃんの能力で難なく突破しました！

「それについても、どのくらい人が住んでねえんだろうな…。」

「ホント、まるごと自然に呑まれてるっぽい」

「ええ、この荒れ果て具合から見て、相当な年月人の手が入ってないみたいですね…。  
そう話すのはサンジくん、夕立ちゃん、神通さん。  
その会話を聞いていると、不意に別の声も聞こえてきました。

「ねえ、龍じい！聞いてる？龍の巣のある島に着いたのよ！」

それはアピスちゃんが龍のお爺さんに話しかけている声でした。  
しかし、龍のお爺さんは少し目を開けたきりまたすぐ眠ってしまいます。

「アピスちゃん、龍のお爺さんはなんて？」

「それが、こんな場所は知らないって……もしかしたらここは龍の巣じゃないのかも……」  
その言葉に誰よりも早く反応したのはウソップくんでした。

「そりやないぜ！あんな大変な思いしてたどり着いたつてのによ……」

「……」

申し訳なさからか、俯いてしまうアピスちゃん。

そこにて…間違えました…。ルフィくんが声をかけます。

「アピス！見ろよ、あの天辺、あそこから見たら島全部が見渡せるぜ！」

「そうね、ここで考えていても始まらないし、行つてみましょ」

「ツ…うん！」

「おおーし！しゅつぱーつ!!」

【ヒュルルルツ】

「え…？」

今、何か居たような……。

「お姉ちゃん！早く行きましょ！」

「え、ええ…」

今、確かに誰か居たような気がしたのですけど……。

そんなことがありつつも、私達は島の高台へと向かうのでした。

「あの…私達も運ばなくて良いんでしようか…」

「いいのよ、コイツらはお姉ちゃん達のお陰でかなり楽させてもらつてるんだからこういうときぐらい働いてもらわなくっちゃね♪」

「好き勝手言いやがつてナミの奴…お前も押してみろつてんだ…」

「何言つてんだ、姉さん達のおかげで俺達がどれだけ自分の仕事に打ち込めると思つてんだ。四の五の言つてねえで、さつさと押しやがれ」

「くそぅ…反論できねえ…」

神通さんの言葉にナミが返し、それを聞いていたウソップくんの文句をサンジくんが

返しています。

私が見れば、こんな急な坂を大きな荷車を押しながらそんな口を叩ける方が凄いと思います……。

そんな風に登つて行きつつも、途中でアピスちゃんが能力で野性動物から聞いた話で、頂上に千年龍を模したと思われる絵が描かれている建物があるとの知らせを聞いて、私達は頂上の建物へと歩を進めるのでした……。

「せーつの！」

最後の石段に荷車を押し上げ、私達は目的地である頂上の建物へと到着しました。

「みんな、お疲れさま」

「はい、お疲れ」

「お疲れ様です。皆さん…」

「お疲れさまっぽい！」

荷車をここまで押してきた男性陣を労いつつ、私達は目の前の扉を見ます。

「この絵、千年龍よね？」

「ええ、ナミ…間違い無いと思うわ」

「つてことは、ここが龍の巣なのか？」

「ここが…？」

「ちょっと待て、入り口は、どうやって中に入るんだ？」

「そうなんです。ここには入り口らしきものが見当たらないんです。

「これが扉だ！」

ルフィくんが適当なことを口にします。

「ルフィ、なに言つてるつぽい？これには取つ手も鍵穴も付いてないわ」

「ん？あそつか！」

そもそも龍がわざわざ扉から入つていくとは考えづらいのですけど……。  
と、そんなことを考えていると、アピスちゃんがかけていたペンドントを持って、壁  
画の穴の空いた部分へと歩いていきます。

「アピスちゃん？それってまさか…」

「……うん」

神通さんの問いにアピスちゃんはゆっくりと頷きます。  
そして、鍵穴らしき場所に手を伸ばします……が……。

「……とどかない…」

身長が足りなくて届きません…。

「あつはは…小せえなあアピスは」

「なによ！」

「うしつ！オレに任せろ！」

そう言つて意氣揚々と窪みに向かうルフィくん、でも…。

「……あれえ？あれあれえ？」

直後、地面が勢いよく揺れだしたのです。

すると、今まで私達の立っていた足場が音を立てて崩れていくではありませんか！

「「「うおおつ!?」」

「「「きやああああつ!!」」

こうして私達は瓦礫と共に地下不覚へと落ちていくのでした。

龍じいを守れ！カゼカゼ VS カマカマ！

s i d e ハルナ

「皆さん、無事ですか？」

「……ああ、なんとかな……」

こんにちは、ハルナです。

現在私達は落ちた建物の中に入っています。

「みんな、上を見るつぽい！」

不意に夕立ちやんが叫びます。

その声に連れて上を見ると……。

「……なに、これ……」

アピスちゃんが疑問の声をあげます。

そこには、巨大な天井画が描かれていたんです。

「すげえ…デツカイ絵だなあ、何の絵だ？」

「んーなんなんだありや…つ！あたたたつ…」

「大丈夫ですか？」

「ウソップは上向き過ぎっぽい」

「んだとお！」

「なによ！」

夕立ちゃんとウソップくんが言い争いを始めます。

それを横目に私は天井を見上げます。

白い建物に千年龍とおぼしき絵…それに軍艦にそつくりな絵……。

それに真ん中のコンバスを象つたような絵…ツ！まさかこれって……。

「お姉ちゃん、これもしかして…」

「ナミも分かつたのね、ええ、これは地図よ、ロストアイランドへの  
それを聞いて反応したのはサンジくんです。

「地図つてことはなにか？この絵がロストアイランドの場所を示してる…。そう言いた  
いのか？姉さん」

「ええ、そのとおりですサンジくん」

「じ、じやあ…」はロストアイランドじゃないの？」

アピスちゃんには信じがたいことですよね…。でも本当のこと教えないと。

「はい、…」はロストアイランドではありません

「そんな…じやあ何処にあるの…龍の巣は…」

落ち込み俯くアピスちゃん。

「なんでそんなことわかんだよ姉ちゃん」

ルフィくんの疑問も最もです…。

「上を見てください」

私の言葉に上を見上げるルフィくん達。

「あそここのドーム型の建物のある島、あれが今私達のいる建物なの…。そして、その島の周りにいる人達は昔この島に住んでた人達…。謂わばアピスちゃんのご先祖様達と言うのとになりますね」

「私達の…」

「続きは私が話すわ…。

みんな、ボクデン爺さんの言つてたこと覚えてる?」  
ナミが引き継いで話をしてくれます。

「いや、寝てた！」

ルフィくん…それは堂々と言うことじやないです……。  
ああ…また頭痛が……。

「榛名さん大丈夫っぽい？」

「ああ…ごめんなさい夕立ちゃん…」

その様子に苦笑しながらもナミは続けます。

「ほら、軍艦島の人達は他の島から渡つてきたとか言つてたじやない…。ね？ジンツウ  
さん」

「はい、そう聞いてますね」

「そうだっけか？」

「じゃあ、爺さんが散々言つてた王朝つてのはこの島にあつたつてことか?」

「多分ね、それで気になつたのがここに来るまでにあちこちあつた龍の象や絵、あれはこの島に住んでた人達が千年龍を神として崇めてたつてことなんじやないかと思うの。きっと昔は、この島の上を千年龍が飛んだりしてたのよ」

「なるほどね、それなら確かにこの島に龍の巣がある可能性は低いっぽい」  
納得する夕立ちゃんの言葉にアピスちゃんが囁みつく。

「でも! それじやあ本物は何処にあるの?」

「あの龍が描かれてる島がそうつてことなんじやねえのか?  
ゾロさん、鋭いですね。」

「ええ、その通りです。あれこそが本物のロストアイランド。龍の巣もそこにあるんで  
しよう」

「でも、待つてください！それじゃあ目的地は最初から…」  
神通さんが信じられないとばかりに言います。

「はい、神通さんの言う通り、この地図の指し示す通りなら、龍の巣は軍艦島にあると言  
うことになるんです」

「だけどよ、軍艦島にはそれらしいところはねえってナミがそう言つてたじやねえか」「  
けど、地図にこうして書いてあるっぽい、それともウソップは昔の人が出鱈目に書い  
たつて言いたいの？」

「そうだぞおまえらー！姉さんやナミさんが間違ったことを言うわけねえ、あの島の何処  
かにあるつてことだろ、行つてみりや分かることじやねえか」

「でも、あるいはもう海のそこに沈んでしまっているのかも…ううん、その可能性の方が  
大きいわ。それなら今まで誰にも見つかなかつた訳も納得いくもん」  
それを今まで黙つて聞いていたアピスちゃんが急に駆け出します。

アピスちゃんが向かったのは龍のお爺さんのところでした。

「龍じい！ 思い出してよ龍じい！」

龍の巣はどこにあるの？

ここだと思ったけど何もないの！

絵しかないので！

龍じい！ あの絵を見て何か思い出さない？

後はもう、龍じいが思い出すしかないの！

ねえお願ひ！ 思い出してよ龍じい！」

「.....」

アピスちゃんの言葉に龍のお爺さんがゆつくりとその瞳を上へと向けます。

その時、近くに止まっていた鳥達が一斉に飛び立ち、建物内部を飛び回り始めました。それはまるで、嘗ての千年龍達の飛ぶ様を表すかのように.....。

それを見た龍のお爺さんが目を見開きます。

「.....」

「よし、やっぱ龍の巣は軍艦島にあんだな」

「ルフイくん、龍のお爺さんの言つてることが分かつたの？どうして？」

「なんとなくだ」

「ああ、そんな気はしてました……。」

「うん、龍じい思い出したつて…軍艦に似た頂の東、あの島の中に龍の巣はあるつて…  
やつぱり、目的地は最初からあの島にあつたんですね。」

「まつたく、散々苦労してここまで来たのにどういうことだ…」

「ごめん…もう海に沈んでしまつたかもしない物のために、こんなところまで引っ張  
り回しちゃつて…無駄足だつたね」

「そもそも限らないぜ、案外、意外なところに龍の巣はあるのかもしないぜ？行つてみ

ねえことには分からねえだろ?」

「そういうこと、このぐらいでめげるなんて、アピスらしくないわ」

「失敗を恐れてちや、何も出来やしないぜ?」

「そうだよ!しつかり龍じいを送り届けてあげなくちや駄目っぽい!」

「兎にも角にも前進あるのみです!」

「ま、回り道の人生つてのも悪くねえ」

「にっ!行くか!ここにいても龍じいは元気になんねえんだろう?なつ?」

「……うん!」

「行きましょう、アピスちゃん。龍じいさんを故郷に送り届けに…」

「ジンツウさん…うん！」

「これで目的地は決まった、その時のことでした…。」

【ゾワツ】

殺気が私達を、包み込みました。

けど、ルフィくん達は気がついていないようです。

【カチャンツ】

ゾロさんが不意に刀を鐔から弾き出し、上を睨み付けました。

夕立ちゃんも上を睨み付け、臨戦態勢に入っています。

「ゾロ、あなたも気付いたっぽい？」

「ああ、ユウダチも気付いてたか」

「ぽい、榛名さんも気づいてるっぽい」

「ゾロ、ユウダチ、それに姉さんもどうしたの?」

未だに気がついた様子のないナミが問いかけます。

「誰かいる…」

「殺氣よ…ナミ…気をつけて…」

ナミに警告しつつ私は殺氣の出所の上を見上げます。

見上げた先に現れたのは私達が落ちてきた穴から私達を見下ろしていた細いサングラスに紫色の毛を真上で纏め逆立てた、おかしな髪型の男性でした。

「説明よ苦労、お陰で龍骨の在処、龍の巣の場所が分かつた…」

「またお前か!」

「いい加減しつこいつぽい!」

ルフイくんとタ立ちゃんの言葉に耳もくれず、男性は話します。

「しかし、海の底では意味がない…。やはりその千年龍を頂くしかないようだな」

「ダメ！ 大体、龍の巣が海の底だんてまだわかんないもん！」

「夕立ちゃん、あの人つて確か…」

「うん、カマカマの実の能力者よ確かに名前は…そう、オカマのエリックっぽい！」

「だからちがーう！ 鎌鼬のエリックだ！」

「質の悪いのが来やがったな…」

「いいっ！ カマカマの実つて、悪魔の実の能力者かよ…」

ウソップくん達が話すなか、夕立ちゃんが前へと出て、ルフイくんに言います。

「ルフイ、ルフイ達は先に龍じいを連れて船に行つて…私は後から向かうわ」  
しかしその言葉に反応したのはルフイくんではなくゾロさんでした。

「おい、ユウダチ…それなら俺が…」

「…アソコの武器は風っぽい、それなら同じ風の使い手である私の方が良いっぽい」

「…分かった、ユウダチ、任せるぞ、行くぞゾロ」

「お、おい…」

「先に船につたつて…出口なんてわかんねえぞ?」

「そんなもんは…作る!!うりやああああああつ!!」

「そう言うや否や、壁に向けて走り出すルフィくん。しかし…。」

【バイーンツ】

壁に跳ねかえつてしまします。

「んー…あれえ？ぶつ壊せると思つたんだけどな…」  
それを見ていたナミがポンと手を叩いて言います。

「その手があつた！お姉ちゃん！アレで壁破壊して！」

「ナミ…アレってまさか…」

凄く嫌な予感がするのですけど……  
ナミはウインクしながら言います。

「そう、そのまさかよ！早く！もう時間がないわ！」

どうしてこう…この妹こうなんですかあ!!

「どうなつても知らないわよ！『副砲展開』！」

私は副砲である高角砲を展開させ、壁に向けて狙いを定めます。

「榛名！全力で参ります！」

【ドツゴオオオオオオンツツ】

物凄い轟音と共に、吹き飛ぶ壁…。

「おお！開いた開いた！さつすが姉ちゃん！よしつ行くぞ！」

こんなことで大丈夫なのでしょうか……。

そんなことを思いながら私は龍のお爺さんを連れてその崩れた穴から飛び出していくのでした。

s i d e o u t

s i d e ユウダチ

【ガラガラツ】

「おお！開いた開いた！さつすが姉ちゃん！よしつ行くぞ！」

崩れた壁から出て行こうとするルフィ達…。

「逃がすか！」

それを逃がすまいと穴から飛び降りてくるオカマのエリック。

「やらせないわ！『風魔 螺旋弾』

幾つもの風の弾丸がエリックに向けて撃ち放つ。

「チツ…！カマカマのお…！」

【ヒュババツ】

手から放つた鎌鼬で螺旋弾を次々に切り落として地面へと降り立つエリック。

私も風の刃を作り応戦する。

ルフィ達はもう行つた…？

見るとルフィは未だに落ちてきた壁画を眺めていたっぽい。

「ルフィ！何してるのよ！早く行つて！」

「あ、悪りい」

そう思うなら早く行つてほしいっぽい!

風剣でエリックの攻撃を捌きながらもそう考える。

そのすぐ後に、ルフィ達は崩れた穴から外に飛び出していつたっぽい。

『『『いやあああああつ!!』』』

榛名さん達の悲鳴が聞こえてくるけど…今はそれどころじゃないっぽい!

「貴様…！邪魔立てすると許さんぞ！」

「へえ、どう許さないのかしら、じっくり見せてもらうっぽい！」

「…ッ!!」

榛名さん！後は任せるっぽい！

s i d e ハルナ

ハルナです。

今私達は猛スピードで坂を下つてます。

建物から飛び出した私達は張り巡らせた木の根を滑り落ち、先程登つてきた下り坂を荷車で駆け降りてます。

「ねえ、ユウダチさん本当に大丈夫！」

「ん？ 大丈夫だつて！」

「でも、相手は悪魔の実の能力者よ、いくらつよくたつて敵いつこないわ！」

「それでもだいじょーぶ！」

余程夕立ちやんに信頼を預けているんですね…。

そういえば、前の提督もそうでした…。  
等と考えているとアピスちゃんが叫びます。

「ルフィイ！前まえ！」

「いいつ!? 参つたなこりや…」

「参つたなじやなくて！なんとかしてよおお!!」

そんなことしている間に荷車はトンネルの中へと入つていくのでした……。

s i d e o u t

s i d e ユウダチ

「カマカマの…・・・鎌鼬！」

飛んでくる鎌鼬をなんとか躲わす。

後ろを見ると綺麗に切れた壁画……。

「危ないっぽい……」

あんなのに触れたら艦装を着けててもアウトね……。

そんなことを考えていると、エリックが崩れた壁の方に走つて行くのが見えた。

「逃げる気！まだパーティーは始まつたばかりよ！」

「パーティー等に付き合つている暇はない、私の目的はあの千年龍だけだ！……のわっ  
！」

そう言つて飛び降りるエリック。

叫んでたところを見るに予想以上に高かつたみたいね……。

「つて、こんなことしてると場合じやないっぽい！追わなきやー！」

私は身体を風へと変えて後を追つた。

建物を飛び出してすぐ、エリックを見つけた。

ルフィ達が通つた思わしき木の根を器用に滑り降りていた。  
頑張つてるようだけど、私には関係ないわ!  
瞬く間に距離をエリックとの詰める。

「追い付いたっぽい!」

「ぬおつ!?貴様、どうやつて!?: そうか貴様、ロギア自然系か!」

「逃がすわけないっぽい『風魔 亂氣流』!」

風の身体を乱回転させて体当たりをかます。

「うおっ!?落ちるだろうが!!」

「落としてやるつぽい！」

暫しそんなことを続けていると、エリツクが飛び上がった。

どうする気かと思えば地面が近くなつていたみたい…そのまま地面へと降り立ち一目散に駆け出して行つた。

この状態は移動には便利だけど他の攻撃後使えなくなるつていうデメリットもある。すぐさま元に戻り、私も後を追つた。

「待つつぽい！ルフィ達のところにはいかせないわ！」

---

少し走つたところですぐにエリツクに追い付いたつぽい。  
遠くで砂煙が上がつてゐるのを見るに、どうやらルフィ達の居場所を探つていたみた  
いね。

「悪いわね、ここから先は通すわけには行かないわ」

「……知るか、通る通らないわ、俺の勝手だ…退け！」

言うや否や、足元に鎌鼬を飛ばして砂煙を立ち上らせるエリック。  
目眩ましで逃れようつて訳ね、そうはさせないっぽい！

「風魔……ッ!?」

螺旋弾で砂煙を散らそうとしたところに砂煙の中から鎌鼬が飛んでくる。  
なんとかそれを躊躇して着地する。

しかしそれを見越したように着地先に鎌鼬が飛んでくる。

「くっ…！」

その鎌鼬を躊躇し、エリックを探すと建物の上を忍者のように駆け出していた。  
あくまで狙いは龍じいってわけね？上等っぽい！

そつちかその気なら相手する気になるまで徹底的に邪魔してあげる！

螺旋弾を連射しながら私はエリックの後を追った。

またしばらく走っていると、今度は木を斬り倒して邪魔してきた。  
そんなものじや私は止まらないっぽい！

風を操り、倒れてくる木を高速回転させるとエリックへと打ち返す。

「……んなつ!?」

【ゴチインツ！】

高速回転しながら戻ってきた木の枝にヒットし、屋根の上から落下するエリック。

「やつと追い付いたっぽい…。今度こそパーティーに付き合つてもううわ」  
再び風の剣を突き付け詰め寄る。

これで、後はルフィ達が船まで無事にたどり着いてくれれば……。

「でもその前に…こっちの仕事はをしなくちゃっぽい」

今まで展開していた風の剣を霧散させ、周囲の風を操つて小規模の竜巻を起こす。

「な、何をするつもりだ！」

「また邪魔しに来られても面倒だから飛んでつてもらうっぽい！『風魔 翔龍風』!!」

「なっ！ クソッ離せ!! 俺は竜骨を手に入れ、完璧なエリックにいい！ぎやあああああつつ!!」

「完璧にならなくともいいからお星さまにでもなっちやうといいつぽい」

竜巻に飲み込まれ、空高く打ち上げられたエリックが見えなくなつたのを見送つて、私は船へと戻つて行くのだつた。

# 破れネルソンの陣！榛名の本領発揮！

s i d e ハルナ

「くあつ… 疲れたっぽい…」

船へと戻ってきたユウダチちゃんが伸びています。

「お疲れ様ユウダチ、よく無事だつたわね」

「流石は今回の相手はちょっと堪えたわ… ちょっと休んでるっぽい」

「ええ、ゆっくり休んでね」

「こんには、ハルナです。」

私達を逃がすためにエリックと戦っていたユウダチちゃんが先程戻つて来て、私達は船を出しました。

次に向かう先は私達がはじめにいた島、軍艦島です。

再び大嵐の海を抜け、私達は軍艦島へと船を進めます。

嵐を抜けた先では先程の海軍の船が待ち構えていましたが、それを振り切るように私達は軍艦島を目指します。

そんな中、慌てて私達を追いかけ始めてきた軍艦を見てウソツクスくんが言います。

「うつほー追つてきた追つてきた!あいつら追いつけねえぜ!」

「確かに、海軍の軍艦よりかは船足は早いけど……ねえ、軍艦島に着いたらどうするつもり?」

ナミが提ト・ルフイくんに問いかれます。  
しかしルフイくんはといえば……。

「だいじよーぶ!」

「だから何がツ!!」

「ルフィ、何か作戦があるっぽい？」

キレるナミと何があるのかと期待したように聞くユウダチちゃん。

「アイツらより先に龍の巣を探し出して、龍じいが元気になればいいんだろ？」

「それは… 言うだけなら簡単でしようけど… そう上手くいくとは思えないわよ？」

「姉さんの言う通りだ、ルфи、龍の巣は海の底に沈んじまつてるかもしれないねえんだぜ？」

「じゃあ、海の底探がしゃあいいじやんか」

「ルфи、カナヅチなのにどうやつて海の中探すっぽい？」

きつとルフィくんのことですから大して深く考えてはいらないんでしようね……。

「とにかく！ 少しでも早く戻らなきや！ 海軍とトラブルつてる暇はないわ」

そうして船足を少しでも上げようとした時、ふと電探が複数の反応を捉えました。

「…ナミ、悪いけどそろは行きそろはないみたい…敵よ」

「え?…つ?」

私の言葉の直後、ナミは前方を見て驚愕した様子を見せました。

そこには一際大きな軍艦が待ち構えていました。

「すっげー!鬼瓦みてえ!」

「ルフィイさん…そこは反応するところじゃないと思います…」

ルフィイくんの言葉にジンツウさんが控え目にツツコミを入れます。

そう、驚くのはそこではないんです。

電探には相当な数の反応があるので一隻だけしか見当たらぬのか……。

何處かに隠れているのでしようか……。

そんなやり取りをしている間に、巨大軍艦の背後から複数の軍艦がぞろぞろと現れた

ではありますか！

軍艦の群れは互いを鎖で繋ぎ、隙間がないように私たちの前へと立ち塞がります。

「…なるほど、そういうことだつたんですね」

そつちがその気なら、私にも考えがあります。

「どうしよう…挟み撃ちにされちゃう！」

「船に飛び移つて奴らを蹴散らして鎖を斬る！それしかねえだろ」

「いいえ、ウソップくん、それなら私にもつといい考えがあります」

「え？なんだよハルナ！何か考えがあるのか！」

「はい！ハルナにお任せください！」

「おお！任せたぞハルナ！ルフィもそれでいいか？」

「ああ！姉ちゃん思いつきりやつてこい！」

「はい！江ノ島鎮守府所属第二艦隊、榛名！全力で参ります！」

そうして私は艦装を展開して海に降りると、軍艦の方へと近づいていきます。メリーア号と軍艦の中間まで来たところで私は航行を止め、軍艦達に向け手を翳します。

『アクアコントロール マリンサーメント』

その言葉と共に私は能力を発動させます。

すると、軍艦の構えている部分の海面が蛇が蟠局を巻くように大きく渦を巻き始め、軍艦達を巻き込みながらその勢いを強め始めました。

突然の出来事に慌ててその場から離脱しようとする軍艦達でしたが、鎖で繋がれていることで舵を取ることも叶わず、大した抵抗をすることもなく海中へと姿を消していきました。

後には大きく渦を巻いた海と、後方でその様子を見ていた巨大軍艦だけとなっている

の  
で  
し  
た。

# 竜の巣は何処だ！目覚めよ千年龍！

s i d eナレーション（霧島）

こんにちは、金剛型四番艦、霧島です。今回は私がナレーターを務めさせていただきますね。

提督 ネルソン・ロイヤルの包囲網を自身の能力でいとも簡単に突破したハルナ達一行は最後に残った一隻である、ネルソンの乗る軍艦と対峙していた。

「ぐううう…ツ!! ゆ、許さん！ 許さんでおじやるぞ！ 野蛮な海賊如きが！ よくもワシの艦隊を沈めてくれおつてえ!!」

艦隊を率いるネルソンはそれを見て怒りを滾らせ、その巨体を震わせていた。

「ええい！ 奴らを叩き落とすでおじやる！ 超巨大砲の準備をせい!!」

「はっ！」

ネルソンの支持で近くにいた水兵達が超巨大砲発射の準備を始めていく。

やがて準備が整つたのか、走り回っていた水兵の一人がネルソンの前に報告にやつて来る。

「超巨大砲の準備！ 整いました！」

「ならばすぐ撃てい！ 奴らの船を叩き潰すでおじやる！」

その支持を聞き、水兵はすぐ様発射に取り掛かり、前方の海賊船目掛けて発射した。



「ちよつ…なんのよアレ！」

船に迫つてくる超巨大砲弾を見てナミが絶句した声を上げる。

「おおーっ！ でつけえ弾だなあ…」

「んなこと言つてる場合か!! どうにかしねえとこの船沈められんぞ!!」

「沈む!? そりややべえ!!」

サンジの言葉に呑気に玉を見ていたルフィも慌てて迎撃しようと動き出す。そんな中、迫りくる砲弾に向けて動き出している者が二人。

「勝手は、ハルナが！ 許しません!! 『防水海門』<sup>マリン・ウォール</sup>!!」

「船には傷一つ付けさせないっぽい！ 『風遁 暴風壁』<sup>ウオール・ストーム</sup>!!」

迫りくる砲弾に、海水と風で創り出した巨大な壁が形成される。しかし、砲弾の質量と勢いを阻むことは出来ず。砲弾は壁を突き破り、船へと迫つてきた。

「ダメっぽい!! … ツ!! それなら！ もう一回！ 『風遁 暴風壁』

再度夕立が風の壁を作り出す。

今度は真正面からではなく、ナナメに形成し、砲弾の軌道を逸らす。

風の流れを利用して、軌道が逸れた砲弾は、船の横スレスレで落ちる。

直後、巨大な上がる水柱と波。高くなる波に船が煽られ船が大きく傾く

「いけません！『海縄水・集!!』<sup>マリンコントロール・ロー</sup>

それを防ぐため、ハルナが能力を発動し、上がる波を操り、なんとか横転を阻止する。

「ちよつと！あんなのどう対処すりやいいのよ！あんなの食らつたらひとたまりもないわよ!!」

「そう何度も同じ手が通じるとも思えねえ、早いとこあの大砲をなんとかしねえと！」  
焦るナミにサンジが賛同する。

「オレに任せろ!!オレの大砲でアイツをぶつ壊してやる！あんな奴にメリーエ号を壊させてたまるか!!」

そう言うとウソップは大砲の元へと走っていく

「へッ、目には目をだ！こつちだつて一発目お見舞いしてやる!!」  
そうしてメリーエ号の大砲から一発の砲弾が撃ち出される。

撃ち出された砲弾は、山を描きながら軍艦に向かって飛んでいき……。

軍艦の超巨大砲の砲身の中へと侵入し、超巨大砲の弾を巻き込み大爆発を起こした。

【ボッゴオオオオンツツ】

盛大な爆発音を響かせ超巨大砲の砲身がひしやげる。

「いよーっし！どんなもんだ！オレが本気になりやこんなもんよー！」

「やるじゃないウソップ！わたしも負けてられないっぽい！」

夕立がウソップに感化されて艦装を展開して海へと飛び出していく

「ちよつと夕立さん！！……仕方ありません、私も行きます」

一人突っ込んでいつた夕立を追つて神通も艦装を展開し出していく。

それを見たネルソン・ロイヤルはギョツとしたように声を上げる。

「なつ・なんなのじやアイツらは！なぜ船もなしに海の上を走っているのでおじやる！？」

「わ、わかりません！真っ直ぐこっちに向かって来ます！！」

「ええい！なんだか分からんが撃てうてえ!!奴らに近づけさせるでないぞ!!」

二人を近づけさせまいと、ネルソン側も必死で副砲を撃ちまくる。

しかし機動力のある駆逐艦と軽巡洋艦。

そんな珠に当たる訳もなく、着々とその距離を詰めていく。

「そんな見え見えの弾当たらないわ！さあ！最高にステキなパーティーしましよう!!」

「タ立ちゃん、無理しないで。主砲、撃ちます！」

タ立とそれを諫めつつも、同様に艦装から砲撃を繰り出す神通の二つの砲弾が、寸分違わずネルソンの軍艦に吸い込まれるように叩き込まれる。

深海棲艦や鉄製の軍艦ならいざ知らず、木造の船など艦娘の砲撃を食らった時点でただの木偶の坊と化す。

二つの砲弾を受けたネルソン軍艦は瞬く間にその姿を崩壊させていく。

「なつ…：何故じや!! 何故余の軍艦があのような一撃で壊されねばあ!! むうぎわらああああッ!!」

そんな最後の絶叫と共にネルソン・ロイヤルはグレー・テルと共にその巨体を海へと沈めて行くのだつた

◆◆◆◆◆ side change ◆◆◆◆◆

「うつはー!! すつげえなアレ！ タ立のもスゲえけど、ジンツウのもスッゲーぞ!!」

「なんとかなつたみたいね…： というか、姉さんの然りだけど…： ギソウの威力つて、並の船には効果絶大ねえ…：」

ネルソン軍艦が沈んで行くのを確認して、ナミと提t…： ルフィくんがそんな事を言

い  
ま  
す。

「そうね……きっと艦隊戦なら負ることは殆ど無いでしょ？」

この世界には深海棲艦も鉄の軍艦も、私の知る限りでは見たことがない。

それならば艦装の砲撃を一撃でも叩き込んでしまえばそれは相手にとつて致命傷になります。

あの大きさの軍艦で夕立ちゃんのみの砲撃なら分からぬけど、神通さんとの一斉砲撃であれば確実に撃沈し得ることも可能でしょう。

と、そんなことを考えていた時です、突然船が大きく揺れ始めたのです。

「なつなに……？」

「敵の攻撃……はありえねえか、じゃあ今このコレ地震かなにかか？」

私の言葉に返すようにサンジくんが推測を話します。

私たちが訳が分からぬでいた時でした。

不意に海の中の景色が変わったと思うや否や、そこには広大な陸地が浮上してきていたのです。

「…… グルオオオオオオオオオオオオオツ!!」  
それを目にした龍爺さんは不意に立ちあがり、空へ向かって鳴き声をあげ始めました。

「なつ… 龍爺が!!!?」

「おいおい、いつの間に動けるようになつたんだ？あの爺さん…」

驚くルフィくん達の声が聞こえて来ますね……。

かく言う私も、いきなりのことでの頭の理解が追いついてないんですけど……。

そんな中、更に驚くべき事態は起こります。

「ん？… おい！向こうになにか見えるぞ!!」

そんなウソツップくんの言葉に空を見上げてみます。

するとそこには、空いっぱいの千年龍の大群の姿が!!

「なあつ…  
!!!?」

「ウソ…何この数…」

「こんなにいたのか…!?爺さんの仲間達ってのは!!」

「龍爺さん…あなたは一人じやなかつたんですね…」

ウソツプくんやナミ達がその光景に呆気に取られています。

「… !! 龍爺… ツ!!」

「…………」

嬉しそうに話すアピスちゃんを龍爺さんは今度は一声も鳴かずに見つめます。

「えつ…今までありがとうつて…何言つてるの…どうし…」

アピスちゃんがそこまで言いかけたその時でした。

【ズズウンツ…】

立ち上がった龍爺さんがその巨体が崩れ落ちてしまったのです。

「…………え…………？ 龍爺！ 龍爺！！ なんで！！ なんでよ！！」

「…………」

崩れ落ちた龍爺さんはピクリとも動きません。

「龍の巣に戻れれば元気になるって言つたじやない！！ なんで！！ アレはウソだつたの？」

「…………」

すると龍爺のひとみが微かに開き、アピスちゃんを見つめます。

「えつ…………うん…………そう…………なの？」

「…………」

「ホントに？ ホントにまた元気な姿を見せてくれるんだよね？」

[...]

「……うん、分かつた。なら、私泣かないよ。もう会えないわけじゃないから！」

アピスちゃんのその言葉を聞いて安心したのか、龍爺さんはその瞳を閉じて、動かなくなりました。

「ええっ！……っ！」

それを見守つたアピスちゃんは必死に泣くのを堪え、浮上してきた大陸に降り立ちます。

「お、おい！アピス！」

「私達も降りてみましょう」

アピスちゃん達の後を追つて私達もその陸地に降り立ちます。

「つ！（ピタツ）」

ズンズン先に進んで行くアピスちゃんが不意にその足を止めました。

疑問に思つた私達が、アピスちゃんに近づきその視線の先にあるものを見てみると、そこには一個の卵が孵るところでした。

「……ピギヤアツ……ピギヤア」

そしてそこから産まれたのは千年龍の子供でした。

その子供は他の千年龍達に囲まれて世話をされています。

そんな中、ふと子龍がアピスちゃんの事を見詰めてきたのです。

「……つ！うん！うん！」

子龍はアピスちゃんに何かを語り掛けてきたようで、アピスちゃんは泣きながら強く頷いていました。



こうして再開を果たしたアピスちゃんは何か納得したような、覚悟を決めたような表情で戻つてきました。

「アピス、もう大丈夫っぽい？」

「アピスちゃん……」

夕立ちゃんや神通さんが心配そうに問いかけます。

「うん、もう大丈夫！それに、決めたんだ。私は今まで『先祖さま達が守つてきたこの龍の巣を、そして千年龍龍達を守つていくって』

その瞳は小さいながらも熱い情熱を秘めているようでした。

そう、まるで私達姉妹のお姉様。金剛型一番艦の金剛お姉様のように……。

「そつか、じゃあここでお別れだな」

「うん、ルフィイ達と別れるのは寂しい気もするけど、私も私の役目を果たすよ」  
そう言うとアピスちゃんは、今度は私の方を見て言います。

「ルフィイっていつも無茶なことしかしないから、ハルナお姉さん、しつかり見守つてあげてね」

「……ええ、そうね、アピスちゃん。私がいる限り、ルフィに無茶はさせません。約束です」

た。 そうして私はそんな約束をアピスちゃんと交わしたあと、軍艦島を後にするのでし

「行つてしまひましたね。」

私は、島を出ていく一隻の海賊船を見つめながら呟きます。

「ジンツウ姉ちゃん、ホントに行かなくてよかつたの? ハルナお姉さん達、知り合いだつ

たんでしょ？」

アピスちゃんが私の様子に気がついて声をかけてきます。

「ええ、私はこの島を守らなければいけないという役目もあります。それに、無茶をするアピスちゃんを諫めないとけませんから」

「…本当に、それで良いのか？」

「え？」

不意に口を挟んできたのはボクデンさんでした。

ボクデンさんはいつにもなく真剣な眼差しで問いかけてきます。

「本当は彼らと共に行きたかったのじゃろう？ならば行け、アピスの事も村のこともワシらに任せておけ」

「いえ、しかし…」

「そこまで心配しなくてもよい。ワシらだつて弱くはないんじや、それに、お主はワシの孫みたいなもんじや。その孫の希望くらいは叶えてやりたいんじやよ」

「……ボクデンさん。ありがとうございます」

そう言われてしまつたらもう断れないです……。

「ホレ、急いで行くんじやよ！お主のアレであれば、まだ彼らに追いつける事じやろう」「はい！……今まで、本当にお世話になりました！」

私はペコリと頭を下げ、艦装を開け、麦わらの一昧海賊船の後を追いかけるのでした。